少女さとり ～ Saint Girl's Territory

冥界寺吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少女さとり　～　Ｓａｉｎｔ　Ｇｉｒｌ'ｓ　Ｔｅｒｒｉｔｏｒｙ

【Ｎコード】
Ｎ７１６９Ｆ

【作者名】
冥界寺吹雪

【あらすじ】
あの子の小説、本格始動開始です。地底で一人暮らす少女と人間がおりなすハートフルでもないお話をどうぞご堪能下さい。

序幕

古い時代、人間と妖怪は実に親密な関係にあった。
それは、互いの力を競い合い高めていくという表立った理由がある他、人間同士のように人と妖との間に親交を持った者が数多くいたというのも立派な理由になるだろう。家系に幸運を呼ぶ座敷童子、悪戯もさることながら子供達の遊び相手として親しい河童、山に立ち入る強者と力比べを好む烏天狗、忍者の原型ともされた鬼・・・。これらの妖怪の存在は、少なからず人間の進歩を助長した。しかしながら、それは妖怪達にとってはマイナスでしかなかったのだ。
人間が科学技術を発展させていくと妖怪達の住家は次第に奪われていき、それによって人間は妖怪の存在を忘れていった。人間に認知されなくなった妖怪はその存在意義を失いさらに居場所を失う。したがってさらに人間は妖怪の存在を否定するようになって・・・。

そして今のご時世、人間は妖怪の存在を完全に忘れ去ってしまったのである。

雨が降りしきっていた。滝のような雨がコンクリートの黒を更に深めようと打ちつける。
真冬の夜。身のしみるような寒さの中、一人の男が暗い夜道をひたすらに走っていた。傘もささずに鞄を頭に抱え、厚手の黒いコートを靡かせている。すでにずぶ濡れの様子だったが、それに追い打ちをかけるように雨は一段と激しさをましていく。

「つー、まいったな」

どうやら男は青年らしい、まだ若い声で誰に言うでなく呟いた。
チカチカと点灯する街灯が淡くコンクリートを照らす。白い機械的な光は何の温かみも持ち合わせていないようで、男は恨めしそうに街灯を一瞬見ると、また雨を避けるように頭を下げる。
一台車が通り過ぎると、氷の中を駆け巡ってきたような冷たい風が、既にかじかんだ手や頬に針で貫いたような一撃を与えていく。息も荒れてきたようで、吐き出される白い息の間隔が短い。

「止めばいいんだが・・・」

男は言うと、脇道にひっそりと構えるバス停へ逃げるように走り込む。木造の古い屋根は、それでもしっかりと雨を防いでくれるようなので男はホッと一息をついた。腕時計を見ると針は午後９時半。続いて時刻表に目をやると、今から最も早いバスが１０時過ぎとなっている。まだまだ時間はある。男はゆったりと塀に寄り掛かると腕を組み、時が過ぎるのを待つことにした。

屋根があるとはいえ、風は容赦なく男の身を襲う。水が滴るコートが余計に体温を奪い、かといって脱いだら脱いだで寒い。
寒さからなのか、突然男は眠気に襲われた。自分の器官ではないかのように瞼が重く、どんどんと視界が薄れていく。睡眠欲はあらゆ

る欲を超越する。男もまた例外ではなく、閉じていく瞼はそのまま無抵抗に閉まり、そのまま意識も失っていった。

第一話　人間と妖怪と（前書き）

それは数奇な運命のお話。

第一話　人間と妖怪と

酷い頭痛がして、大きく頭を抱えた。どうやら、随分と長い間寝てしまったらしい。寄り掛かっていた壁からゆっくりと離れようとして・・・そうして自分が今仰向けになっていることに漸く気付く。慌てて体を起こすと、そこはさっきまでいたバス停とは全く違う、薄暗い小さな部屋のようだった。部屋というよりは洞穴と言った方がいいだろうか、壁は土壁で、床は石畳で覆われている。四隅にひっそりと揺れる蝋燭が唯一の明かりらしく、照明器具といったものも見当たらない。

なによりわからないのは首元まで丁寧にかけられていたシーツ、そして場に似合わない柔らかな弾力性を持ったベット。・・・寝起きのせいか、頭がよく回らない。これはつまりどういうことだ。

とりあえず立ち上がり、ぐるりと室内を見回す。そして目に飛び込んできたのは石造の扉だろうか、あまり見かけないタイプの造りである。

まず、ここがどこなのかを確認したい。真っ先に頭を過ぎったのがそれだったので、取りあえず部屋を出てみることにした。

扉の向こうは先程の室内となんらかわりない風景で、土壁が延々と続く廊下の先は暗く、見えない。閉鎖的な空間では自然と不安が煽られるものだ。あまり居心地はよくない。早いところ抜けたいと思うと、自然と足どりも早いものになっていった。

「これは・・・」

思わず声に出してしまう。

長い廊下が漸く終わったかと思うと・・・これを何と表現すればいいだろうか。何本もそびえ立つ立派な石柱、何処までも続く大理石のような美しい石畳、いたる箇所に配置された松明。そして、その中央に堂々と構える何十本もの石柱に支えられる巨大な屋根に、しばし目を奪われてしまった。古代の神殿を彷彿とさせるその姿は思わず見上げて立ちくらみが起きる程だ。

それに目を奪われていたせいで、俺は思わぬ不意打ちを受けることとなる。

「どうやら、もう平気のようですね」

しっとりと落ち着いた声にも関わらず、思わず肩を震わせてしまう。人がいたのか、半分の安心と不安のさなか、振り返る。

そこには少女が立っていた。
それも、かなり幼い。見たところ、十歳前後と言ったところだろうか。
水色の、余り見かけないふわふわ裾が揺れるぶかぶかの洋服に、薄ピンクのスカート。
そして、胸元に固定された瞼のようなアクセサリーだろうか？それが非常に印象的だった。

さっきの声は、まさかこの少女のものなのか？

「・・・どうも、初めまして。私はこの地霊殿の主、古明地さとり。あなたはどうやら人間のようですが、どうしてここに？」

少女の口から吐き出された言葉は思いもよらないものだった。こんな少女が、この大施設の主だって？

「どうしてって言われてもな、何と答えればいいものやら・・・」

と、言葉を濁す。

「・・・どうやらいまいち状況がつかめていないようですね。まぁ無理もないでしょう。あのような場所で倒れていては」

「倒れていた？」

「ちょうどそこの刻印柱の辺りでしたか。ずぶ濡れでぐったりとしていたんですよ、あなたは」

「・・・そうだ、バスを待っている時に突然眠くなって、それで・・・」

「・・・バス？」

怪訝な表情で睨みつけてくる少女。聞き返そうと口を開くが、それよりも先に少女。

「・・・まさか、人間世界の人間？なるほど、だとしたらその見慣れない服装も納得できる」

「さっきから何を言ってるんだ、あんたは」

人間、人間世界。その言葉は俺には、まるで少女が人間ではなく、ここが人間の住む世界ではないように聞こえた。

「察しの通り、ここはあなたたち人間が力を奮う世界ではありませんし、私はあなたのような人間ではありません。そうですね、簡単に言うのであれば、『妖怪』といったところです」

「・・・妖怪！？」

つい声をあげてしまった。慌てて冷静になる。突然そんなことを言われて信じられるはずがない。そうだ、こいつは嘘をついているんだ。妖怪だって？誰がそんなことを信じると言うんだ。全く、下手な嘘だ。

「下手な嘘・・・そう受け取りましたか」

「！？」

なんだ、こいつ。何故、俺の考えていることが・・・。

「分かってしまうんですよ。何故なら私は『妖怪』だから」

・・・そういえば聞いたことがあるな。遥か昔、人の心を読むことができる妖怪の逸話を。確かその妖怪の名前は・・・

「覚（さとり）。現代の人間の割には、なかなか妖怪に対する知識はあるようですね」

「そうだ覚！って、また俺の心を・・・」

俺は少女の虚ろな瞳をじっと見つめて、

「・・・本当に、妖怪なのか？」

「・・・」

少女は答えなかった。その目は何故か、とても悲しそうな色で染まっていた。

さとりと名乗った少女が案内したのは、俺が最初に目覚めた部屋だった。あらためてみると極端に狭い部屋で、テレビや照明機器はおろか時計や窓すらもない。

「さあどうぞ。座って下さい」

と言うとさとりはベットに腰を据える。俺が寝かされていたベットだが、こうして見るとかなり古いもののようだ。ぼろいというよりはアンティークと言った方がいいだろうか。丁寧に扱われているのかとても綺麗ではあるが、見たことのない花のような刻印が刻まれていて少なくとも最近のものという雰囲気ではない。

「さて、どうやら私に聞きたいことが山のようにあるようですが・・・。どれを聞いても、私は構いませんよ」

確かに聞きたいことは色々あった。ここ地霊殿のこと、ここから帰る方法、そしてなにより気になっていたこと・・・。

「あんたは、ここで暮らしているのか？」

さとりは意外そうに目を細める。

「ここの地霊殿を管理して数百年といったところです。普段はこの部屋で生活しているんですけどね」

「こんな狭い部屋でか？」

「狭いと感じたことはありませんが。寧ろこれ以上広いと落ち着かないのですよ」

話していると、人間と話すのと何らかわりないことに気がつく。勿論その口調は容姿と掛け離れたものだが、その点を除けば彼女が妖怪だなんて信じられない。

少女は続ける。

「そういえば、あなたの名前を聞いていませんでしたね」

「・・・あ、ああ。そういえばそうだったな。俺は、月蔵貫斗（つきくらかんと）。二十年程人間をやってるよ。あんたはどれくらい生きてるんだ？」

「私ですか。あまり気にしていないので定かではないのですが、千年は生きていますね」

「千年！」

純粋に驚いた。こんな子供のような格好をして、ある種の詐欺じゃないのか？

「見えないな。妖怪ってのはみんなそうなのか？」

「妖怪にも色々な種類がありますからね、それによって容姿もまた異なるのですよ。私の場合は長らく外界で活動していないのでどんな容姿であれ、これといった障害はありません。寧ろ人間の大人のように大きな体型だとその分エネルギーも余分に消費してしまいますから、このような幼い体型が最も効率的なのです。それにこの方が、他人受けもいいですし」

「・・・なんだか納得出来るようなできないような」
「ある程度は嘘ですから、納得しなくていいんですけどね」
「嘘かよ！」

・・・もしかしておちょくられているのか？さとりは口元を緩めると、ほんの僅かに笑ってみせた。

「それで、他に聞きたいことは？」

彼女の方からせかすので、お言葉に甘えて質問を続ける。

「ここにはあんた以外誰もいないのか？」
「近くにはいませんね。少し離れたところにペット達がじゃれていると思います」
「ペットなんて飼ってるのか。一体何の」

と言って言葉を切る。妖怪が飼っているペットだ。その辺で買えるような犬だとか猫だとかとは訳が違うんだろう。もっとこう恐ろしい、悍ましいペットに違いない。

「とんだ偏見ですよそれは。まぁ確かにちょっと変な子もいますけど」
「あれか、使い魔のフクロウとかか？」
「それは魔法使いしか飼いませんよ。そうですね、猫とか鴉なんかです。ある程度は放し飼いになっているんで特別世話をしている訳ではないのですが、たまにじゃれてくるとかわいいものですよ」
「へぇ、是非とも見てみたいものだな」
「そうですね、私も三十年程姿を見ていませんし、そろそろ様子を見に行ってもいいかもしれません」
「・・・死んでるだろそれ」

「さっきも言いましたよ。ちょっと変な子もいる、と」
「突然見たく無くなってきたな」
「ふふふ・・・さぁ、こちらへ」
不敵な笑みで小さく笑っていた。

先程の刻印柱を抜けて更に下の階段を下る。だんだんと気温が高くなっているようで、インナーに汗がにじむ感覚がなんとも気持ち悪い。さとりは心なしか楽しそうにステップを踏んでいた。

「こりゃまた随分と荒れてるな」

そうしてたどり着いたのは、倒壊した石柱が散乱する閑散とした場所だった。ちょうど終戦後の日本の都市といったところだろうか、長い間忘れられていたような廃れた空間だった。天井は薄暗くて見えないが、多分存在するのだろう。さっきから足音がどこからとも無く反響してくる。
最初の部屋といい、刻印柱の大広間といい、ここといい、どうやらここが地下の世界であることは間違いないようだ。

「で、どこにそのペットとやらはいるんだ？」
「・・・ほら、あそこにいますよ」
そう言ってさとりが視線を投げた先には・・・結論から言えば猫がいた。
「猫の目って、あんなにギラギラ光るものなのか？」
「光らない、普通は。人間はあまり力のついた動物を見たことがないでしょうから、この子の遊び相手になるのは大変かもしれないですね」
言い終わると同時、その猫は突然直視できない程の強烈な光を纏ったのだ。思わず手で目を覆ってしまったがその発光は一瞬で、次に猫を見た時には驚愕し、声を上げてしまった。
「人間！？」
そう、目の前にいたはずの猫の姿は綺麗さっぱりいなくなり、代わりに頭に猫のような耳を生やした少女が立っていたのだ。見た目年齢でいうと俺と同じか、それ以下ってところだが、三十年姿を見ていないってことは実際それ以上は生きているだろう。俺からすればペットというか、立派な妖怪である。
「久しぶり、お燐（おりん）。元気そうでなによりです」
「いやー、ご主人様じゃないですかー！お久しぶりー。また今日はどうしたんで？」
はきはき喋る猫だった。ペットは基本的に喋らないような気もするが、この際気にしないことにする。

「わぉ、これはなんですかい？新しい死体？」
と、お燐と呼ばれた少女は俺の方を指指して言う。
「おいおい死体扱いかよ」
「しかも粋がいいときた！これはあたいへのプレゼントで？」
「そうです」
「おい」
「冗談です」
死体集めるのが趣味の猫たぁ、これじゃまるで・・・
「へぇ、火焔猫（かえんびょう）のことも知っているんですね」
「・・・。てーこった、やっぱりこいつも妖怪な訳だ。全部実在してたんだな、俺はてっきり昔話かと思ってたよ」
「・・・あながち間違いではないんですけどね」
小さく俯いたのには気付いていないことにした。
「あんさんはなんだい、ただの人間・・・なんてことはないよね？」
お燐は尻尾をふりふりと左右に揺らしながら聞いてくる。俺が答えようとするが、その必要はないようで、
「察しがいいですね、お燐。そうです、彼は人間世界からやってきた人間です」
「に、人間世界から！？」
大袈裟に驚くお燐。なんだなんだ、ここじゃあ人間はそんなに珍し

いものなのか？

「いややー、初めて見たよ生の人間さんなんて。こんな地底までよくきなさった！ささ、この地霊殿の案内はお姉さんにまっかせなー！」

「案内っててええ！？」

ものすごい力で腕を引っ張ってくるものだからそんな声をあげてしまった。助けを求めようとさとりに視線をやるが、ひらひらと手を振られてしまってはがっくりと肩を落とすしかない。

「わわわ、分かったから走るなってぇ！」

結局、意気揚々と走りだすお燐にぬいぐるみのように扱われる羽目となってしまったのである。

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・」

「これにて案内終了だよ！またのご利用お待ちしとりますっ」

最初から最後までテンションＭＡＸだったお燐に当然ついていけるはずもなく、息は絶え絶え足はボロボロ。何と言うか、とりあえずどうみてもペットではないことだけははっきりしたな、うん。

「どうでした、お燐との観光地巡りは」

・・・少なからず分かったことはあった。まずはこの辺り一帯が、昔は『地獄』だったと言うこと。悪行を重ねた人間が死んだ時に行き着くと言われる、あの地獄である。直接お燐から聞かされた訳ではないが、旧血の池地獄跡やら旧針山地獄跡やらを巡らせられればそう思わざるを得ない。
第二に、この地霊殿付近には殆ど生物が住み着いていないこと。二時間程回ったが、特に誰とも会うことなく廻りきってしまったからである。跡地ということだけあるのだろうか、寂れてんなぁ。
第三に、これはお燐から聞かされたことなのだが、地霊殿が旧地獄を封印する目的で建てられたということ。詳しくは聞けなかったが、地上へ出ようとする地底の者を取り締まるような役割もしているらしい。

「なるほど、お燐、よくやってくれたようですね。ご褒美に今度処分する死体の中から好きなのを持って行きなさい」
「本当かいなご主人様！くぅー、死体があたいを呼んでいるーっ」
速い。目にもとまらぬ速度でお燐は走り去っていってしまった。あの速さは猫ってレベルではない。

「疲れたようですね。まずはお礼を言わせてもらいます」
さとりは畏まって言う。

「お礼？」
「先も話した通り、お燐とはもう長らく会っていなかったもので、こういう楽しみが必要だったんですよ。どうやらうまくやってくれたようですし」
「あ、ああ。ただ振り回されていただけだったがな」
「それでいいんです。彼女はそういう性格ですから」

微笑むさとり。それに合わせて俺も、そうみたいだなー、と笑ってみせた。

「・・・それでは、そろそろ本題といきましょう」

「本題だって？」

首を傾げてみせると、さとりは無表情で答える。

「あなたは人間世界からやってきました。では、人間世界に帰らなければなりません。それは分かりますね？」

あらたまって聞くことでもないようだが、とりあえず頷いておく。

「あなたがどういう経緯でこの地霊殿に迷い込んでしまったのかは分かりませんが、本来ここは人間世界の者がいてはいけない場所です。まず地底を抜けるだけでも、大変な苦労になるでしょう」

「苦労って・・・またどうして？」

「地底には人間が忌み嫌う妖怪が蔓延っていますから、彼らに攻撃されるかもしれません。先程のお燐だって、あなたが私と一緒にいなかったら何をしていたか分かりませんよ？」

「・・・物騒だな」

「地底とはそういうところですから」

・・・発見してくれたのがさとりでよかったぜ全く。

「問題なのは、例え地上に出られたとしても人間世界には帰れないということです」

「・・・なんだって？」

一瞬　耳を疑った。地上に出てもそこは人間世界ではない。・・・どういうことだ？

「この世界はあなたたち人間の住む世界から隔離されてしまっているのですよ。だから私はあなたがここにいること自体が未だに信じられないのです」

でも、おかしいじゃないか。俺は少なくとも元の世界からここに飛ばされた訳だ。なら、その逆だってできないはずはない。

「その通り、戻る方法がない訳でありません。ただ、その方法が非常に厄介なのです」

「なんだ、また襲われるのか？」

「地底で襲われる分には私がついていけば問題ありません。しかし、地上となっては話も変わってきます」

さとりの表情が険しいものになる。

「地上の者と地底の者はお互いに干渉しないという契約があるのです。したがって私は地上からは案内することが出来ません。正直な話、今地上の妖怪達があなたのような人間に友好的とは思えませんので、地上へ出るのは非常に危険なことになると思います」

「地底からは元の世界に帰れないのか？」

「まず無理です。人間世界に帰るには、とある地上の妖怪の力を借りるしかないでしょう」

帰るには地上の妖怪の力を借りるしかない。しかし地上にはいけない。それって要するに・・・

「ええ、帰れませんね」

「さらっと言うなさらっと！」

事実を突き付けられるとやっぱりげんなりするな、もう。

「冗談です」

「冗談かよ！」

ふふふ、と息を漏らすさとり。やっぱり俺、馬鹿にされてるのかなぁ・・・。

「戻るのが苦しいのは事実ですけどね。とりあえず今日は疲れたでしょうし、ゆっくり休んで下さい」

・・・確かに某猫さんのせいで疲労しまくりなのは事実だ。ここはお言葉に甘えて休ませてもらうとしますか。

最初に寝ていた部屋。さとりはそこへ俺を連れてくると、木製の真新しい椅子に腰掛けた。

「ベットは使ってくれて構いません。寝ている隙に襲ったりはしませんから、ゆっくり睡眠を取って下さい」

「・・・いいのかよ？お前はどうするんだ？」

「私のことは気にせずに。色々とやることがありますから」

そうなのか、と頷いて見せる。やること、というのが気になったがあえて聞かないことにしておく。気にはなるが、妖怪が夜にやることだ、聞かない方が身の為な気がする。

さとりが部屋を出ていくと最初に目が覚めた時と同じ、薄暗い簡素な空間が視界を支配した。ベットは弾力性もそこそこで安眠するには十分な環境だったが、それでも何故か落ち着かない。他人の部屋というのはそういうものなのだろうか。

思えば他人の家で寝るのは初めてだった。路頭に迷わされるよりはよっぽどといいが、イマイチ寝付けない。

「・・・っし、散歩でもするか」

呟いた。もう少し歩けば、歩き疲れて眠くもなるだろう。それにあのお燐とやらに案内されなかった場所も興味がある。

そうしてやってきたのは刻印柱のある大広間である。

旧地獄のあらゆる施設はここから繋がっているらしいのだが、どこがどこに繋がっているのやら。案内板の一つや二つ置いて欲しいものだ。とにかくお燐に案内されなかった道を選択し、歩く。今まで

と変わらない、土壁の細長い空洞に不気味なろうそくの光が揺れているといった感じである種のお化け屋敷といった雰囲気を醸し出している。
5分程歩いただろうか、漸く広間のような空間にたどり着いたのはいいが、何と言うか、実に簡素な部屋だった。
中央に備え付けられた縦長のテーブルといくつかの椅子。
あるものをと言えば本当にその程度で、明かりすらも両サイドの出口付近に取り付けられたろうそくの明かりを拾っているという有様である。何をする部屋なのだろうか、考えていると次第に近づいてくる足音が聞こえてきた。それも複数。おそらくさとりやお燐のものではないだろう。慌てて反対側の通路に身を潜めた。

「やや、今日は一段と盛大にやろうじゃないか」
「おう兄貴。酒宴なんて久しぶりだからな、特別に地底百選の地酒を用意したぜ」
「準備がいいなーおいおい！俺もつまみになるもんなら大量に持ってきたからな。朝まで飲み尽くそうぜ、がはは」

男六人が口々に言うと、それぞれテーブルに備わる椅子に座る。テーブルにはいつ置かれたか焼酎瓶にイカ刺し、から揚げ、天ぷら等々酒宴には十分な準備である。髭をふさふさと生やした大男が焼酎瓶をあけると次第に歓声がおこり、あっという間に酒宴は始まった。
「うみゃーのうみゃーの！ほり、もっとのんべさ」
「おお、ちと間をおいた故、酒の味を忘れとったわいな。今宵はとことんいきしょーな！」
「このイカ刺じんべぇのか？絶品やでこいつは！次くる時も頼むでよ」
「こっちのから揚げもでらうまいど！おいなん、どんどん食いはれや」

酒が入った途端テンションは一変し、どこの方言だかわからないような言葉が入り乱れる。

「いやはー、毎日こないなことができれば幸せなんやけどなー」
「ふへはー、そりゃ無理無理！あの女がいりゃーそればっきゃーかなわーてさ」
「そりゃそうだわいなー。あれは鬼か悪魔だわい。見つかったら三途送りじゃすまないさー」
「ここの管理はてきびしーよなー。おちおち外出も出来んもんなー」
「せやせや、あれはきびしすぎやー。げんごにぃもたいやんもこの前捕まって三途送りにされたらしーで？」
「マジかー？そいつぁーごくろーなこったなあ。まぁわいならあの女子がきーてもすぱぱーと返り討ちにしたるわいな！」
「返り討ち、ですか。なかなか面白いことを言いますね」
「そやそや！あーんな鬼悪魔なんぞ一捻り・・・」

反対側の入口から聞こえてきた声に、男達は凍り付いたように身を固めた。

「主の断りもなしに宴会とはお気楽ですね。人の部屋で勝手に」
「・・・わわわ！ちち違うんやさとりさん！これには深い訳があってやな」
「宴会以前にあなたたちの存在そのものが問題です。早く成仏すればいいものを、余計な世話を焼かせないで欲しいものですね」
「そんなー、かんにんしてーなー」

問答無用と言った具合でさとりは男達に歩み寄る。男達は慌てて椅子から立ち上がり蜘蛛の子を散らすように逃げるが、時すでに遅し。

「成仏して下さい」

呟いたさとりの一言とどちらが早いか、さっきまで散々騒いでいた男達はなんの前触れもなく、跡形もなく消え去っていた。成仏ってーこった、あいつらは一体・・・。

「おや、貫斗さん。いたのですか」

名前を呼ばれ、そういえば隠れていたことを思い出す。

「彼らのことが気になりますか。いや、私の方が気になる、と」

次々に心を読まれていく。便利なんだか不便なんだか。

「そうですね、便利と言えば便利ですし、不便と言えば不便、と言っておきましょうか。少なくとも嫌いな力ではありませんが」

「でもあれだろ、聞きたくないことまで聞こえるんだから、ストレス溜まりそうだよな」

「流石に慣れましたよ。だからあなたが初対面の時に思っていた、気持ち悪い印象も気にする必要はありません」

・・・しっかり読まれていたか。

「で、でも。今はそんなこと思ってないぜ？ほら、あんた、優しいしな」

「・・・」

何故かさとりは一瞬押し黙ったが、

「・・・さっきの者は皆怨霊です。成仏出来なかった者の一部があのような怨霊になって、タチの悪いことにこの地霊殿に住み着くことがあるのです」
「怨霊、あれが？・・・怨みなんてなさそうだったけどな」
「ここの生活が気に入ったのでしょう。とはいえ、ここにあのような怨霊をほっておくといずれ地上に溢れてしまいます。私の仕事は彼らを見つけ次第、先程のように成仏させることです」
なるほど、そりゃ怨霊から悪魔だの鬼だの言われるのも無理はないってことか。

「・・・」
「・・・ん、あ！いやいや、俺は思ってないぞ？本当だって、嘘じゃないぞ！」
「・・・くすくす」
「な、なんだよ」
「本心くらい読めますよ。面白い人、くすくす」
「・・・またからかわれたのか俺・・・」
どうやら俺の慌てっぷりが相当さとりには面白かったらしく、部屋に戻るまでずっとくすくす笑いっぱなしだった。

「さ、今度こそゆっくり体を休めて下さいよ」

釘を刺され、むぅと唸ってしまう。確かに勝手に人の家を歩き回るのはよろしいことではない。

「そこまで気にすることもないですけどね。それでは、おやすみなさい」

そう言うとさとりは椅子に座り、静かに目を閉じる。

「そこで寝るのかよ。それは流石に悪いし、ベット使えよな」

さとりは目を閉じたまま動かない。なんだ、その早さで寝れるのか近頃の妖怪は。

「・・・今日だけなら、いいか」

気付けば意識は深い闇に落ちていた。

第二話　旧地獄街道を行く

何気ない感じで地獄入りを強いられてしまった俺は、何気ない感じで地底で一夜を過ごしてしまった。寝ている間に襲われるなんてことも無事訪れず生き延びることが出来たが、はたしてこれからどうすればいいのだろうか。

ベットからさとりを覗き込むとどうやらまだ眠っている様子。生きているのかさえ怪しい程に静かに、起きているのではないかと思う程姿勢よく寝息を立てている。寝顔は見た目相応にかわいいが、これが『他人受けがいい』ってやつか？
起こした方がいいものか、そんなことを考えいるうちにいつものしっとり声が目覚めを知らせた。

「・・・おはようございます、どうですか、ゆっくり寝れましたか？」
「おお、起きたのか。昨日はあれだけ歩き回ったからな、ぐっすりだったぜ」
「それはなによりです」

一間置いてさとり、

「・・・今日はどうしますか？帰る手だてを探すもよし、この辺りの観光をするでもよし・・・両方ですか、まぁそれでもいいでしょう」

無意識に考えていたことも読まれるとは流石だな。

「今日は私も仕事がないので色々と案内しましょう。そうですね、

旧地獄の外、つまるところもっと上の方なんてのはどうでしょうか」
「外って、例の忌み嫌われた妖怪が出てくるんじゃないのか？」
「そうなんですけどね。まぁ皆がみんな襲ってくるとは限りませんし、最悪私がいるから心配はいりませんよ」
頼もしいことを言ってくれる。どちらにしても元の世界に戻るには上を目指さなければならないのだから、その下見ついでに行ってみるのも悪くない。さとりもああ言ってることだし、ここはお言葉に甘えて
「決まりですね。それでは早速行きましょう」

何故かノリノリのさとりに連れられてやってきたのはぼんやりと淡い光を放つ街灯が連なった街道だった。先が見えない程長く、整備されている訳でもない煉瓦造りの地面はところどころめくれてしまっている。今までの流れから言うと、旧地獄街道と言ったところか。
「察しがいいですね。その通り、ここは旧地獄街道。今では殆どの者がここを訪れなくなりましたが、昔は活気溢れる商店街でした。今となってはその名残もありませんが」
「商店街って・・・妖怪は通貨を持たないんじゃないのか？」
「地獄には地獄銭という通貨が流通していた時代がありました。昔はその銭を貯めることで地獄での刑罰から逃れ、成仏することが出来たのです。まぁそれも地獄という存在自体が廃れてしまってからといったもの、何の価値もなくなりましたけどね」

「何だか国家の終焉みたいな話だな」
「そう言えなくもないでしょう。国が滅びればその通貨も廃れて当然です」
しかし、その廃れた国にさとりは残っている。ある種のナショナリズムってやつか？その辺を聞こうとしたその時だった。

「地獄の道ゆくお主ら誰ぞ？」
「盗っ人にあらず、悪人にあらず」
「正体明かさば問答無用！」

時代劇か戦隊モノのようなノリで三つの声がこだまする。子供なら喜びそうな展開ではあるが・・・。

「私は地獄鬼、力の星熊勇儀！（ほしぐまゆうぎ）」
「同じく、炎の焔炎綺！（ほむらえんき）」
「大地の鞍馬真奈（くらまま）」
「三人合わせて地獄の四天王、ここに参上！」

思い思いに華麗なポーズを決める三人。全員頭から角を生やしているところからするとどうやら鬼であることは間違いなさそうだが、何と言うかツッコミどころ満載である。

「・・・あなたたち、ここを根城にするのはやめて欲しいのですけど」
「誰かと思えば地霊殿の主じゃないか。何してるんだい、こんな上層で」
「それに随分と珍しい顔を連れてるじゃないか。うちらへの手土産

かい？」

手土産扱いされてるよ俺。

「ちょっとした観光ですよ。それに彼は手土産ではありませんから、下手に食べたら承知しませんよ？」

「ちっ」

ちって・・・。

「んじゃそいつはなんだよ。見たところ人間みてーだが？」

「人間世界からここに迷いこんだ正真正銘の人間です。元の世界へ戻すため、地上へ通じる手だてを探しているのですよ」

「人間世界から！？そいつぁたまげたな！通りで美味そうに見える訳だ」

「・・・」

無言で炎綺を睨むさとり。端から見ている俺でさえ背筋が凍る程の表情だ。

「・・・じ、冗談だってーの。別に食おうとは考えてないよ」

「考えていましたね、三人とも」

お得意読心術に顔をひきつらせる三人。流石の鬼であれど心を読まれるのは堪えるらしい。

「な、なぁ。この異様に威勢がいい三人組は誰なんだ？」

たまらず聞くと、さとりは澄ました表情で

「旧地獄を古くから徘徊している鬼たちです。一応旧地獄のいわゆる門番のような存在なのですが、何故ここに？」

と、さとりは三人の方に冷たい視線を送る。

「やだなぁそんな目で見るなよなー。実はさっき人間が下層に向かって飛んできたものだから、それの報告に行こうと思ったんだよ」

「・・・人間？」

さとりは眉をひそめる。というか人間って飛ぶか？

「そうなんだよ。ちょこっと力試ししてやったらこれが意外に強くてさ。酒を零さないように戦ってたんだが、結局二滴も零しちまったよ」

「勇儀ったらダメダメだなぁ。あたしだったら杯の酒どころか、手の平の酒だって零しはしないよ」

「炎綺の場合は零す前に蒸発しちまうだろーからな」

「二人ともダメなのはわかりました。その人間、目的とかはいっていませんでしたか？」

三人は顔を見合わせるが首を横に振るばかり。アテになりそうもない。

「そうですか・・・。戻って見れば手掛かりが掴めるかもしれませんね」

そう言うとさとりはため息まじりに元来た道を引き返そうと足を進めた。が、すぐに思い出したように足をとめて、

「貫斗さんはどうします？せっかくきたのですから、少し観光してみてはどうでしょう？」

観光か。まぁ色々見たいって気もなくはないが、変な妖怪に襲われるのがオチな気がする。この鬼たちだって、さとりがいなかったらあっさり食うつもりだったしな。

「その点はご安心を。彼女達に私の代わりをしてもらいますから」

突然視線をなげられた四天王もとい三天王は一瞬硬直する。

「・・・私達が？」

「また何故あたし達が？」

「理解に苦しむ、地霊殿の主さん」

思い思いの発言は、さとりの鋭い視線で一蹴される。一気に縮こまる三人にたっぷりと無言の威圧を与えると、

「・・・そりゃあさとりさんの頼みなら受けるとも、なあ兄弟！」

「え？え、えあ、当たり前！ここいらの地理ならこの炎綺様にまかせろってな、ははは・・・」

「右に同じく」

「そうですか、それではよろしくお願いします」

丁寧に両手を揃えてお辞儀を済ませると、さとりは身を翻して去って帰っていく。

「・・・食べてはいけませんよ？」

ビクリ、と鬼三人。

「ああ当たり前だろ。私達だって高貴な種族、そんなマナー違反はしないって・・・」

「心にもないことを・・・」

なんだかんだ言ってもこの鬼達、悪い奴らではなさそうだ。少なくとも某キャットのようにぶんぶん振り回されるなんてことをするような妖怪には見えない。

「・・・で、青年よ。名を何と申す？」

時代劇のような口調で炎綺が聞いてくる。

「あ、ああ。俺は月蔵貫斗。まぁ何と言えばいいか、ごく普通の人間だ」

「へぇ、そりゃ確かにこっちの世界じゃ聞かない名前だな。よっし、私らも改めて自己紹介といこうかね」

高らかーに拳を天（井）に掲げる勇儀に続き、炎綺も腕を振り上げる。

「私は勇儀。見ての通りここ、旧地獄で鬼をやってる。酒の飲み比べならそう簡単にゃ負けないよ」

「あたしは炎綺。同じくここに住む鬼さ。あたしの炎はそんじょそこらのとろ火とは訳が違うから、気をつけろよな？」

「・・・」

その後に続くはずの言葉はなかった。どうしたのかと勇儀が聞くと、

「・・・おいしそう」
「ダメーッ！！」

目をとろんとさせてこっちにむかってくる真奈を必死で押さえ込む勇儀と炎綺。勿論俺も慌てて距離をとる。

どっからどう見ても人間の姿なのに、鬼ってーのは怖いね・・・。

少し落ち着くと、弱々しく自分の服をはたきながら真奈。

「真奈よ。特技は食べること。じゅるるる」
「だからダメだってのー！」

暴走真奈を勇儀と炎綺が必死に押さえ付ける、さっき見た光景である。なんだ、今日中に俺は食われる運命なのか？さとりの加護も無くなったし、先が思いやられるなこりゃ・・・。相当ひきつっているであろう顔で、

「まぁ、よろしく頼むよ・・・」

力無く言うのが精一杯だった。

「旧地獄にきたらここは避けては通れない、旧釜茹で地獄っ！」

炎綺が高らかに発言する。

「今は心地いい温度の温泉になってるのか、なんと言う降格」

煮えたぎっている様子もないので手を入れてみたら人肌より少し温かい程度。釜の脇には名湯の文字がかかれた立て看板が立てかけてあった。誰が入るのか、誰が温泉に指定したのか謎は深まるばかりだが、いちいち気にしていては地獄ではやっていけない。

「いや、寧ろ昇格さ。ここ程湯加減のいい温泉は珍しいんだ。基本的に地獄の温泉は熱すぎるからな」

まぁ地底ってことはアレやアレなんかに近い訳だからな、熱いのは分かる。

「あー、そういえばあの人間、温泉がどうとか言ってたな」

不意に勇儀が発言する。

「本当か？なんだ、だったらここを教えてやればよかったのに」

「あの人間って、地霊殿に向かったっていう人間のことか？」

「そうそうそう。あんたに会った時はてっきりそいつの知り合いかと思ったんだけど・・・そりゃさとりさんにゃ悪いことをしたかねぇ」

「まぁいいんじゃない？あいつのやることなんて信用出来たもんじゃないしさ。人間のことも、あいつの家で何してくれようが私達の知ったこっちゃないしね」

炎綺は投げやりに言う。どうやらさとりは鬼達にはあまり好かれていない様子である。
しかし人間というのは気になるな。鬼と対等に渡り合えるとなると普通の人間ではないのだろうが、もしかしたら地上から元の世界に戻る手掛かりくらいは掴めるかもしれない。ふむ、やはり一度会ってみたいところではあるが、はたして友好的に話が進むだろうか・・・

「ほら、お前さんも早く入りなー」
「入るってブッ！？」

考え事中にかけられた勇儀の言葉で我にかえると、目の前の温泉には鬼三名が仲良く風呂に入っていた。まぁ、あれだわ。勿論全裸で。そうだな、最悪タオルくらいは巻いておいて欲しいものだぜ。いくら鬼ったって恥じらいはないのか恥じらいは。

「と、とりあえず遠慮しておくよ」

目をなるべく反らしながら苦し紛れに応える他なかったとさ。

「釜茹で地獄の後はここで決まり！旧焦熱地獄っ！」

勇儀の男気溢れる（？）声が地底だけに反響して響き渡る。焦熱地獄というがその温度はそれほど高くなく、寧ろ湿り気の強さの方を感じる。まぁあれだ、いわゆるサウナってやつ。

「風呂の後はここで一汗かくのがたまらんよなぁ！快適快適」

「勇儀流石、ナイスチョイス！こりゃ人間だろうと神様だろうと嫌いなやつはいないね」

・・・旧地獄観光というよりはただの温泉地巡りな気は薄々感じていたが、絶対に口には出せない気がするのであえてスルーしよう。

「ところでさ」

せっかくだから、鬼にも少し話を聞いてみることにする。

「さとりってのはどんなやつなんだ？」

「そりゃ変なやつだよ」

炎綺が一番に言うのを勇儀が制止して、

「お前さんの知ってるとおり、心の読める妖怪さ。他人に対してかなり厳しい奴で反論できる奴はまずいないな。正直言えば私から見てもよく分からないところが多くてね、地霊殿を使わせて貰ってる手前逆らえもしないし、本性は誰も知らないんじゃないか？」「あんたみたいな人間風情をよく食べずに世話してるもんだ。あんた運がいいなー」

「外からきた奴は誰だろうが追い払うか倒すかしてるもんな。怖い怖い」

信じられないな。俺のときはあんなベッドまで貸してくれたというのに。

「噂なんだろ？実際さとりはそうでもないさ。寧ろ優しいところの方が多いと思うぞ？」

奇妙な間が空いた。三人はお互いに顔を見合わせて、目を真ん丸見開いている。

「・・・本気で言ってるのかいあんた？」

眉をひそめ、炎綺が詰め寄ってくる。

「もしそれが本当なら悪いことは言わない、とっとと逃げたほうがいい。あんたをかくまってるだけでもおかしいと思っていたけど・・・それは異常だな」

「食うどころか追い返しもしないんだ。何かあると見て間違いはないな」

「間違いない、間違いない」

と言われてもな、頭を掻きむしって唸りこむ。さとりが何か企んでいる、少なくとも俺の目ではそういった様子はなかった。鬼の中での偏見なんだろうか、いや、鬼に限ったことでもないのかもしれな

い。

「・・・それじゃ、ご忠告だけは受け取っておこうかな。何か企んでると感じたらすぐ逃げさせてもらうよ」

「今すぐにでも逃げた方がいいんだけどね」

「なんなら、あたしたちが世話してやってもいいんだよ？あんた、見かけによらず頭がキレて面白そうだし」

「ははは、謹んでお断りします」

「さ、今日のところはこんなもんかね」

地霊殿、刻印柱の広場まで下って来たところで三人は足を止めた。

「ああ、ありがとなお三人さん。温泉巡り、楽しかったよ」

「おお？人間の割に話が分かるじゃないかー。またそのうちあんた交えて出掛けたいねぇ」

勇儀の言葉に炎綺もそうだねそうだねぇ、と頷く。何だかんだいって俺も結構楽しかったし、それには頷いて返答してやった。

「っと、あんまりここにいるとあいつに見つかっちまうな。そいじゃ帰るとしますか」
「それじゃーなー、いつでも逃げてこいよー」
見つかるとまずいことでもあるのだろうか。威勢のいい声はしばらく広場に反響したが、やがてそれも薄れ、最後には消えてなくなった。
それと殆ど同時、更に下層からしっとり声が聞こえてくる。
「どうやら戻ってきたようですね。どうでした、彼らとの観光は？」
普段通り、落ち着いた口調でさとりは聞いてくる。
「ああ、観光というか銭湯に行った気分だったけどな」
「・・・旧釜茹で地獄、旧焦熱地獄に行ったんですね」
突然さとりは目を細め、険しい表情になる。
「あ、ああ、そうだけど」
「あの鬼達は・・・、立入禁止と何度言ったら分かってくれるのでしょうか」
「た、立入禁止だったのか」
見つかったらまずいって、このことだったのね。
「ああ、あなたが気にかけることではないのですよ。悪いのは彼らですから」
さとりが不機嫌になると露骨ではないのだが、逆にそれが怖かった

りする。いらだっていないように振る舞っているが、ひしひしと伝わってくる殺気めいたものがそれを確信に至らしめる。

「・・・と、ところでさ」

そんな時は早いところ話題をそらすに限る。

「例の人間のことですね。・・・温泉を探してここに迷い込んできた、と」

お得意読心術である。

「ある程度地霊殿を回ってみましたが手掛かりは特にありませんでした。温泉探しにこんなところまでやってくる人間もいるのですね」

「よっぽどの風呂好きなんだろうな」

風呂好きで、鬼ともそれなりに渡り合える人間か。

やっぱり普通の人間ではないんだろうが、だからこそ元の世界へ帰る手だてを知っているかもしれない。そんな風呂好きが向かうところと言えばやはり温泉があるところなのだろうが、勇儀曰く下層へ向かっているとのこと。地獄の温泉は熱いところだらけと鬼さんは言っていたし、そんな下層にちょうどいい温泉があるとは思えない。

「・・・何か別の目的がある、と」

「ああ。まぁ、どちらにしても会ってはみたいな」

「なるほど・・・。では、明日はもう少し下層の方まで探してみましょう。手掛かりがつかめればお燐にも協力して貰えますし」

では戻りましょうか、と地霊殿を後にするさとりを追いかけるのであった。

「あ、なんだいあんたは」

地獄でも最下層に位置する灼熱地獄。煮えたぎるマグマやマントルを肌で感じることのできるような死地に少女が二人、対峙していた。

「こんなところに何の用か知らないけど、勝手に入ってくるのはいただけないなあ」

かたや巨大な美しい翼を背にマントを纏う、この場に相応しい少女。かたや紅と白の見慣れない服をきた、未知の少女。

「ここが異変の元凶。そしてこの地底全体が異変の関係者」

「異変だぁ？目の前のあんたの方がよっぽど異変だわ！」

翼の少女は気分がよくないといった態度、口調で紅白の少女を威圧する。だが、それに全く動じることなく、

「まずはここから。そして徐々に上に攻めていく。あぶり出すよう

に、絡めとるように」

不気味に喉を鳴らしながら紅白の少女。その異様な行動に翼の少女はついたじろぐが、それもつかの間。

「殲滅させてもらうわ」

「意気がるのも、程々にしな！」

第二話　旧地獄街道を行く（後書き）

そろそろお話が動き出してくるころです。

第三話　夢想百憐

連日通り気持ちのいい目覚めになるはずだったが、今回はそれにそぐわなかった。

強烈な炸裂音。

壁の一枚や二枚を爆薬かなんか使って吹き飛ばしたような、そんな轟音で俺は目が覚めた。それも断続的に、時には激しい縦揺れがどこからか、この部屋まで伝わってくるのだ。なんだなんだ、空襲でも受けてる気分だ。地獄の中で戦争でもおっぱじめたってのか？とにかくさとり、さとりに何があったかを聞いて・・・。

と、視線を部屋全体に回すが、さとりの姿が見当たらない。さしずめこの音に驚いて事実の確認に行ってるとか、そんなところだろう。なおも続く爆音、縦揺れは容赦なく部屋全体に響き、揺さぶる。こんな状態じゃさとりが帰ってくるまでオチオチ二度寝もしてられないし、となれば、あとは行動あるのみである。

そうしてやってきた刻印柱の広場で見た光景をなんと表現すればいいだろうか。

巻き込まれてはまずいので影からのレポート（？）となるが、とにかくそこはあらゆる意味で『地獄』であった。

施設のいたるところを自在に暴れる大火は濁流を想像させ、それの合間を埋め尽くさんと飛び交うのは小さなものから大きなものまで、輝く玉に紙切れ、それらが地面や壁に着弾すると同時に噴煙があがり、そして炎が広がった。数え切れない程の玉や紙切れは時に美しい模様を見せ、しかしすぐに炎に飲み込まれ、その姿の全貌までは確認することができない。

「・・・・!?貫斗さん!なにをしているんですか、そんなところで!」

炎の中から聞き慣れた、はずではあるがしかし聞き慣れないはっきりとした声が俺を呼んだ。
それに間髪入れず、炎を飛び交う紙切れのいくつもが突然方向を変え、こちらに向かってきたのだ。
その速度は凄まじいもので、避けるとかそういった思考が過ぎる間もなくそれらとの距離はすでにどうしようが避けられないところまで詰められていた。いくら紙切れとはいえ、普通の紙がこんな速度で飛んでくるはずがない。こりゃ当たると本格的にやばい。悪くて死、よくて死だろう。違いない。瞬時に目を閉じ、腕を顔面の前で交差させた。無駄な抵抗甚だしいが、ほぼ脊髄反射の行為である。
迫る恐怖に脳は殆ど働いていない。

だが、いつまで経っても痛みはなかった。どうなってんだ、恐る恐る目を開けてみる。

「想起、二重結界」

今度はいつも通りのしっとり声だった。迫っていたはずの紙切れは知らぬ間に跡形もなく消滅し、代わりに視界は異様にぼやけていた。
陽炎に近い、景色が歪んでいるような状態。
そのぼやけた空間の向こう側に、さとりはいた。いつものさとりからは想像出来ないが、髪はボサボサに乱れ、服もところどころほつ

れている。こりゃあ一体何の騒ぎだよ、避難訓練かなんかか？何て問おうとしたその時。

「あれは・・・人間？」

今度こそ本当に聞き慣れない声が、炎の向こう側だろうか、しかしはっきりと聞こえた。

その声のした方向に目を傾けるが、そこにいた意外な人物に思わず目を見開いた。

そこにいたのは紅と白の衣装、正月に神社なんかでよく見かける、『巫女』であった。

「・・・あ？」

なんて間抜けに声を上げてしまう。

「こんな地下に人間が・・・ありえない。あなた、何者？」

俺よりも若干若いだろう、まだ少女の声だった。どうにか答えようとうまい言葉を探すのだが、

「まぁ、いいわ。どうせ地底の者はあらかた片付けるつもりだし・・・。残念だったわね」

巫女はゆるりと身体を翻し、背を向ける。

「・・・待ちなさい、人間」

巫女に向かってさとりは静かに言い放つ。その口調には明らかに普段以上の重みがかかっていた。

「この人間は関係ない。仮にも預言者であるあなたのような巫女が、無差別に手をかけるのですか」

「無差別？人聞きの悪い。私は異変の原因となりうる者を排除しているに過ぎない。平和と秩序の安定化、それが巫女たる私のすべきこと」

「そのためなら、同族とて厭わないのですか」

巫女は、実に澄ました表情で短く一言。

「そうよ」

「・・・偽善者が」

まさか、あれが例の温泉を探しにきたっていう人間なのか？この惨事を引き起こしたのも、さとりとあの巫女だというのか？だとしても一体何故、何故こんなことに・・・？

「霊夢、一旦退くわよ」

他の者の声がした。

「退く？寝言は寝て言いなさい。地底を制圧する絶好の機会を、易

々と逃すっていうの？」
「人間の介入は想定していない。計算に寸分でも狂いが生じたのなら修正は不可欠よ」
「・・・そう。紫が言うなら仕方ない」
その言葉に、さとりの口が動いた。
「・・・なるほど。そちらの手の内はある程度掴ませていただきました。ご協力に感謝します」
「心を読む力・・・忌ま忌ましい。今は一旦退くけど、次会うときは覚えてなさいよ」
捨て台詞のように吐くと、霊夢と呼ばれていた巫女は地上への道を猛スピードで飛行していった。
あれが温泉好きの人間だとしたら、とんだ見当違いだ。協力してくれるどころか敵と見なされてしまったのだ。事情を話しても分かって貰える様子ではない。
「それどころか、事態はあなたが思っている以上に深刻です」
さとりの表情はいつにもまして険しい。
「彼女が連絡をとっていた相手、おそらくはそれがこの世界とあなたの世界を結ぶ唯一の鍵・・・」
「あの・・・紫とかいうやつか？でも何でそんなことが」
「彼女は境界を操る能力者。この世界とあなたの世界の境界を繋げることも容易に出来るでしょう。私も彼女の力を借りてあなたを元の世界に帰そうと考えていました」

しかし、そいつが地底の者と敵対している時点で帰る手段は断たれた、ということか。そりゃえらいこったな。

「・・・慌てないのですね」

「そりゃ、騒ごうと慌てようと事態は解決しないしな。それに、地底の生活も思ったほど退屈しないし」

しばらく考え込むそぶりをさとりは見せると、突然の含み笑い。

「・・・ふふふ。悩んでいた私が馬鹿だったようですね。まさか、この地底にいることが苦痛でない人間がいるとは、流石貫斗さん」

「褒めてるかそれ？」

しばらく笑い続けていたさとりが落ち着きを取り戻すと、途端に深刻な眼差しを向けてくる。

「しかし、完全に機会が失われた訳ではありません」

意味深な発言に黙っていると、

「地底と地上では不可侵条約が締結されていることは以前も触れたと思います。ただしそれには地上と地底の妖怪に限りという、いわゆる穴があるのです」

つまりは妖怪以外の者、すなわち人間なんかは条約に縛られないということか。それならさっきみたいな地上で力をつけた人間が地底に侵入できるのも頷ける。

「その条約をこちらから破っては、団結の乏しい地底は地上の妖怪

達によって落とされてしまうでしょう。しかし、先に地上の妖怪に条約を破らせれば、その限りではありません」
「・・・だいたいの話は分かったが、その事と条約の穴になんの関係があるんだ？」
「・・・そこで、あなたを使います」

十分に間をとってから
「あなたは地底で、条約の穴をかい潜れる唯一の人間。そして、先に地上の妖怪に条約を破らせれば私には地上に赴く口実ができる。つまりは・・・」
「・・・地上の妖怪を、地底に誘い込めってことか」
にやり、とさとりの表情が綻ぶ。
「ふふふ、察しが良くて助かります」

よくもまぁそんなに頭が回るもんだなぁ。容姿が幼いだけにギャップにいちいち驚かされてしまう。

しかし、それにはまだ解決しなければならない問題がある。紫、とかいう元の世界に帰る唯一の鍵が敵に回っている以上、例え地上に出てそいつに会ったとしてもすんなりと帰してはくれないだろう。それどころか手荒な歓迎を受けることになりかねない。どう転ぶにしても、紫との関係を何とかしなければ元の世界には帰れないのだ。現実的に考えればそれは不可能であることは明白だが、しかしさとりは余裕の表情で

「心配はいりません。うまくいきますよ」

なんて言う。考えたところで勝算を割り出せることもなく、さとりを信じる他道は残されていなかった。

「それでは、今日の仕事が残っていますので」

と言ってさとりが去ってしまった後、俺はしばらく先程の戦闘であちこちが荒らされてしまった広場に残っていた。一面石造りの為か炎はすっかり鎮火しているが、柱の何本かは粉々に砕け散って地面にころがっている。これの後片付けもさとりがやるのかね、その時は少しくらい手伝ってやろう。

「どひゃー、こりゃまた見事にボロボロだね。人間がやったなんて信じがたい」

聞き覚えのある威勢たっぷりの声が反響した。

「ホントホント、あたしならもう少し手加減するけどねー。いやはや、人間の考えていることは分からないな」
「ただの馬鹿」

見回してみると案の定、入口の一つに何故か堂々と立ち尽くす三天王の姿があった。

「こんなところまできて大丈夫なのか？さとりに見つかったらあれやこれや面倒だろ？」

なんて声をかけようものなら炎綺がすたすたと歩み寄り

「心配してくれるのかい？くーぅ、うれしいねぇ！でも、心配には及ばないさ。今日はあいつは灼熱地獄の整備だろうし、暫くは帰ってこないよ」

まぁ、見つからなくても俺の心を読まれれば一発でばれるが、触れないでおいてやろう。言っても手遅れだし。

「で、時に貫斗よ」

勇儀はあらたまった口調で言う。

「私達の元へ来ないか」

以前にも似たような発言を聞いたが、勇儀の口調に迷いやふざけはない、どこまでも真剣にまっすぐに問いかけてきた。

他の二人も止めに入る様子はない、鋭利な眼差しを向けてきていた。ふざけて返答はできない。だが、勇儀達の真意も分からない。

「何故だ？」

そう問う他なかった。それに今度は炎綺が口を開く。

「聞かせて貰ったよ、さっきの話。あんたが地上に行って妖怪を誘い込むんだろ？よくもまぁそんな事が考えつくもんだよなぁあいつは」

「あなたは人間。地上に出れば、妖怪に食べられる危険性を伴う。だから、行かせない」

普段無口な真奈もが問いに答えた。その二人を制止するかのように、勇儀は前へ出る。

「とまぁそういうことだ。このままあいつのところで世話になってたらあんたの身に何があるか分からない。人間界に帰る方法なら、もっと安全なのを探してやるから」

三人に敵意はない。寧ろ本当に俺を心配してくれている、そんな風に感じる。

「一つ、聞いてもいいか？」

いいとも、と勇儀は頷く。

「・・・何故そこまでしてくれるんだ？」

真剣な問いだった。しかし、あろうことか勇儀は声をあげて笑いだしたのだ。つられて炎綺も笑いだす始末。なんか悪いことでも言ったか俺？

「いや、くくく！そんなの決まってるじゃんか。なぁ炎綺」
「ああそうさ！私達は一日を共にした仲間だろ？ほってなんか置けないさ」
「仲間、大切」

・・・なるほど、仲間か。それは一本とられたな。まさかたった一日付き合ってもらっただけで仲間と呼んでもらえるとは、人間同士じゃありえない。

「ありがとう。だけど、それは出来ないんだ」

それだけに、その申し出を断るのは気分が悪かった。

「確かに危険な賭けかもしれないけど、他に手はないのも事実なんだ。それを助けてくれる、心配いらないなんて言ってくれたさとりをそう易々とは裏切れない・・・」

なんと言われても俺はさとりを信じることにした。この地底にきてから今まで受けた恩を仇で返すようなことだけはしたくなかったか

ら。
しかし、勇儀はにっと笑みを浮かべてみせた。

「やっぱりね、そう言うと思ったよ」
「・・・やっ、ぱり？」
「あんた律儀で頑固だしなー。ま、何かあったら遠慮なくあたしたちを頼っていいからな。地底だろうが地上だろうが駆け付けてやるよ」
「仲間、守るの当然」

ははは、成る程。初めから答えはわかってたのね。にも関わらずこんなところまでわざわざ来て、ホント何やってんだか。

「・・・ありがとな」

俺も出来る限りの笑みで返してやった。

「そんじゃー本日は酒宴と行こー！」
「おっしゃー！人間と飲み比べだー！」

がっちりと腕を掴まれる。何だこのプロレスラーばりの握力は。

「ほらほら、あんたもボーっとしてないでさっさと来る来る！」
「ちょ、ちょっと待ってくれても・・・つーか待てぇい！」

その叫びは広場に虚しくこだまするのみであった。地下はよく響くなぁもう・・・

辺りが暗くなる頃（腹時計）に漸く宴はおひらきとなったが、こいつらに飲まされた酒はマジ半端ねぇじゃ済まされない程想像を絶する量だった。こう見えて俺は酒はかなり強いから腹をちゃぷちゃぷいわせる程度で済んだが、普通の奴だったら致死量だなこれは。

「いゃあー、人間にもこんなに酒の強い奴がいるんだねぇ。あたしたちと飲んでまだ平気だなんて！」

「あー、もう入らないからな。腹に水分がたまる・・・」

そんなことを言うと勇儀はケラケラと笑い出し、

「あっはは！そりゃそうだよな。五瓶も平らげりゃ腹も膨れるさ」

とかなんとか言いながらがぶがぶ酒をあおり続ける御三方。こいつら本当に人間か？・・・鬼か。

「んじゃ、さとりが心配するといけないしそろそろ帰ろうかね」
「おーそうかそうか。気をつけて帰んなー」
「また次の宴にもこいよなー」
「楽しみ、してる」

そんな感じで軽く次回の宴参加を取り決められ、呆れ顔を作ってみせる。

「・・・次は程々の量な」

三天王と別れた俺は、刻印柱の広場まで戻ってきた。さとりが迎えに出てくる様子はない。まだ仕事が終わらないのだろうか、妖怪の仕事も俺達のと同じくらい忙しいのかね。

「実に忙しいですよ」
「ってのわ！？」

・・・思わず跳びはねてしまったじゃないか。

「急に現れるなよな・・・心臓に悪い」
「妖怪の本業は人間を驚かすことですから」

クスクスと喉を鳴らせて笑うさとり。全く、幽霊じゃないんだから・

・・・。

「で、鬼達と飲んできた訳ですね。よくあの酒馬鹿に付き合えたものです」

「酒に弱い奴じゃ死ぬだろうなありゃ」

「・・・・」

一瞬地面に向けて目を細めるが、すぐにこちらに向き直る。

「楽しめたようなら結構ですけどね。それで、先程の話ですが・・・」

眼差しがきりりと鋭利になる。

「地上に出るにあたって危険がないとは言い切れません。それでも、あなたはやりますか？」

あらためて、まるで俺の真意を探るかのような態度で聞いてきた。

そんなこと、聞くまでもない。にこやかに言ってやる。

「心読めるんなら、聞かなくても分かってるだろ？」

「口から聞ければ、なお決意として受け止められます」

そうか。それなら、いくらでも言ってやろうじゃないか。

「俺はさとりを信じる。なんとしてもやり遂げてやるさ」

その時、さとりは静かに微笑みを浮かべていた。最初からわかって

いたよ、とでも言いたげに。

「・・・決行は明日。その言葉、偽りにならないようにしてくださいね？」

第三話　夢想百憐（後書き）

霊夢性格崩壊。きっと仕様です。

第四話　悪夢の色

翌日。俺とさとりは地上へと続くであろう長い道のりを辿っていた。旧地獄街道を抜けると施設や道の舗装は完全に見られなくなり、土の臭いがほのかに漂う暗い道が続いた。地霊殿近辺に比べて妖怪の出そうな雰囲気バリバリだが、何故だか誰一人姿を現そうとはしなかった。実は地底、それほど妖怪は住んでいないのだろうか。あるいは・・・。

「この階段を登りきれば地上です。ここから先は、私は進む訳にはいかないのでこれ以上はお供できませんが、これを」

と言ってさとりが差し出したのは手の平サイズの玉だった。鈍く光る水晶のようなそれは見た目程重くはない。

「なんだ、これ？」

「もし危なくなったらこれを投げつけて全速力で戻って来て下さい。護身用の秘密兵器、とでも思ってもらえれば」

くすり、と嫌な笑い方をするところを見ると得体の知れない代物だ。あまり宜しいものではないらしいな。出来れば使わずに戻ってきたいものである。

「それでは、健闘を祈ります」

戦いに行く訳ではないんだがな・・・。

地上までは思った程の距離はなく、階段を登って5分とたたないうちに太陽が出迎えてくれた。やはり地上は素晴らしい、人類は地上で生きてきて正解だ。
茂る樹木もさることながら、ほのかに漂う植物の香りが鼻をついた。そういえば地底に植物はなかったな、都会で生活している手前元から植物に触れる機会は大してなかったが、ここではきちんと懐かしい感情が沸き上がる。まるでここが、元の世界と勘違いしてしまいそうだった。

「っと、早いところ手頃な妖怪を探さないとな」

自分に言い聞かせる為あえて言葉にした。
辺りを見渡しても一面森か林といった様子で、妖怪なんているような雰囲気ではない。だが、ここを離れれば離れるほど帰り道も長くなるのだからその分危険も増してしまう。あまり動かないのが得策なのだろうが、俺にだって好奇心ってものがある。
問題はここに戻ってくる方法である。この場所を離れて運よく手頃な妖怪が見つかったところで、こんな道もないような森で正確に帰ってこれるとは思わない。もう少し開けた場所に繋がっていると踏んだ俺は、この辺の準備は全くしていなかった。
コンパスでもあればいいが、生憎そんなものは持ち合わせていない。

木に糸を巻き付けて反対側を持っていく、なんて古典的手段も思いついたが、案の定糸がない。

頭に現れる打開案はことごとく没を喰らい、うーんうーんと唸ること早１０分。

もはや万策つきたかとポケットをあさっていると、なにやら懐かしい感触を覚えた。このつややかな肌触り、片手にフィットする形。

間違いない、これは。

「・・・」

携帯電話だった。なんかもう、万策ついちゃった感満載である。こんな異世界の森の中で携帯電話が使えるはずが

「・・・」

バリ３だった。

マジですか、この世界。

携帯が使えると妙に親近感が沸いてくるな、この世界。

・・・っと、そんなことはどうでもいい。

携帯が使えるならＧＰＳだ、とボタンを弄るが流石に地形は表示されず、真っ白な背景が写し出された。だが、驚くことに自分のいる場所がしっかりマーキングされていたのだ。日頃あまりお世話にならない機能ではあるが、やはり便利なものである。これならマーキ

ングを辿っていけば帰り道も迷わないで済むだろう。

「あら、面白そうなもの持っているのね」

どことなく不気味な、背筋を凍らせる声だった。この声、聞き覚えがある。

「あんたが・・・紫か」

振り向いたそこにいたのはいびつな黒い空間に身を潜め、宙を漂う少女の姿だった。何も言わずとも、人間では有り得ないほどの殺気が体全身に突き刺さるような感覚だ。この場にいるだけで彼女が放つ異様な雰囲気に喰われそうになる。
だが、対峙してしまった以上怯むことはできない。

「なぁ、あんたに頼みがあるんだ」

聞いてはくれないだろう。それでも俺は彼女に問いた。

「元の世界に帰りたい。そうでしょう？」
「・・・話が早いじゃないか」

心を読まれたのか、さとりと会話している気分だ。紫は身を潜めていた空間から抜け出し、地面に足をつける。背は俺と大差はない。

「・・・帰してあげないこともないわね。でも、そのかわりに」

一瞬、色のない笑みを零して

「地底の侵略に協力しなさい」

馬鹿にしているのか、それとも俺を試そうとしているのか、その顔色からはどっちともとることが出来ない。そもそも地底侵略を計画しているなんて話をそう安々と話してしまっていいのだろうか・・・断ったら、殺すつもりなのかもしれない。例え首肯したところで俺には協力できることなどない。ならばこの質問の意図はなんだ？俺はどう答えるべきなんだ。

「さぁ、早く答えないと日が暮れてしまうわ」

砕けた口調でせかしてくる。その笑みはやはり何かを含んでいるようで、実にいやらしい。

・・・答えに迷いはなかった。だが、そう答えた後のことを考えるといつまで経ってもそれを言葉にすることができないのだ。答えずに黙っていればとりあえずは現状が維持できる、なんてのは作り物の安心に身を寄せているにすぎない。漸く決心をつけ、言葉を放つ。

「断る」

自分でも驚く程に淡泊な答えだった。そんなもん、協力できるはずがない。こんな形でさとりを裏切るかどうかなんて、天秤にかける方がどうかしてる。

「・・・ふぅん、そう」

紫はいかにも残念そうな表情で肩をすくめてみせた。

「大体俺には協力できる程の力はない。断る以前の問題だ」
きっぱりと言い切ってやった。俺には協力する気が微塵もないと、これで明確に伝わっただろう。
そのはずだったのだが、紫は言葉を返してきた。
「協力はできるわ。とぉーっても簡単に」
「ない。俺はあの巫女なんかとは違う、普通の人間だ。力もなければ知恵もない。あんたみたいな妖怪とは違ってな」
強気に出てしまった態度を一瞬悔いたが紫はいらつく様子は見せず、あろうことかくすりと喉を鳴らして
「あなたは元の世界に帰る、ただそれだけでいいのよ？」
「・・・なに？」
思わず押し黙ってしまった。やっと言葉を紡げたかと思ったらそんな情けない一言。
何だって？俺が帰るのが協力？意味がわからん。それでは本末転倒ではないか。要するに、無条件で帰してくれるということだよな。他に条件がないとは思えない。
「やぁね、間抜けな顔しちゃって。あなたがこの世界、幻想郷からいなくなって、もっと言うなら地底からいなくなってくれれば、それは立派な協力なのよ」
紫は更に続ける。

「地底は今、どうやっても地上に攻めることは出来ない。だから私たちが本格的に満遍なく危害を加えない限り、地底の者が団結して攻めてくることはまずないわ。地底の方から仕掛けるにしても、不可侵条約下では地底に動けるものはいないのよ。・・・あなたを除いてね」

ふふふ、と含み笑いを交える。

「あの地霊殿の主のことだし、あなたを使って良からぬことを考えているんでしょうねぇ。あなたが有無を言わずに帰ってくれれば、こちらも無駄な手間が省けて楽なんだけど」

反論は出来なかった。俺は帰る為にこうして地上にやってきて、今紫は無条件でその協力をすると言う。拍子抜けするほど簡単に話が進むもんだ、流石に警戒せざるを得ない。その姿勢があからさまだったのか、今度は諭すような口調で

「・・・疑うのも無理はないわね。でも最後に選ぶのはあなたの自由だから、私はこれ以上何も言わない。さぁ、どうするのかしら？」

その態度は答えをせかしているようにも思えた。
この申し出を断れば恐らく安全には元の世界には戻れないだろう。
それどころか、帰る唯一の手段を失うことになるかもしれない。

「断る」

たった一言、言い放ってやったさ。それが予想外の返答だったのだろう、紫の顔には明らかに戸惑いの表情が浮かび上がっていた。

「・・・何故なの？」

何故、どうして？今にもそう叫びそうな顔で、しかしあくまで冷静を装う紫が聞いてくる。

「あなたは、帰りたいのではないの？」

「・・・さぁ、どうだかな。ただ、俺はあいにく恩義に厚い男でね、このままみすみす地底が侵略されるのを黙って帰る訳にはいかないな」

「そう。変わった人間もいるものね。どうせもう地底には辿り着けないというのに・・・」

紫の表情が一変、不気味な嘲笑を見せつけてくる。やはり、断ればただでは返してくれないか。思わず身構え、いつでも走り出せる体勢を作る。地底の入口はすぐ後ろだ。いくら紫が強いとしても、そこまで逃げ切る自信はある。なのに逃げられないとは？ハッタリとは思えない発言は最悪の形で現実になる。

「巫女っ・・・」

巨木の裏から身を翻し、紅白の衣装が姿を現した。間違いない、あの時さとりと戦っていた巫女だ。人間である彼女に不可侵条約は通用しない。それが何を意味するか、もはや語るまでもない。

「お久しぶりね、名も知れぬ人間。残念だけど、紫の命令だからやむを得ないの」

そう言う巫女は妖しく口元をつりあげている。先日逃してしまったのをここで倒せるとあって意気揚々、といったところか。悪趣味だ。

「確か・・・霊夢と言ったか」
「そう、正解。有能で完璧な幻想郷の巫女」
「自分で言うか普通？」

って、何挑発してるんだ俺は？

「・・・その度胸は高く買ってあげる。じっくりいたぶろうと思っていたけど喜びなさい」

刹那、一瞬間前まで目視出来ていた霊夢の姿が、映りの悪いテレビを見ているように揺れだし、そして消えた。

「一瞬で葬ってあげるわ」

やばい、体が警告を告げてくる。自分でも気付かないうちに殆ど脊髄反射の域で身を反らしていた。そのおかげか、頬を掠めるようにして飛び去った『何か』を間一髪で避けることは出来たが、大きく体勢を崩してしまいそのまま地に手をつく。

「普通の人間にしては上出来の動きね」

続けざまに尻餅をついたその時、尻に何かを下敷きにしたような感覚がはしった。角ばっていない、丸い何かを。

「それじゃあ、もうおしまいにしましょう」

慌ててポケットに手を突っ込むと、記憶に残る触感がそこにあった。

『もし危なくなったらこれを投げつけて全速力で戻って来て下さい。護身用の秘密兵器、とでも思ってもらえれば』

握りしめたのはさとりに渡された玉だった。相変わらず水晶のように透き通る美しいそれを眺める。・・・って、そんなことをしている余裕はない。霊夢は既に数枚のお札を掲げ、投げようと構えている。俺は足を踏ん張り肩を上げ、そして振りかぶった。

「でやああ！！！」

お札が投じられるほんの一瞬前、玉は直線軌道で霊夢に向かって襲い掛かった。俺はその末路を見ることなく、さとりが言った通り一目散に地底へ駆け込む。

「健気な反抗ね・・・だけど、その程度では」

「霊夢！！」

紫の叫びがこだましたその時だった。

「え・・・」

直後、けたたましい轟音と共に強烈な追い風が背中を押した。雷が至近距離で落ちた、はたまたトラックが正面衝突したような音が耳をつんざき、それ以外の音という音を隠蔽する。何が起きたのか、そんなことを確認している余裕はない。地下へ続く坂道を足がもつれそうになりながらも足を回し続けた。・・・どうやら追撃してくる様子はない。そこで漸く足を緩め、ペースを落とすことにした。

・・・折角地上に出たというのに、結局何の進展もなく逃げ帰ってしまった。仕方ないと言えばそれで済むが、情けない話だ。元の世界に帰るのはおろか、地上との関係を悪化させただけじゃないか。ネガティブ思考に陥っていると、自然と足どりが重くなる。

「さとり・・・」

土壁にもたれていたさとりを漸く見つけ、呟いた。さとりも声に気付いたらしくすぐにこちらを向いたが、その表情はどこか沈んでいるように思えた。「・・・」

返答はなかった。何とも言えない、気まずい雰囲気が場を容赦なく支配し始める。さとりには上で起こった出来事が筒抜けだろう。またとない最高の機会をみすみす逃し、それでいて相手さんの怒りを買っての逃走だったのだ。

「・・・無事で、なによりです」

たどたどしく紡がれた言葉は、思いの外温かいものだった。普段の素っ気ない感じから比べても本当に心配しているような、そんな感じの口調だ。

「ああ、その・・・なんだ」

一言、謝りたかった。情けない、その感情を押し殺す為にも、その一言は必要だと思った。なのに

「無理な注文をしたのは私ですよ。それに、彼女達に出会うのは想定外でした」

あっさりと、どこまでもいつも通りの反応に次の言葉を発することは出来なかった。

「こんな危険な目に遭わせることになるとは・・・。こんなこと、計画すべきではなかった」

・・・どこまでもずるい言葉だ。慰めともとれる言葉が情けなさをより一層深めていく。こんなことなら、俺は紫の言う通り帰っていた方がよかったのかもしれない。こんな好機、二度と訪れないのかもしれなかったのに。

「そんなことは！・・・」

叫びにも似た声、それがさとりのものと断定するのに時間を要する程だった。聞いたこともないさとりの声、心を読んだのだろう。でもその言葉は、本来の目的に大きく矛盾していることをさとりは気付いているのだろうか。

「俺は、元の世界に帰る為に地上へ上がった」

空気が一瞬で静寂する。

「でも、俺はその道を選ばなかったんだ。無条件で帰すと、約束されたにも関わらず」

「彼女達が何を考えているか分かりません。もしそれを承諾していたら、騙されて無事ではない可能性だって」

「心を読めるんだろう・・・だったら、無条件の理由がいかに筋の

通ったものだったかも、わかるはずだ」

さとりは押し黙る。慰めなんて聞きたくなかった。だから、自然と口調が荒くなっていく。

「・・・怖かったんだ。あいつらについていくのが。折角さとりがきっかけを作ってくれて、地上で機会を掴んだというのに。あろうことか、俺はさとりを裏切るからなんて理由をつけてあいつらの誘いを断ってしまったんだ」

心を読まれているとは思うが、口にして打ち明けると多少気が紛れる気がする。・・・さとりはと言うとやはり心を読んでいたのだろう、全く動じることなく色のない視線を地に落としていた。

「なぁ・・・さとり」

今度こそ、謝ろうと口を開いたのに。

「貫斗さんは裏切りたくないと言ってくれました。・・・それだけで、私はうれしいんですよ」

・・・やれやれ、やっぱりさとりには敵わないな。

「もうしばらく、世話になるな」

「私は、いつまででも構いませんよ」

さとりは、きっと俺も、穏やかな表情だったと思う。何だか色々考え込んでいたのが馬鹿らしくなってきたな。

帰路を下る頃にはすっかりと、陰気は晴れていた。

鼻を撫でる焦げた臭いの中、二人の少女は立ち尽くしていた。

「あんな人間にしてやられるとは・・・不覚ね」

巫女姿の少女が唇を噛んでいるのを、隣の少女が肩に手を置きなだめる。

「まさか人間に対妖弾を持たせるとは・・・地底の主、よほどあの人間を信頼しているのね。当たったのが霊夢でよかったわ」

「人間でも痛いものは痛いんだから。あれだけ精度の高い代物ならね」

少女達は歩みを始めた。

「こちらの親切を踏みにじり、地底の者に傷をつけられた・・・。大義名分はこちらにあると思わない？」

その問いに、巫女は限りなく沈着に答える。

「私はあくまで異変の解決が目的。地底に興味はないわ」

初秋、燃える落ち葉舞う季節。一陣の風と共に少女達は去っていった。

第四話　悪夢の色（後書き）

五話くらいで終わる予定が、どうみても全然終わりません。

第五話　凄涼な凶兆（前書き）

ぶつぶつな感じ。もっとスマートに仕上げたかったんですが、そういうのは次回

第五話　凄涼な凶兆

今日も地底は平和だった。

地上の一件の後、これといって目立った事件も起こらず平穏な暮らしをさせてもらっている。・・・その間にも例のペット猫さんやさとりのおかげで退屈とは無縁の生活を送っていたりするが。

「にしても地上の奴ら、攻めてくると思ったんだけどな」

あれ以来巫女の奇襲なんかも無く、早いもので一週間が立とうとしている。元の世界に帰るという本来の目的は、紫との接触が必須事項なもんだから当面の間は見送ることになるだろう。まぁ退屈はしないし、今更仕事の心配をしたところで意味はないだろう。

「そういや主人」

燐の元を訪れていた時のことである。

「近頃付近の怨霊が騒がしいんですよ、ちょっくら調査してみたらどうでしょ？」

親友のような軽い口調で燐が言う。主人のさとりはというと意外そうに目を細めて小さく唸った後

「そうですか、どの辺りか分かりますか？」

「もっと下の方ですよこりゃ。あたいが起きている時間帯に活発なもんだから迷惑ったらありゃしないよ。この家、騒音対策ないから

ねぇ」

家というか、廃墟というか・・・。

「下、ですか。間違いありませんか？」

怪訝な面持ちのさとり。疑われたのが心外だったのか、燐がすかさず反論する。

「あたいの優雅な死体回収タイムが邪魔されてるんですよ？嘘は言わないさ主人」

「それは分かっていますよ。・・・ですがこれより下層、地獄最深部はペットの管轄のはず。異変が起こったら、真っ先に私に伝えにくるはずなんですが・・・」

独り言のように呟き、そして何かに思い当たったかのような表情を浮かべた。解決の喜びというよりは寧ろ怒りを纏わせているようにも見える。というか、まだペット飼ってたのか。

どういうことかと聞こうとしたが、さとりは燐に一言礼を言うと足速にこの廃墟を立ち去ってしまった。慌てて後を追いかける。

「どういうことだよさとり。何でそんなに焦ってるんだ？」

追い付いて漸くの問い掛けにもさとりは沈黙を保ち、地下へと続く階段を駆け降りていく。無視されている？いや、焦りで一切の言葉が耳に入っていないのかもしれない。どちらにしても目的地につけば明らかになることだ、それ以上追求するのはやめにした。

煮えたぎるマグマ、マントルの熱、灼熱地獄以上の灼熱が俺達を温かく（熱く）迎えてくれた。岩肌で人ひとりがやっと通れるような細い道を取り囲むように赤黒い液体だか固体だか分からないモノがボコボコと煮えたぎっている。煮えているんだから液体か？

「しっかしあっつー」

ついつい言葉が漏れる。勇儀達と入ったサウナもどきなんかとは比べものにならない地獄のような熱風が吹き荒れているのだから仕方がない。・・・そういえばここは地獄だったな。

「ここは地底の最深部、旧火焔地獄。使われなくなってからかなり温度は下がっていますから、焼け死んだりはしないはずですよ、多分」

「多分っておい」

ここまできて漸くさとりは口を開いた。

「ここは私のペット、空の管轄のはずなんですが、見当たりませんね・・・。普段なら私がくればすぐにでも現れるんですけど」

「何十年とほったらかしにして、忘れられたとか？」

「何百年ですね」

そりゃ流石に忘れられても文句言えないような・・・。

もうしばらく歩き続けると次第に暑さはピークに達し、そろそろ人間の丸焼きが完成しそうな頃合いにさとりは鋭い目を向けて

「やはり、おかしい。これほど高温になるはずが・・・」

さとりは平気なのかね。俺みたいな人間には到底耐えられないわこの灼熱。

「さとり様ー！！」

突如、奇妙な声が響く。何が奇妙かってそもそもこんな地獄のような暑さの場所に誰かがいること自体奇妙奇天烈な訳だが。

「空、随分と姿を見せないものだからてっきり・・・」

上空から急降下し俺達の前に着地するのは大きなマントを羽織った少女だった。

顔立ち、服装、目の前に立たれる圧倒感、地獄の最深部に相応しい優雅な容姿と言えるだろう。こいつが、さとりの探していたペットなのだろうか。・・・それにしては、さとりが浮かべる表情は険しいものだった。空と呼んだ少女に対して向けている視線は、明らかに再開を喜ぶものには見えない。苛立ち？いや、もっと何か別の感情がその形相の源になっているように思える。

互いに言葉のないまま時は過ぎ、漸く動き出したかと思えばさとりは片手を空に突き付けていた。

「な、なんだいさとり様。これはどういう」

「・・・白々しい」

さとりが言葉を紡ぐとほぼ同時、空の背中を『それ』は貫通した。
さとりはミリ単位すら動いていない。鈍く輝く『それ』は、さとりの腕から生えるように一直線に伸び、そして空の腹部をとらえていた。

「っ！・・・・」

何やってるんださとりは！自分のペットに、あんな突然に！何とかして止めに入らないと・・・・！？
俺の心配は、空の姿と共に煙となって消えてしまった。残ったのは、さとりが突き出す腕のみ。

「これは・・・・一体」
「・・・なるほど、何かおかしいと思っていましたけどようやく見えてきましたよ」

それは自然な、しかし酷く不気味な笑みだった。さとりはそう言うとゆるりと身を翻し、元来た道を何事もなかったかのように辿っていく。俺も慌ててその後を追うことにする。

「さとり、今のは一体どういう・・・・」

問い掛けてみるが、広場に戻るまでさとりが口を開くことはなかった。

「おかえりー主人！どうでしたい、下の様子は？」

燐の登場によって、今までの静寂は絶たれることとなった。しっぽを左右に揺らしながらさとりに詰め寄るその姿は人間の形をしているが、紛れも無い猫である。そんな騒がしい歓迎にさとりもようやく表情を崩して

「原因はわかりましたが、解決には少し時間がかかりますね。お燐の方でもできるだけ怨霊が上にでないよう、見張っておいてくれませんか？」

「そりゃお安い御用ですよー。鼠一匹上にはやりませんさ！」

胸を張る燐。彼女がどれほどの力を持っているかはまだま知らないが、この様子であればあの鬼畜紅白の巫女とも渡り合えるくらいの力はあるのかもしれない。さとりも全幅の信頼を寄せているようで、一度小さく頷いてみせると

「でしたら安心ですね。私は上に戻って元凶を潰してきますので、それまでの間はよろしくお願いします」

「はいさー。まっかせてくださいー」

・・・だんだんと読めてきた。最深部からの怨霊は、さとりのペットである空の管轄なのだろう。しかし、なんらかの理由でさとりは空を殺してしまった。空が何か企んでいたから？いいや、多分それは違う。さとりのあの表情はもっとこう、何か違う理由が・・・。

「彼女は空ではありませんでした」

ぽつり、とさとりは呟く。

「その理由はあくまで憶測に過ぎませんが、彼女が空の『偽者』であったことは間違いありません」

偽者、か。なるほど、それなら全てのいきさつが納得できる。

「ここからは私の推測ですが、十中八九は間違いないでしょう。・・・恐らく彼女は誘拐、監禁、拘束されているか、もしくは殺されているかもしれません」

表情を強張らせ、一瞬言葉を詰まらせる。

「それを実行したのは地上の巫女、差し詰め八雲のさしがねいったところでしょう」

「八雲・・・？」

「ああ、あの巫女が紫と呼んでいた人物ですよ。彼女は空を旧火焔地獄から何らかの形で追い出すことによって、怨霊の管理を疎かにさせようとした。旧火焔地獄から地上へはいくつかの間欠線によって直接繋がっていますから、管理の行き届かなかった怨霊達は容易に地上へ溢れてしまいます」

それ以上は続けることなく、言葉を切る。思わず俺は聞いてみる。

「地上に怨霊が溢れたとして、地上の奴らに何の得があるんだ？」

それに対しさとりは目一杯間を空けた後、苦いものを噛んだような表情で

「地底の管理は私達の仕事。怨霊が溢れれば、それは私達が故意に事を起こしていると地上のものは考えるでしょう。そうなっては地上と地底の総力戦も・・・有り得るでしょう」

総力戦!?それって結構やばいんじゃないのか?

「結構どころか、前代未聞ですね。多くの血が流れ、苦しみ、そして死ぬことになるでしょう。ですから、それだけはなんとしても回避しなければなりません」

・・・ここ一週間何事もなかったのは期を伺っていたといったところか。怨霊が溢れ出さないよう、見張っていなければならなくなるわけだ。

「その必要はありません」

さらりと、表情は苦いまま言う。

「必要ないって・・・」

「もうすでに、怨霊は地上へ溢れてしまっているでしょうから」

・・・なんだって?

「お燐は、下の階層が騒がしいとは言っていました。しかし、怨霊を直接見た、とは一言も言っていません。先週の旧火焔地獄、怨霊達の姿は見かけませんでしたよね」

「・・・新たな怨霊は皆間欠泉を伝って地上へ溢れ出しているから俺達が見かけることはなかった、そう言いたいんだな」

「相変わらず察しが早くて助かります。恐らくそれは間違いないで

しょう。私が現地で気付けばよかったのですが、今となっては・・・」

と、語尾を濁らせ絶望を漂わせた。さとりがこんなにも弱気なところは今まで見たことがない。だからこそ、それほど状況が最悪なのかと俺まで諦めムードになってしまいそうになる。

だが勿論、そんなムードは一瞬で消し飛ばさなければならない。不利な状況を覆すのに気持ちで負けていたら、数少ない勝てる機会をも逃してしまうかもしれない。

「俺にも出来ることがあったら言ってくれよな」

「・・・」

さとりは一瞬キョトンとした表情を浮かべる。心は読んでいたはずだが、その上でのこの反応なんだろう。もし心が読めなかったら、その時の反応はどんな感じだっただろうか。

「・・・あなたに心配されるのも、なんだかおかしいですね。大丈夫、必ずうまい方向に転がしますよ」

その時のさとりに、憂いは微塵もなかった。

「おい霊夢、なんだよあの怨霊どもは？ただでさえ人が入らない神社が、余計に寂れるぜ？」

神社の境内にいるのは紅白の巫女、そして白黒の衣装に金髪、箒を片手に堂々とした物言いの少女。

「あら、魔理沙。・・・こいつら、地底から溢れてるらしいわ」

「地底？そりゃまたーどういうことだよ。地底とはなんたら条約みたいのを結んでるんじゃなかったか？」

「知らないわよ。でも地底の怨霊の管理は地底の者の仕事のはず。それを放棄して、こうして地上に大量の怨霊を送り込んできているんだもの、唯では済ませない」

霊夢のあまりの剣幕に魔理沙はやりづらそうな顔でとんがり帽子の上から頭を掻く。

「んーまー、なんか事故でもあったとか？ほっとけばそのうち止まりそうな気がするが」

「それはないわ」

自信に満ち溢れる霊夢の返答。まるで、全てのいきさつを知っているかのように、魔理沙の目には映った。

「紫にも相談したの。そうしたら、これは一大事だそうよ。地底の者が、地上に対して良からぬことを企んでいる」

「紫がねぇ。・・・なーんか胡散臭ー」

「まぁ、初めから魔理沙はアテにしてないわ。異変の解決はこの私の仕事だから」

やれやれ、といった具合にため息を一つつくと、魔理沙は箒を肩にかけて乗せる。

「んじゃ、なんか面白そうなことがあったら呼んでくれよな」

「魔理沙はいつもそれね・・・まぁいいわ。多分呼ばないから」

最後の言葉をかわすと、魔理沙は鳥居をくぐり抜ける。霊夢はそれを呼び止める様子もなく、ひたすらに境内の掃除を続けるのであった。

「何々ー？霊夢と何話してたのー？」

魔理沙の周囲を突如覆うようにして表れた霧はやがてある一点に集中したかと思うと、そんな声が聞こえてくる。

「お？萃香。どうしたんだ、お前が私の前に現れるなんて珍しい」

「んー、霊夢がちょっと変わったことを言っていたもんだからね」

「だったら、霊夢に聞けばいいじゃないか」

「・・・地底のこと、話してたんだよね」

それまでほろ酔い顔だった萃香が急に声のトーンを落として鋭い眼差しを向けられるものだから、魔理沙は思わず聞き返す。

「何だよ急に・・・。まぁ、確かにそんな話はしていたが」
「霊夢は、何て言ってた？」
「近くで怨霊が絶賛大発生中らしい。で、霊夢が言うにはそれは地底の奴らの仕業らしくてな、異変解決だーとか張り切ってたぜ。そういえはいつもより殺気立ってた気もしなくもなかったが・・・」
「怨霊・・・」

ぼそり、と萃香は呟くとそのまま黙り込んでしまう。
霊夢に続いて萃香も様子がおかしいのか。魔理沙は面倒臭そうに頭を掻くと、一人物思いにふける萃香をこれまた面倒臭そうに眺める。

「何か進展があったら、知らせて欲しいな」
「どこに行けば会えるんだよ」
「呼んでくれれば飛んでいくよ」

はぁ、と萃香に聞こえるようにため息をつくと、萃香は霧となって文字通り霧散した。一人取り残される形となった魔理沙は仕方なく無言でその場を後にするのだった。

俺はさとりと共に燐の元を訪れていた。それというのも、さとりが突然何か思い立ったような表情をして俺を引っ張ってきたからな訳だが、例によって何の用があるのかまでは聞いていない。いつも通りの寂れた道を抜けると素晴らしく荒廃した廃墟にたどり着く。それと殆ど時を同じくして、どこからともなく声がした。

「さとり様ー。最近はよく来てくれますね。このお燐、感激の一言ですよ！」

猫の姿から一瞬にして人型になったお燐がさとりとの再会に歓喜、執拗なまでにべたつく。ペットと呼ばれる所以もなんとなく分かった気がするな。

「で、今日は何の用で？」

燐が聞くと、さとりは少々複雑な顔をした。

「・・・地上との総力戦が決まりました」

なに！？

「総力戦って、マジかよ？何とか回避出来ないのか！」

思わず取り乱してしまう俺に対して、意外なことに燐は平静を保っていた。

「燐には・・・役割を果たしてもらいます」

さとりは相変わらずの様子だった。燐も複雑な表情で視線を落とし

ていたが、次に言葉を発する時は最初と同じようなまばゆい笑顔になっていた。

「了解っ！・・・さとり様ったらそんな顔しないでさー、せっかくこのお燐が役目を全うするんですよ？喜ばないとー・・・」

「喜んでなんか・・・いられる訳ありません」

さとりの言葉を最後に、辺りに重い空気が立ち込める。こんな重圧に堪えるのはごめんだ。

「総力戦ってことは、大勢の妖怪が関わってくるんだよな？」

無理やりにでも話題を逸らす。

「ということは、地底の妖怪を統括する必要も出てくるのか？」

黙り込みを決め込んでいたさとりは漸くその重い口を開く。

「いいえ、地底の妖怪で手を貸してくれる者など皆無でしょう。総力戦とは名ばかり、地上の妖怪による一方的な蹂躙と言ったところでしょうか」

それじゃ、初めから勝ち目はないってことなのだろうか。それとも・・・

「勝ち目のない争いは無意味です。どんな手を使われたとしても、そう安々と花を持たせはしませんよ」

「なら、こんな手はどうかしら？」

不気味な低音だった。それが確認できた頃には遅かった。

「っ！・・・・」

悲鳴にもならない悲鳴。ガラスをかち割るかのような悲鳴。不気味な薄笑い。
様々な音が一瞬に交錯し、そして静まった。

さとりの腹部を貫く閃光が、驚く程静かに抜き取られる。
そう安々と花はもたせない、さとりは確かにそう言った。では、目の前で起こっているのは事実か？

・・・答えは、ノーだ。

「面倒なのも漸く片付いたし、あとはあなたたちを消して証拠隠滅ね」

紫は、先程さとりを突き刺していた刃物を俺に向けてくる。勿論だが、あんなもので腹部を貫通された日にゃ天国行きは目に見えている。

・・・だったら、避けるしかないな。

「さぁ、おとなしく」

紫の突き出す刃物を間一髪、服を掠めて避けると、回避の勢いを失わずに前転。さらに繰り出されるナイフをこれまた紙一重で・・・

「って、刃物多すぎだろ！！」

と思わず叫びたくなる程の弾幕量にもはや呆然と立ち尽くしてそれらを眺めることしかできなかった。

このままいけば間違いなく死。しかし、不安は微塵もない。

「想起、四重結界」

何の脈拍もない単調な声、いわゆるいつも通りのさとりの声で呟いていた。場を支配していた刃物が全て撃ち落とされるのと同時に。

「な、まさか・・・」

この手で間違いなく仕留めたはず、確信していた紫は、倒れているはずのさとりの姿がどこを探しても見当たらずにただ唖然と立ち尽くしていた。

「全く・・・変な心配かけさせるなよな」
「へぇ、流石貫斗さん。お気づきでしたか」

刹那、紫がいた空間が消えた。表現としては正しい方だと思う。文字通り、その空間は無数の弾幕によって消滅させられていたのだ。巻き上がる砂埃が晴れると、そこには見慣れた姿。

「どんなマジックだ？忍術でも使えるのか？」
「影分身の術です」
「また冗談を」
「原理は殆ど同じです」

そこに紫の姿はなかった。先の奇襲で死んだのだろうか。

「逃げられましたよ、ものの一瞬で。この為にわざわざ事前に準備をしたというのに・・・」
「紫の出現をよんでいたのか・・・相変わらず恐ろしいな」
「特技ですからね、ふふふ」

そんな和気あいあいとした会話の外、いつもの威勢を完全に失った者がいた。

「さとり様・・・死んじゃったかと思ったじゃないですか。う、うぅ・・・」

それは、さとりの洋服をぐしゃぐしゃに掴む燐の姿だった。今までにない一面を、今は惜しみもなくあらわにする

「大丈夫、私はお燐より先に死んだりしませんよ」
「ほ、本当ですか？」
「・・・ええ、勿論ですよ」
さとりは目を細めて、どこか遠くを見つめているようだった。

現状を打破するのは極めて困難な状況なのは、今更言及するまでもない。だが、やはりさとりは退く様子もなく、連日連夜警戒を怠ることはなかった。
俺も何か手伝いたいところではあるが、何をしたところでぬかに釘である。さとり本人からは
「気持ちはありがたいですが、彼女達が攻めてきた時に何が出来ますか？」
と、ごもっともな意見を頂戴している。何も人間、やみくもに動けばいいってもんじゃないからな。
やる瀬ない感をぐっと堪え、しかし自分なりに奴らが攻めて来たときの対策を考えていた。せいぜい自分の身を守る程度のものだが、何も無しにその時を迎えるよりはよほどいいはずである。

「・・・明日には、攻めてくるでしょう」
それまであらゆる準備に追われ、ゆっくり話している暇もなかったさとりがいよいよ改まって話をするものだから、流石に焦りを感じる。

「不安ですか・・・まぁ、無理もないでしょう。しかし安心して下さい。少なくともあなただけは無事に元の世界に帰れるようにしますから」

元の世界、か。そういえば本来の目的はそこにあったんだよな。今となってはそんなこと、二の次三の次だ。

「・・・」

喜びか、悲しみか、何とも判断しかねる表情で一瞬固まるさとりは、しかし次の瞬間にはいつも通りの表情で

「明日に備えて、今日は私も寝るとしますか。貫斗さんもご一緒にどうですか？」

「ご、ご一緒にってなぁ・・・」

「なんだ、心の底では満更でもないようですね。でしたら」

「そこでの読心術は反則だろ・・・」

「ふふふ、冗談ですよ」

平穏な平素は着実に終わりを迎えようとしていた。

第五話　凄涼な凶兆（後書き）

次回から山場に差し掛かるはず

第六話　結束の担い手

驚くべき轟音に、深夜にも関わらずとび起きてしまう。

以前にもあったそれとは比べものにならない程の、途絶えることなく鼓膜を震わす爆発音、そして縦揺れ。この状況下で寝てろって方が難しい話である。

今にも天井が落ちてきそうな部屋をぐるりと一周見渡すと、程なくして平静を保ったままのさとりの姿が確認できた。

「きましたか・・・」

至って冷静に、待ち合わせでもしてたような口調。そんなさとりの姿を見ていると俺までも平静を取り戻せるな。

「止められるのか、地上の奴らを」

俺には心は読めないが、なんて返答してくるか、それくらいなら俺にだってわかる。

「大丈夫、心配いりませんよ」

「・・・それが聞ければ安心だな」

不安どころか、薄笑いすら浮かべていた。

刻印柱の広場にでると、程なくして手荒い歓迎を受けることとなる。

「・・・早いのね、妖怪の癖に」

薄暗い広場に映えて写る紅白色。その姿は以前のそれとなんら変わらず、堂々たる口調と態度を示していた。

「どうやら各地で暴れてくれているようですけど、まさか不可侵条約を無視したりはしていませんよね？」

霊夢は怯むどころか、あろうことか声を上げて笑い出しやがった。

「本気で言ってるのならお笑いね！・・・あなた達は地上の者の親切を踏みにじり危害を加え、更には怨霊まで送り込んできた。それだけの行為をしておいて、よく条約がどうこう言えたものね」

どうやら向こうに協調の文字はなさそうだ。あの様子では、相手は霊夢一人とは思えない。今にも襲い掛かろうとお札のような紙切れを構えるその姿は、これから狩りを楽しむハンターにも見える。

「自信あり、といったところですか。・・・果たしてその自信はどこからくるのやら」

「ふん、心が読めるのなら分かるでしょう？あなた達に勝ち目はないわ」

くくく、とさとりは奇妙に喉を鳴らした。何か企んでいる時、さとりがよくやる行為だ。

「援軍、それも私一人など一瞬で捩伏せる心強い助っ人ですか。そ

んなのがたどり着いたら、確かに私一人ではどうすることもできませんね」

しかし、と、勿体振りを目一杯つけてから

「協力してくれるんですかね、その者達は」

「・・・何が言いたいの？」

「鈍いですね、貫斗さんとは大違い」

嘲笑を含む言葉を浴びせると、それ以上言葉を放つことはなかった。すでに何らかの手は打ってあるのだろう。援軍が到着することができないという事実はなによりその怪しげな表情が物語っていた。

「・・・ふん、まぁいいわ。あなたたちはここで」

目にも留まらぬとはまさにこのことの為に用意された表現だろう。一瞬かつ同時に、視界を多い尽くさんばかりのお札が広場の隅という隅まで広がっていた。以前と比べても圧倒的な物量攻撃だ。

「消えるんだから」

その全てがさとりを目掛けて飛んできた時には流石に俺も焦った。いくらさとりでも、これだけの量を相殺するなんて・・・無謀だ。それでいてもさとりは相変わらずの冷静を保っている。それどころか、お得意の余裕な笑みさえ浮かべているのだ。一瞬でも焦ってしまった自分が馬鹿らしい。

「あなたのような力も半端な人間に、本気で私が倒せると思いましたか？」

本当に極わずか、片腕を薙ぎ払っただけだ。たったそれだけで弾丸の如く迫っていた無数のお札が勢いを失い、次の瞬間には風の前の枯れ葉のように無惨に散っていった。

「・・・化け物め」

「それはどうも。・・・自分では到底敵わないから紫に任せよう、ですか。くくく、正直なのは嫌いではありませんよ」

「・・・本当に気持ちの悪い能力ね」

無性にムカムカした。突然押しかけてきて、言いたいことだけ言って、それをさとりは黙って見ているだけだなんて、そんなの理不尽だ。そもそも地上の奴らからけしかけてきた騒動だ。なのにさとりは何故、何も言い返さずに力の横暴を受け入れたのだろうか。

「・・・霊夢と言いましたよね、巫女。あなたに明言しておきます」

改まった態度でさとり。

「今どちらが有利でどちらが不利なのか、八雲とよく話し合うことですね。あなたと違い、彼女には知恵がある」

「・・・随分な言いようね。まぁいいわ、あなたの言う通り紫とよーくお話してあげる」

それはもう鳥肌が立つような不吉な笑みだった。その裏には、平和も協調もあったもんじゃない。攻撃、破壊、そして制圧。そんな狂気にも似た感情がとめどなく溢れ出している、そんな風に感じられ

た。
どうやらさとりもそのことには気がついているようで、半ば諦めのようなため息をつくと小さく肩をすくめてみせた。
巫女はその後何を言うもなく、上層目指して撤収した。このまま呆気なく逃がしていいものかとさとりに尋ねたが、
「ここで無駄な戦いをするほど、私は好戦的ではありませんからね。目的はあくまで戦いの極力回避と終結です。争いは更なる争いを招きますから」
と、あっさり返されてしまった。もっともなことではあるが何故だろう、今の俺には腑に落ちなかった。
「・・・貫斗さん」
呼びかけと言うよりは、無意識に呟いたような口調だった。
「・・・いえ、何でもありません。そろそろ上層の方が心配になってきましたね。少し様子を見てきます、貫斗さんは部屋にいてください。しばらくすれば私かお燐が戻ってくると思いますので」
とだけ言い残すと、さっさと立ち去ってしまった。なんだか少々慌てているようにも見えるのは、ただの錯覚だろうか。
「さーて、と」
思わず声に出た。さとりもいなくなった今、何をしようか。上層へ

はさとりが向かっているし、ここまで地上の奴らが到達してくることもないだろう。幾分か、安堵の息も漏れる。
俺には地底を守る、だなんてさとりみたいな立派なことはできないし、いざ襲われたとしても自分の身すら守ることができない。
まぁどこまでも普通の人間だし、あんな訳のわからない妖怪やちょっとおかしな人間に敵うって方がおかしな話なんだろう。しかし、この世界にいるとどうもそれを仕方ないことと割り切れない部分がある。さとりに守ってもらって、自分はいつもその影。この微妙な感情は、一体どこからやってくるのだろうか。

「久しぶりね、不運な人間」

あまりにも唐突な声。それには間違いなく聞き覚えがあった。後方から不気味に響く、不吉をもたらす悪夢の中で聞くような声。

「・・・どうやらここの主はいないようだけど、これはちょうどいいわね」

できれば二度と聞きたくない声で、彼女は紡ぎ続ける。

「今回も選択肢を与えるわ。あなたの命の選択肢」

以前とは明らかに状況が違う。逃げ道もなければ、撃退用の秘密兵器もあいにく持ち合わせていない。この状況を的確に表す四字熟語

を挙げるとするならば、絶対絶命だ。

「一つ、私の言う通りに動き、私たちに協力する。二つ、私とあなた、互いの命をかけて戦う。・・・選ぶのは二つに一つ、どちらでもお好きな方を選びなさい」

・・・何とかして、時間を稼がないと。

「どうやってここに来た？」

「簡単よ。ちょっと空間を切り取って近道しただけ」

くすくす、と喉を鳴らしてくるのがいやらしい。

「切り取った？」

「一枚の紙に書かれた二つの点をを線で結ぶとき、普通に線を引くのと、点と点の間の紙を切り取ってから余端の紙を結合して線を引くの、どっちが短い線になると思う？」

「・・・空間を、切り取ったというのか？紙と同じ要領で」

「そんなに難しいことじゃないわよ？私の力の前ではね」

巫女とは明らかに違う、絶対的な力を紫は有している。空間から空間へ擬似的にも瞬間移動できるなんて、昔流行ったアニメの世界の話じゃないか。こんな状況でなければ興味も湧いただろうに。

「さて、はぐらかしはこれくらいにして欲しいものね。たったの二択、すぐに答えられるでしょう？」

・・・万事休すか。

「あんたの協力なんてまっぴらごめんだ」

随分と長い空白に感じられた。

「・・・でしょうね。期待通りの返答をどうもありがとう。これであなたを」

何一つ表情を変えるもなく、ただひたすらに薄笑いを浮かべて

「消す口実が出来たわ」

展開された凶器の数々は計り知れない量だった。手加減というものを微塵も感じられない、間違いなく俺を殺しにきている。その事実は悟るまでもなく目の前の凶器と共に突き付けられたのだ。避けるなんてレベルではない。生き残る方法はただ一つ、この壁のような弾幕を消し去るしかない。

「俺にそんな芸当は出来ないか・・・」

その時だった。

「いちっ！」

突然視界が反転した。いや、反転しているのは地面の方だ。

「にっ！！」

耳をつんざく程の爆音と同時、紫と俺が立つ間の地面が瞬時にめくれ上がり、空間ごと遮ったのだ。

「四天王奥義、三歩必殺っ！！！！」

聞き覚えがあるなんてもんじゃない。まさか、こんなところでこの声が聞けるとはな。

「！？この力は・・・くっ！」

壁のようにそびえ立つ岩石の山を拳が一撃、紫のいるであろう向こ

う側の空間へ薙ぎ倒すその光景はまさしく、怪力そのものだ。

「貫斗！無事か！？」

後方から別の、しかしこちらもお馴染みの声。

「勇儀！炎綺！真奈！どうしてここに！？」

「仲間の危機に駆け付けないほど、私たち鬼は薄情じゃないさ！」

「この炎綺様が来たからにはもう安心だ。大舟に乗ったつもりでいな！」

「心配、いらない」

・・・これほどこいつらのことを心強く思ったのは初めてだな。

「・・・助かる、皆」

「なーにあらたまってるんだよ。ほら、目の前の敵さんはまだぴんぴんだ」

凄まじい土埃も次第に晴れ、物音一つたてることのない紫が姿を現す。

「鬼・・・？まさか、鬼が地底の主に力を貸すはずが・・・」

明らかな戸惑いを、勇儀は切り裂かんとばかりに仁王立ち、

「あいつのことは信用してないさ。私たちは仲間を助ける・・・ただそれだけだ」

「・・・やはり、あの場で殺すべきだったわね」

苦いものをかみつぶしたような表情で

「貫斗、と言ったわね。地底の主、面倒な相手を味方につけたか・・・」

「ごちゃごちゃ言ってないでどうするんだ？私たち三人とやるのか、やらないのか、はっきりしな！」

「三対一では流石に不利ね・・・。まぁいいわ、今日のところは見逃してあげる。だけど次に会ったときは覚えておきなさい」

悪役の吐く捨て台詞のように呟くと、紫は空間を切り取った。全く文字通りすぎて描写の説明も先の一言で事足りてしまうところだが、あえて言葉にするならば、空間にぽっかりと亀裂が入り、恐らくは別の場所へ通ずるであろう穴が出現したといったところだろうか。あまり入って行きたくはないグロい紫色をしていたが、紫はなんなくその亀裂へ入り、気がついたらそこは綺麗さっぱりなんの変哲もない元の空間に戻っていた。

「ったく、何なんだあいつはよ。見かけねえ妖怪だったが・・・」

さも不機嫌そうに炎綺がぼやく。

「・・・厄介な相手をまあ敵に回したもんだな」

それに対し、勇儀は柄に似合わない渋い顔をして言った。

「知ってるのか、あいつのこと？」

「知ってるも何も、地上と地底を半永久的に干渉させない条約を結

ばせた張本人だ。もう何百年も前のことだが、今でもはっきり覚えてるよ。あいつはその辺の妖怪とは格が違う」
「それだけの力を・・・」
「力は勿論、頭もな。何を考えているんだか、全く想像もつかんよ」
勇儀がこれほど言うのなら、相当な力の持ち主なのは間違いないだろう。流石にさとりも、紫と真っ向から戦うことになったら危ういい。
「あいつら、地底を狙ってるんだってな」
唐突に炎綺が聞いてくる。
「ああ、間違いない。地底に全責任を被せて総力戦にもち込もうとしている」
「・・・ならば、あたしらも協力するかね」
頼もしい笑みだった。他の二人もうんうんと頷いてくれる。・・・今まで抱えていた不安要素が一気に解き放たれた気分だ。
「さとりの奴は気に食わないが・・・あたし達の縄張りを侵そうってんなら容赦はしない！」
「敵に人間・・・いる？」
「ああ、あんたたちと戦ったっていう巫女もさっき攻めてきた」
「・・・じゅるり」
「・・・」
やっぱり鬼は怖い・・・。

「四天王？あなたたちが貫斗さんを・・・」

さとりは戻ってくるや否や、息を切らせながらそう呟いていた。服もかなり乱れているところを見ると、どうやら一乱闘あったようだが。

「何とか鎮圧はしました。しかし、何故あなたたちが私たちに協力を・・・？」

心を読めるにも関わらずさも不思議そうな顔つきをするさとり。

「そりゃま、私達もやるときはやるさ。なぁ炎綺」

「おうさ。さとりさんにゃ日頃お世話になってるからなー」

「右に同じく」

「・・・心にもないことを」

そう言うさとりの表情は心なしか笑顔だった。

「な、なにさ。そんな顔して」
「いえ。・・・頼もしい限りですよ」

お互いの思惑はイマイチ掴めないが、とりあえず協力しあうってことでいいんだろう。先程の一件もあるし、本当に心強い。

「・・・しかし、事態は難儀なのが現状です」

先程までの笑顔はどこへやら、いきなり深刻な表情を浮かべて

「上層部を縄張りとする土蜘蛛や橋姫といった妖怪は相次いで敗北、旧都ももはや壊滅寸前。残る旧地獄街道を突破されれば次はここ、地霊殿に攻め込んでくるでしょう」

事態の深刻さに思わず唾を飲んだ。旧地獄街道が最終防衛ラインと言ったところか。思えばここにきて、勇儀達に初めて出会った場所なんだよな。そこで戦いが起こるかもしれない・・・なんだか複雑な心境だ。

「戦いは、極力避けたいものです。それには四天王、あなたたちの力が必要不可欠です」
「力なら私達に敵う奴はいないな」
「・・・力とは、何も武力だけを指すのではありませんよ」

意味深な言葉だったが、誰ひとりその意図を聞こうとはしなかった。

「そんな浮かない顔するなよなー貫斗。あたし達が力を貸すんだ、心配いらないっての！」

どうやら俺はまだ不安な顔をしていたらしいな。炎綺に肩を（もの凄い馬鹿力で）組まれて、妙な安堵感が生まれる。

「そうだそうだ、とっととこんな争い終わらせて、また四人で酒を平らげようさ！」

「そ、そうだな。とりあえず手を離し・・・・く、苦し・・・・」

加えて勇儀まで肩に腕を回してくる。全く、少しは加減と言うものを覚えて欲しいものだな。柔らかいモノに挟まれて普通なら素直に喜べる場面なのだろうが、ゆったりと意識が遠退いて・・・

「遊んでいる時間はありませんよ。一刻も早く、止めに向かわなければ」

さとりの一言で漸く地獄（別の意味で）から開放されることとなった。危うく川が見えかかったが、地獄跡で死んだらやっぱり地獄へ落ちるのだろうか？

「わかってるさ。さぁ、とっとと行こうぜ兄弟！」

「ああ、私たちにかかればなんてことはないな」

「無差別・・・蹂躙・・・ふ、ふふふ・・・」

最後のはまぁ・・・聞こえなかったことにしよう・・・。

この時の誰ひとり、不安を抱えていない者はいなかったと思う。さとりに燐、それに三天王を加えたってせいぜい五人。さとりが総力戦と言うからには、地上の奴らは物凄い数で攻めてきていることが想定できる。それを、本当に五人だけでとめられるのだろうか？・・・少し考えれば誰にだって分かる話である。

・・・こうやって卑屈になるのはよくないな。だけど、果たして今の現状でもさとりは、余裕を見せてくれるのだろうか。

「なぁ、さとり」

心を読んでいたんだろう。振り向いたその表情は、全てを悟ったものだった。

「争いが終われば、元の世界にも戻ることができるはずです。何も、心配はいりませんよ」

元の世界、か。そういえば俺はある種遭難していたんだったな。こっちの世界にきてから早くも二週間、すっかり生活が定着しちゃったもんだから、元の世界に帰るという大前提の目標を見失いかけていた。・・・いや、既に見失っているのかもしれない。

「・・・」

いつからか目標は争いの沈着になっているし、そもそも元の世界に

帰る理由そのものを忘れかけてしまっていた。なんともまぁマヌケな話だが、それほどにこの世界が心地良かった。

燐は破天荒なところもあるがどこか憎めない、退屈という退屈を片っ端から潰してくれる。三天王も、なんだかんだ言って頼りになるし、一緒にいて賑やかで楽しい。そしてさとりは、右も左もわからない俺を救ってくれた上に元の世界に帰る協力までしてくれた。そんな彼女達の領域が今、理不尽な理由によって奪われようとしているのだ。そんな横暴を見ないフリしてのこのこ帰るなんて・・・俺にはできない。

「・・・その気持ち、四天王にも聞かせてやりたいですね」

例によって思考は筒抜けだった。でも、そんなことは構わない。

「いよいよだな」

「ええ、ですね」

随分と登った気がする。程よく足がくたびれて、出来ることなら座りたいくらいだ。

「我ら四天王に刃向かう者に！」

「我ら地底の民に刃向かう者に！」

「・・・死の制裁を」

「彼女達の勝手は許されません。行きますよ、皆さん」

流石妖怪、疲れを知らないようである。・・・ここまできたらそれは当たり前か。

「やるからには、成功を期待してるぜ？」

そして運命の扉は開いた。

第六話　結束の担い手（後書き）

三天王、タイミング良すぎです。

第七話　総力戦

「きたわね」

地底にも関わらず日傘を携え、嘲笑気味に短くそう呟いたのは紛れも無い、

「紫・・・」

先程俺を殺そうとした少女の周りには、紅白の巫女の姿。

「素直に降参すれば、命だけは助けてもいいけど？」

結論から言えば、数においては予想通り大敗を喫っしていた。総力戦の名はお飾りではないようで、ざっと見渡しただけでも百近い妖怪がひしめいている姿に、思わず一歩後ずさる。
その状況下で、さとりは不気味に笑みを浮かべていた。

「大半が寄せ集めですか。強力な妖怪はそう簡単には協力してくれない、と」
「・・・そうね、確かに殆どの妖怪はこの話に聞く耳も持たなかった。しかし、それでも実力者の数はこちらが勝っているのよ？」
紫に霊夢、残る強敵は一体どこだ？ハッタリではなさそうだが・・・

「遅れてごめんなさ～い。支度に手間取っちゃったわ」

凍り付いた場の空気が一瞬で熱湯を注がれたかのように溶けきった。
その声は遥か後方、しかし着実にこちらに近づいてきている。

「幽々子さま、あまり場の空気を壊すようなことは・・・」
「いいのよ、妖夢。これは負けようのない戦なんだから」
「それは、そうですけどー・・・」

片方は青と白を基調として、多量のフリルで飾られた着物姿の少女。
人間とは思えない程色白で、夜の墓場なんかにでてきたら鳥肌がたちそうである。
対するもう片方の少女は控え目な緑色の服装で清楚な印象を受ける。
こちらも負けず劣らずに色白だ。

「これはまた厄介な相手のようですね」

さとりは彼女達を、厄介な相手と位付けた。

「一見何も考えていないように見えますが、だからこそタチが悪い。
八雲ほどの実力者をまだ揃えるとは・・・」
「・・・それほどなのか」

たった五人で、彼女達全員を相手にできるのだろうか。・・・ただでさえ俺は戦力にならないと言うのに。

「流石に現状を目の当たりにすると参るなぁ。いけるか、勇儀？」
「厳しいねぇ。・・・どうだいさとりさん、ここは一旦体制を立て直すってのは？」
「まぁ落ち着いて下さい。勝機もないのにわざわざこんなところま

で足を運んだりしませんよ」

あくまで秘策があることを示唆するさとりだが、この状況を打開する策など果たしてあるのだろうか。

「さて、こっちもあまり時間を裂きたくないの。さっさと終わらせましょう、お互いの為に」

紫の発言が、場の空気をも左右する。

「・・・攻撃開始」

信じられない光景だった。今までの攻撃がいかに生温かったか、辛くも思い知らされてしまった。

無限に飛び交う弾幕の嵐、直接捩伏せようと猛突進を繰り出す妖怪達、そしてなにより、それら全てを統帥する紫自身による破壊の光線は、平穏だった街道の地面を無残にもえぐり、そしてさとり達を容赦なく襲う。今まで彼女がいかに手加減をしていたか、光景そのものがそれを物語っている。こんなもの、争いでも戦争でもなんでもない。ただの破壊じゃないか！

「四天王秘技、天貫火焔！」

更に信じがたい光景に、身震いさえ起こす。近づこうとする全ての者、物を焼き払わんとする炎綺の炎は、こんな空間じゃ狭いと言わんばかりに石造りのはずの天井を破壊、更には地上へと到達する勢いで燃え盛り、それこそ炎の渦を生み出したのだ。

驚くのはその光景だけじゃない。百近い敵の攻撃をたった一人、炎綺の力によって防いでいるという事実だ。

「っつー、こりゃ思った以上だな。いくらあたしの炎でも長いこともちそうにはなさそうだ」

両腕を突き出し炎を放出する炎綺は苦痛の表情を浮かべながら言う。

「想起、天貫火焔」

そのすぐ隣、全く同じように腕を突き出すさとりは炎綺にも劣らない火炎を放射。二人の炎は互いに渦を巻きながら文字通り天を貫き、そして敵をも焼き尽くす。こちらからでは炎の向こう側がどうなっているかまでは確認出来ないが、少なくとも無傷ではない、甚大な被害を与えていると信じるに十分な圧倒的な光景であった。

「さとりさん!?」

「もう少し、私に力を貸して下さい。必ずこの地は守り通して見せます」

「・・・へっ。言われなくてもこれくらい、どうってことないさ!」

地獄の業火の中、不気味に響く一つの声を聞き逃さなかった。

「紫が助けてーっ!なんて言うから何事かと思ったけど、なるほど。これはなかなかの好敵手だわ」

紫が幽々子と呼んでいた少女の声が、炎の先から響き渡ってきた。言葉に似合わぬ冷たい声が背筋を凍らせ、炎の勢いさえも止めんとしているかのようだ。さとりが言った、紫程の実力という言葉も頷ける。

「!?、避けて下さい!!」

さとりは炎綺を抱きかかえ、真横へ飛びのいた。あまりに突然で一瞬何が起こったのか分からなかったが、その更に一瞬後、さとり達が元いた場所に突き刺さる閃光の刃にその意図を知らされた。あの炎の中を貫通した上に的確にさとりと炎綺を捉らえることなんて普通出来るか？いや、俺の中の普通とあいつらの中の普通は大きくズレているんだろうが、それでもあんな芸当は出来ないだろう。

「・・・予定外の力ですね。大丈夫ですか、炎綺さん」

庇われる形で押し倒された炎綺に手を差し延べるさとり、その手を何だかぎこちない顔で眺める炎綺。

「・・・あなたが私をどう思っているか、私には分かります。それを私は否定することはしません」

何も言わず、ただ唖然とする炎綺の姿なんて初めて見た。

「それでも力を貸してくれるあなたを見殺しにはしません。ただ、

それだけのことです」

向かいには幽々子の姿。口元を扇子で覆い隠すその風貌は、良からぬことを企む悪党そのものにも見える。

「万物に死をもたらす程度の能力。厄介」

沈黙を守っていた真奈が唐突に呟いた。怯える、とまではいかないが、相当あの扇子女のことを警戒しているようだった。

「死をもたらす・・・。なるほど、彼女は敵の能力を知る能力を有しているのですか」

と感心したかと思えばすぐさま表情を曇らせる。

「死をもたらすねぇ。私たち鬼にどこまで通用するもんか」

「するわよ」

出来れば二度と聞きたくない、そう思ってしまう程に幽々子の一言一言には寒気立つ。それが、死を暗示する言葉だからだとでも言うのだろうか。

「あなたは愚か、そこの地底の主さんにも、巫女にも、半人半霊であるこの妖夢にも、そして紫にもね」

反則の能力だ。死刑道具いらずの能力だな。今年からこいつを死刑執行所に配備するといい。俺達にその力を使うよかよっぽど有意義だと思うぞ。

・・・まずい、軽く混乱してきたな。向こうの幽々子はまだ援軍がくるような顔をしてるし、せめて俺が少しでも力になれれば。

「・・・マスタースパーク！！」

地底であまりに唐突なその男勝りの声はよく響いた。その瞬間、紫がにやりと口元をつりあげるのを見逃さなかった。心を見透かされているようなタイミングでさらなる敵・・・流石に戦力が、違いすぎる。

そう思い込んでいたのもつかの間だった。

「な・・・くっ！？」

地面をえぐりとらんと跋扈する魔力の集合は、あろうことか紫達を標的として捉えていた！これは・・・どういうことだ？

「ひっさしぶりー！元気だったかい、同士たちよー！」

これまた場に似つかわない緩い声だ。なんだなんだ、もしかして力のある奴ってのは何かしら性格的に抜けてるのか？

「・・・あや、萃香じゃないか！」

紫の後ろ遥か遠方、二人の姿を確認するや否や勇儀が目を輝かせて叫んだ。さとりとともに敵の攻撃を防いでいた炎綺も、俺の隣で幽々子に対し嫌悪的な視線を送っていた真奈でさえも、同じようにその少女の登場を心から歓迎していた。あれは敵ではない、間違いなく味方だ！

「・・・魔理沙。どういうつもり？」

今まで沈黙を決め込んでいた巫女がようやく口を開く。魔理沙・・・。萃香と呼ばれた少女の隣、さっき派手な攻撃をぶっ放していた少女のことだろう。

「正義のヒーローの登場だぜ！地底の皆、私が来たからにはもう安心だ！」

すごく微妙な空気が流れた気がする。暫く沈黙が続いたのち、漸く炎綺が一言。

「・・・誰だ？」

「地上の可憐な魔法使い、霧雨魔理沙だ！折角萃香から話を聞いて救援にきてやったってのに歓迎の一つもないのか？」

「・・・い、いえ。救援でしたら心強い限りです」

さとりがものすごく困った表情で対応。つか、こんなさとりの顔見たの初めてだぞ・・・。

「これまた一体どういうことだ？全く状況が掴めないんだが・・・」
「私は地上で暮らす鬼さ。伊吹の萃香っていうんだー。地底の鬼三人と私は親友でね、その助けに駆け付けたってだけの話だよ」
「で、その相談を受けて私も助太刀しようってことになった訳だ。納得したかー霊夢？」

あの巫女に対し、とてつもなく挑戦的な態度の魔理沙。会話から察すると少なくとも二人は知り合いのようだが、どちらの実力が上手なのか、そこまではよめない。一方の萃香は・・・なるほど、四天王とか言っておきながら三人しかいなかった謎が漸く解けたぜ。どういういきさつかは知らないが、長らく地底の三人とは別れて地上で活動してたってわけだ。

とりあえずこれでこちらの戦力は鬼が四人、魔理沙、そしてさとりの計六人。対する敵は四人と寄せ集め数十。これなら互角、あるいはそれ以上に戦えるかもしれない。

「さとりは、この展開を読んでいたのか」
「鬼の故郷を荒らされるとなっては、地上の鬼も黙ってはいないでしょうからね。あの黒いのは想定外ですが」
「で、どうすんだい地上の侵略者さんたちよぉ！この状況じゃ、流石のあんたたちも余裕こいてる場合じゃないだろうさ！」

勇儀は今までの鬱憤を晴らそうと挑発を仕掛ける。有利とまではいかないが、戦力が互角に近いことは相手も承知だろう。揺らいだ勝利に、誰もが動揺を隠し切れなかった。

ただ、一人を除いては。

「蜜に群がる蟻の様にあなたたちはここに集められた・・・それにも気付かず、暢気なことを言うものね」

悪党でもあんな顔はしない、悍ましいほどの微笑み。どうしたらあんな表情ができるんだよ・・・。

「私たちの戦力が本当にこれだけだと思っているの？私たちの目的は異変解決、地底の殲滅。こんな地上付近の寂れた土地に興味はないわ」

「な、なんだと・・・！」

今にも飛び掛かりそうな炎綺を萃香が慌ててとめる。縄張りに対して寂れた土地なんていわれちゃ、炎綺の性格じゃ黙ってはいないだろうな。

「更に下層、それもここに引けを取らない大軍勢を送り込んだ。そうですよね、地上の愚かな指導者よ」

「・・・これだけの戦力をこちらに割いて、まだ対策が・・・？」

その瞬間、憂いを掠めたさとりの表情を見逃しはしなかった。・・・なるほどな、根底までは掴めないが、さとりが何を言いたいのか漸く分かってきたぜ。そう、この場に足りない人物を俺は知っている。

「私はさとり。あなたの手の内など、紙に書かれた読み物を読む程度に過ぎない」

チェックメイトと言わんばかりの威圧的な口調で、さとりは場の空

気すらを支配してしまった。こうなればもはやさとりに盾突く者などいない、そう思わせんばかりの現状には感服せざるをえない。

「・・・くくく」

不気味だった。その表情といい、声といい、場の空気といい、なにもかもが。

「霊夢、一旦退くわ」

「ここまできて、・・・まさか、あれを？」

味方であるはずの霊夢ですら、紫のその表情には恐怖している。お化けとか妖怪とか、そんな中途半端な怖さではない。

「確かに、このままでは私達の方が不利。更に下層に強襲させた者達からの援護も望めないのなら仕方ないわね」

言葉とは裏腹に嘲笑する。

「・・・正気ですか？」

ぽつりとさとりが、なるだけ平静を保って呟いていた。

「私は至って正気よ？心を知り尽くす地底の主さん、あなたの貧弱な力で私達の強大な力を止めることができるかしら？」

「・・・」

間もなくして空間に歪みを作り出した紫は、手品のように連れてきた妖怪全てを撤退させた。あれだけの人数をいとも簡単に瞬間移動させるとは、気持ちの悪い反則能力だ。

「あいつは、何を考えているんだ？」

街道に取り残された四人を、草木の焦げる臭いが貫く。野戦後の大地は、きっとこんな風景なのだろう。

「これは、地底のみならず地上にも関わる空前絶後の危機。恐らくは、人間界をも・・・」

思わず唾を飲んだ。恐らく紫は今まで本気を出していない。それどころか、この陣取り合戦を楽しんでいただけに過ぎないのかもしれないのだ。

今度こそ、本気を出すんだろう。あの顔を見ればだれだってそれくらいのことはわかる。

・・・その程度に考えていた。本気という漠然とした言葉でも表現できるだろう、ただ俺は、その本気と言うものがどれほど恐ろしく、危険なものであるか、知るよしもなかったのだ。

「世界を、創造する。それが彼女の計画です」

誰もが言葉を失い、時が止まったような気がした。

「・・・世界を、創造？それは何の冗談だ？ゲームじゃあるまいし、どうやったらそんなことが」

「これは彼女にとってゲームなんですよ。誰が死のうと彼女には関係ない。ただ一つの目標、世界の創造さえ成し得れば」

「馬鹿馬鹿しい！私達が四人揃ったんだ、そんな計画、一ひねりにしてやるよ」

「彼女には確固たる勝算があります。その計画の名は・・・」

その表情に、余裕はなかった。

「・・・プロジェクトA」

かくして、地底の戦いが終結するとともに世界を巻き込む騒動の導火線に火がつけられることとなった。

第七話　総力戦（後書き）

そんなに戦闘はありませんでしたね

第八話　幻想の裂け目

旧火焔地獄。

俺が燐に初めて出会った場所。

しかして今立っているその場所は、とてもそのような思い出深い場所とは思えぬ程に目を覆いたくなるような惨状だった。

「・・・おい燐！どこだ！？」

誰一人残っていなかった。あるのは、黒ずみ雑巾のように転がっている大量の無惨な人型の何かだった。

「・・・酷いな」

声を震わせる魔理沙、そしてこの光景に必死に目を逸らそうとする四天王。そして

「大丈夫、お燐は死んではいませんよ」

死んでいない？それは一体なんのつもりだ？下層のことで、さとりは何度も憂いた顔してたじゃないか。そのうえこの惨状を見ても、燐が生きている？冗談がきついんじゃないか？

「そういうつもりではありませんでした、すいません・・・。しかし、お燐が死んでいないと言うのは事実です」
「・・・本当なのか？」

目を見ればすぐにそれが真実と分かったが、聞き返さずにはいられなかった。

「ええ、もし八雲の命令を忠実にこなしているのであれば、恐らくお燐は地上へ連行されたでしょう」
「地上に！？」

ということは、命の保証なんてないじゃないか！生きているかどうかなんて・・・

「いえ、意味もなく八雲が人質をとるような真似はしないでしょう。地底の実力者はなるべく生きて捕らえるよう、彼女は計画しているようですし」
「そうか・・・、悪い、少し熱くなりすぎた」

辛いのは、さとりも一緒だった。それにこの地に燐がいなければ、旧地獄街道での敗北は必至だったのだ。さとりの判断に、落ち度はない。

「二人してシケた顔すんなよな。取られたのなら、また取り戻せばいい話だ」

こんな時の勇儀の一言は、金じゃ買えない栄養剤だな。

「まったくその通りなのですが、そのためには更なる困難が付き纏うことになります」
「紫の計画か」
「その通り、八雲最大にして完全な策略、それを彼女は『プロジェクトA』と呼んでいます」

プロジェクトA。世界を創造する壮大な計画らしいが、にわかには信じがたいところである。そもそも世界を創造するってどういうことだ？

「それを説明するにはまず彼女の能力から説明しなければなりません。・・・単刀直入に言うと、彼女の能力は『境界を操る力』といったところでしょう」

境界を・・・？一見大した能力には見えないが、実際のところそれがどれだけ驚異の力であるかは先刻にも思い知らされている。

「しかしそれは彼女の力のほんのわずかに過ぎません。この能力の本当に恐ろしいところ、それは能力が概念という枠に及ぶという点です」

概念。つまりは物体外にも通用するってことか？

「単純に言えばそういうことです。そして今、彼女はその力を『世界』という概念に向けようとしている・・・」

・・・なんだかスケールのでかい話になってきたな。紫は一体何をやらかそうとしているんだ。

「具体的に言いましょうか。例えば『海と陸地の境界』を消し去ってしまえば地上を海に沈ませることができます。『昼と夜の境界』を操り昼間を消し去ってしまえば地上は永遠に太陽の訪れない極寒地獄となります」

おいおい、簡単に言うけどそんなことがたやすく出来るはずが

「出来るんですよ。彼女なら」

恐ろしいほど平然とさとりは言う。本当にそんなことが出来るというのなら世界を創造するという荒業も不可能ではないのかもしれない。

「紫の力はいつも反則だからなぁ。まーでも、なんかされる前にぶっ倒せばいい話だぜ」

「倒すっても、そううまくいくかね？どこにいるのかも分からないんだろ？」

「居場所なら見当はついています。その場所の名は」

一同の視線がさとりにくぎづけになる中その薄い唇を細々と動かした。

「・・・幻想の裂け目」

「もう、なんで魔理沙が敵の味方してんのよ！」

霊夢の荒だたしい口調に我興味なしといった視線で返答するは紫。

「いいじゃないの。例え向こうが何人できても彼女達には何も出来ないわ。・・・この二人が私の手中にある限りね」

一方は巨大な翼を休め、小さくうずくまる少女。そして他方には獣のような耳を生やし、紫を睨みながら何か喚いている少女。しかし

てその声は、彼女達の周囲を取り巻き発光する、球状で半透明の障壁に遮られていた。

「結果として地底を潰すことには失敗したけど・・・ふふ、まぁいいわ。霊夢にはもう一頑張りしてもらおうかしらねぇ」

「相変わらず人使いが荒いこと。あくまで私の目的は異変解決だってこと、忘れないでよね」

「分かってるわよ。まぁでも、これで残る不安要素はあと一つ・・・」

「あの、心を読めるっていう気持ちの悪い能力をもった妖怪？」

違うわ、首を横に振りながら紫は静かに呟いた。

確かにさとりの能力は紫の前に壁となっと立ち塞がるだれう。

しかし、それ以上に頭を痛める要素・・・イレギュラーとでも言うべきか、それの存在が完璧である計画に唯一支障をきたす可能性を秘めているのである。地底攻略の作戦は完璧だった。たった一人の妖怪を捩伏せることなど赤子の手を捻るよりも簡単なことであるし、そもそも彼女の力だけならば地底の鬼が味方することもなかったのである。

「でも、最後に勝つのは正義の役目。プロジェクトAはそれを確固たる事実にしてくれるわ」

「・・・やっぱり、本当にやるつもりなのね」

「当たり前よ」

凍り付くような声色で、

「何千年と生き続けて成しえなかった懇願は今宵、現実のものとなるの。素晴らしいと思わない？」

「・・・そうね」

そして、全ての始まりを告げる朝日が地平線から顔を覗かせた。

自らの先導で四天王、魔理沙を引き連れて地上へと赴いたさとりはひたすら長い階段を昇り続け、更に上を目指していた。夜も明け、ちょうど空が完全な蒼色に染まり出したころ

「で、この先にその幻想の裂け目とやらがあるのか？もう三時間は歩き続けてるぜ？そろそろ休憩を」

「泣き言言わないのー。人間界からきた普通の人間さんはまだぴんぴんしてるよ？」

魔理沙が疲労丸出しの声でぼやくのに対し萃香が一蹴。というか、

流石にぴんぴんはしてないんだが・・・。

「着きましたよ」

さとりの一言で一同はっと正面を見る。いよいよ最終決戦が始まる、その舞台とはいったいどんな場所なのだろうか。その緊張にも似た感情はさっくりと崩されることになる。

「・・・えっと」

「これはつまり」

「立派な住居と・・・庭園？」

四天王ご一行様が頭にクエスチョンマークを浮かべながらおっしゃるその言葉はまさにこの風景を描写するに相応しいものであり、お茶の教室でもやっていそうなんとも独特な雰囲気を醸し出す建物（住居？）と、皇室もびっくりな巨大庭園がセットで堂々と俺達の視界を占拠していた。幻想の裂け目なんていうからてっきり紫の作り出す境界のようなものを想像していたのだが、これは・・・？

「ここって白玉楼じゃないの？なんでまたわざわざ敵の家に？」

四天王で唯一地上で暮らしていた鬼、萃香は怪訝な表情でさとりに聞いた。

「私も、幻想の裂け目の正確な場所は分かりません。ですが、この辺りのどこかにその入口があると聞いています。地上に詳しいお二人なら何か手掛かりを持っていると思ったのですが・・・」

萃香、魔理沙は互いに顔を見合わせしばし静止。そしてでた結論は

「知らないよ」

「知らないぜ」

さぁさっそく詰みましたよこれ。ということはあてもなくがむしゃらにさまよい探すしかないってことか？おいおい冗談きついぜ。

「あらあらこれまた大勢で、ようこそ白玉楼へ～」

と、なんとも間の抜けた声が俺達を凍り付かせた。何故ならその声には聞き覚えがあったからだ。

「幽々子、やっぱり現れたな！」

わざとらしくズビシと指を、その声の主に突き付ける魔理沙。その指の先には、縁側でひらひらと手を振っている幽々子の姿があった。旧地獄街道で戦った時と同一人物とは思えない素敵な笑みである。ある意味気持ち悪い・・・。

「やーねー、あなたたちの方から押しかけて来たのにその言い方は酷いわ～。泣いちゃおうかしら」

「敵意は、ないんですか」

「敵意？何で私があなたたちに敵意を抱かないといけないのかしら？」
「・・・どうやらあなたとは話が合いそうですね。あなたの考える通り、紫の計画は非常に理不尽で危険なものです。恐らくはここ、冥界にも被害が及ぶでしょう」
「そう、あなた、人の心が読めるんだったわね」

突然、幽々子の声のトーンが落ちた。

「それにも関わらずよく私と話せるものね。それも私と話が合うだなんて・・・変な人」
「よく言われますよ。いちいちそんなことを気にしていたらノイローゼじゃ済みませんから、どうぞ私のことはお好きなように思って下さい」

さとりのこの悲観的な言動には思わずため息がでるな。

短い沈黙を、さとり自ら打ち破る。

「あなたが私達の力になってくれないことは分かっています。ですが、もしあなたの親友の過ちを正したいのであれば、少しの知恵を貸してはいただけないでしょうか？」

もちろん俺には幽々子の心は読めないが、その表情が明らかな不快を示していた。心が読まれるのが気に食わないのだろう、俺も初めは抵抗あったからなぁ。

「・・・幻想の裂け目をいくら探しても無駄。何故ならそこは『場

所』ではないから」
「おいおいもう少し分かりやすいヒントをだしてくれよな。私たちにゃ心は読めないんだ」
魔理沙の横槍に顔をしかめる幽々子は声をくもらせて
「幻想の裂け目は、空想の世界の上に成り立っているの。そう、もともとこの世界には存在し得ない場所なのよ」
存在し得ない？それじゃあそこにたどり着く方法はないのか？
「いいえ貫斗さん、方法は一つだけありますよ」
にやり、と不穏な笑みを浮かべるさとりは少し得意げにそう言った。その発言には幽々子も驚愕、どうやらそんな方法などないものと思っていた様子である。しかし、そんな空想の場所にどうやってたどり着きっていうんだ？
「簡単ですよ、ふふふ・・・」

雲とも霞ともとれない霧のようなものが支配する空間は、太陽の光さえ届かない。もしかしたら、月の出る夜の方がまだ明るいかもしれない。

「紫、地底の主達が動き出したみたいよ」

どこともなく聞こえてくるその声に反応するかのように、暗黒だった空間に徐々に光が溢れる。水銀灯のように、ゆっくりと。

「そう」

短い一言に、先の声の主、霊夢は小さく息をついて

「そう、じゃなくて。迎え撃つとかはないの？計画実行まではもう少し時間がかかるんでしょう？」

「そうね」

素っ気ない返答ばかりに少々呆れ気味の霊夢は、もういいわ、と紫に手を振るとその場を後にする。

壮大な壮大な計画、それは失敗の許されない完璧な計画でなければならない。だから紫は、その完璧な計画というレールをただひたすらに突き進む。決して脱線などしないよう、全ては幾度となく練り上げた計画通りに。

突如、ガラスの割けるような嫌な音が空間の中を反響した。耳障りな音だが、紫は口元をつりあげて誰に言うでもなく

「始まりね」

とだけ呟くと、自ら生み出した境界に身を潜め、そして文字通り消えた。

さとりの考えは実に単純だった。空想の空間である幻想の裂け目、しかしもしそこに燐が捕らえられているというのならばそれは空想ではなく現実の空間であるはずだ。しかし幽々子はそこを空想空間と呼び、たどり着く方法はないと言う。つまりは、

「この世界から見る空想空間、すなわちそれは人間界。恐らく彼女はこの世界と人間世界の狭間を膨張させ、それを『幻想の裂け目』と名付けた」

自ら空間を創造し、潜む。なるほど、それなら確かにもともと存在し得ない空間といえる上、紫自身の力でそれを隠蔽するのは容易なことである。

「この世界と人間界の境界。それは・・・」

「博麗神社か！」

魔理沙は見事おいしい台詞を掻っ攫った。

・・・神社ってことは恐らくあの巫女が住んでいるのだろう。だとすれば、例え幻想の裂け目が閉ざされていたとしてもそこで暴れてやれば向こうさんは出て来ざるを得ないはずだ。流石さとりだな、そんなことを一瞬で見抜くとは。

「あくまで推測に過ぎませんけどね。しかしあの巫女が絡んでいるとなれば、その方が彼女達にとっては都合がいいのでしょう」

「あなた・・・」

幽々子は怪訝な表情でさとりに向かい視線を投げた。しかしその言葉を続けようとはしない。

「・・・西行寺幽々子、といいましたね」

その視線か、それ以外の理由か、さとりの声のトーンもいつも以上に低くなる。まるで、何かを恐れているかのように。

「ご協力に感謝します。彼女の計画は必ず阻止しますから、ご安心を」

「・・・やっぱり、そうなのね」

心中の分からない俺達には何を言いたいのかよく分からないが、ただ、その内容が恐ろしいことであるのは二人の口調から容易に想像がつく。語る気はないんだろう。

「偉大なる四天王、強大な力を持つ人間、そして、彼女に信頼を寄せる人間界の青年（イレギュラー）。私が力になれるのはここまでだけど、最後に一つだけ忠告するわ」

今まで吹いていた風が、ぴたりと止んだ。

「この計画は、もはや阻止できない程に進行している。それでも、危険を承知で紫に、いえ、この強大な計画に挑むの？」

・・・何を言うかと思えばそんなこと、聞かれるまでもないな。

「当たり前だ」

「こんなことにこの炎綺様が負けるかってんだ」

「すっきり解決して皆で酒呑むんだからね」

「・・・即日解決」

「私がいれば紫なんて敵じゃないぜ！」

全員がスカっとする程の笑顔だった。不安要素があるなら教えてほしいくらいだな。

「・・・そう。なら行きなさい。止めはしないわ」

日も高い正午、最後の時は着々と近づいていた。

第八話　幻想の裂け目（後書き）

いよいよお話は大詰めになります。私の中ではもう完結しているので、後はそれをうまく文章にするだけ・・・

第九話　暗転する幻想郷

神社への道中、さとりはいつにも増して険しい表情を浮かべながら時折周りには聞こえないくらいの声で何か呟いていた。触らぬ神に祟り無しというが、まさにそんな感じである。何人かはその様子に気付いているようだったが、好んで触れようとする者はいなかった。

「灯台下暗しってやつだな。まさか霊夢の家が敵の本拠地だなんて」

間違いなく気付いていないだろう魔理沙はそんなことを言いながら暢気におにぎりを頬張っていた。俺からして見れば灯台下というか、初耳の場所だけどな。

「神社、人間、集まる？」

「集まるけど・・・食っちゃダメだからな」

「じゅるるる」

いつから真奈は食いしん坊万歳キャラになったんだ？

「おーい、見えてきたぞー」

ふと萃香が声をあげた。その指差す先にはなるほど、立派な鳥居に古風な和式建築、そして賽銭箱らしきものもうかがえる。白玉楼からここまでかなり長い旅路で既に日も傾き始める時間帯、妖怪の一人や二人でも出そうな雰囲気だ。

「ようこそ、博麗神社へ」

いつの間に現れたのか、紅白姿の巫女、霊夢は鳥居の下に堂々と構えていた。

「萃香に加え魔理沙まで味方につけるとは・・・どんな魔法を使ったのか知らないけどいちいち目障りなことしてくれるわね」
「霊夢ー、そろそろ止めといた方がいいよー。そうしたらおいしいお酒持ってくるからさ」
「萃香・・・。酒なら紫に嫌ってほど飲まされてるわよ。それにもう」

自分の目を疑った。陽炎のような靄に紛れて、誰もいないはずの霊夢の周囲を埋め尽くすかのように続々と現れる人、もしくは妖。紫の境界を操る能力か、それにしても派手な演出だ。

「後には引けないわ」

実力者かそうでないか、それにしても大量の敵が並ぶその光景は実に悍ましい。向こうさんも全力というわけか。

「あれだけの頭数を揃えましたか。・・・あの陽炎が幻想の裂け目への入口でしょう、ここはなんとしても突破しなければ」

例え突破できたとしても、ここの戦闘で疲弊すれば控える紫を止めることは出来ないかもしれない。漸くたどり着いたというのに、打

つ手無しってか？

「四天王神技、大地咆哮」

ほんの僅かなささやき。しかしその微かな振動は広がる広葉樹を、地盤を、風を、そして光さえも呼応させる。まるで彼女の、鞍馬真奈の歌声に踊らされているかのように揺れ動き、歌声を被せた。大地は生きている、とはよく言ったものだ。

「真奈、その技は！」
「地底の主、行きなさい。私達、ここ、食い止める」
「大地を・・・？ふん、こんなことをして一体何になると・・・！？」

霊夢の言ったその瞬間に、大地は裂けた。地震でもなければ地殻変動でもなんでもない。間違いない、これは

「歌声で伝わる振動を自然と共鳴させる・・・。なるほど、四天王の名は飾りではないようですね」

地面は俺とさとり、魔理沙を霊夢達と引き離すようになおも裂ける。それも真奈の微妙な唇使いによって裂け目は更に広がり、ついには飛び越えることもままならない程になってしまった。正面には神社、

依然として陽炎のような空間の歪みが視界を遮る。これが、幻想の裂け目・・・。

「貫斗、いけ！この場は私達四天王に任せな！」

炎綺の声だ。まったく、無茶しやがるよな。あれだけの敵をたった四人で相手するなんて、無謀にも程がある。

「・・・ああ、絶対阻止してやる。これが終わったらまた酒でも飲もうな！」

最高の笑顔で炎綺は親指を立ててみせた。こりゃなんとしても成功させないとならなくなったな。

「・・・行きましょう」

さとりを先頭にその怪奇な空間へと足を踏み入れようとする時、人形のように表情を崩さないさとりには余裕すら漂っていた。

この先に紫がいるのか。
燐は無事だろうか。
紫の計画を打ち破る方法はあるのだろうか。
様々な想いが交錯する中ただ一つ、喉の奥にひっかかった小骨のような思いがあった。それは地上に初めて訪れた時から感じている違和感のようなものであったが、気のせいだろうと何度も喉のすぐそこまできたものを飲み込んできた。暫く忘れていたが、あの西行寺

と会っていたときだ、その何かは頭の中で再燃し膨らみ続けているようなのだ。

無論、不安はない。魔理沙とさとりの力さえあれば紫を沈黙させることくらいたやすいと思う。だからおそらくその違和感は、不安とか、それに準じたことではないのだろう。・・・まぁ、だからこそ忘れちまうんだろうけどな。

「貫斗さん・・・焦らずとも、いつか気付くのではないですか？」

そのさとりの一言は、まるで俺の違和感を見透かしているかのようだった。

外の騒がしさにいち早く気付いた紫に対し、慌ただしく駆け付けた妖怪が耳打ちを仕掛けた。

「そう、もう侵入を許したの。・・・まぁいいわ、それで、数は？」
恐ろしいくらいに冷めた声で、問いかける。

「――――」
「予定通りね。これで役者は揃ったわ、後はこの広い劇場の中で自らの役を全うするだけ・・・」

いよいよ計画の実行に移る訳だが、そうとは思えない平然とした口調はその妖怪を驚かせるに十分だった。

「神社前では引き続き四天王の鎮圧を続けなさい。・・・彼女に任せれば概ね問題ないとは思うけれど。侵入者に対しては配慮する必要はないわ」

そういう紫の言葉に一切の迷いはなかった。それは、全て計画と寸分違わず進んでいることを表していると言えよう。着々と計画は進行し、そして完結しようとしている。その快感にも似た感覚に浸りながら紫は一口、酒をあおった。

「あら、もう無くなった」

大吟醸と書かれたラベルの瓶を、ただ恨めしそうに見つめるだけだった。

天をも喰らい尽くさんと燃え盛る炎の渦は、邪気を寄せ付けんとばかりに妖怪達を退ける。その姿は自然が生み出した赤い竜巻ともとれる、触れたら吸い込まれてしまうのではないかという錯覚にすら陥る程の光景に、その場の誰もが息を飲んだ。

「さすが炎綺、派手にやってくれるー！」

「何だかんだでこれにも結構力使うから、早めに決着をつけようさ」

「・・・まかせて」

風の流れが変わる。炎の渦を敵の妖怪集団へ押し倒すように強風が吹くとそれに準じて慌てふためく妖怪達。しかしそれもつかの間で、霊夢の上空からの指示であっという間に包囲網を作られてしまう。

「あら、正面だけ守っても他ががら空きよ？これじゃ時間稼ぎにもならないわね」

霊夢が腕を振るうとそれを機に妖怪達は炎綺目掛けて一斉に弾幕を放った。炎を展開している炎綺はこのままでは動きたくても動けない。にも関わらずその表情は快晴だった。

「んなへっぽこ弾幕、全部受けきってやるぜ！」

途端、前方のみに繰り出されていた炎が自らを包み込むように炎綺の姿を隠した。更により一層火力は増し、近づく弾幕をいとも簡単に焼き尽くしてしまったのである。

「馬鹿な、あの量の弾幕を一瞬で？」

「ほらどうした腰抜けども、そんなへっぴり腰じゃ四天王どころか、この炎綺様すら倒せんぞ？」

高らかに叫ぶ炎綺は纏っていた炎を一気に拡散、周囲を取り囲んでいた妖怪を退ける。

「ふぅん、やっぱり並の妖怪じゃいくら集めても歯が立たない、か。・・・妖怪達、全員帰っていいわよ」

その言葉に四天王全員が耳を疑った。撤退命令？少しでも足止めをするのがあいつらの目的じゃなかったのか？妖怪達も霊夢の言葉にはじめは混乱していたようだが、一人が帰りだすと他の者も次第に立ち去り、やがて残ったのは霊夢ただ一人となった。

「・・・なんのつもりだ？」

驚くほど怪しい笑みを浮かべ、霊夢は答えた。

「なんのつもり？ふふふ、面白い質問ね。別に何も企んでなんかいないわよ。ただこの私、博麗霊夢があなたたちの相手をしてあげようと思って」

「は、一人でか？こいつぁー面白い人間だ。少し私達の力を見くびり過ぎじゃないか？」

「人間、食べてもいい？」

「あー、それはやめとけな・・・」

三人が嘲笑を混ぜて余裕をみせる中、一人だけ霊夢を見つめて動かない者がいた。

「いよいよ霊夢自ら動き出すとなると、計画は相当進んでるんだね」

「おかげさまで順調よ。・・・私の最後の使命はあなたたちの鎮圧。残念だけど通す訳にはいかないわ」

「・・・やっぱり、あれをやるんだ」

萃香のその一言に三人はあらためて視線を霊夢に投げかける。そこには四天王を相手にしているというのに余裕の表情の姿。

「させないよ霊夢、百万鬼夜行！！」

「あはは、もう遅いわ萃香！・・・幻想結界！！」

刹那、萃香の視界が白に染まった。萃香だけではない、勇儀も、炎綺も、真奈も、そして霊夢自らも、太陽のような強烈な光をその目に受けたかのように真っ白に・・・。その間は誰も身動きをとることが出来ず、漸く体が動くようになったかと思えば誰もが自らの目を疑った。

「・・・なんだ、ここは？」

先陣をきってぽつりと勇儀が呟く。彼女達の視界に広がったのは元いた神社前の殺風景な空間ではない。宇宙にでも放り出されたような錯覚さえ覚える、黒い、暗黒の空間。絶え間無く走る稲妻が唯一暗黒を淡く照らしていた。手品師も驚きの急変ぶりにしばし立ち尽くす四人に息を吹き込むように語り始めるのは恐らくこの異変の元凶。

「ここは私が作り出した境界と境界の隙間・・・。紫ほど立派なものじゃないけど、あなたたち四人ならこの程度で十分ね」

「境界と境界の隙間・・・空間の隔離か」

「ご名答、話が早くて助かるわ。その通り、ここは外の世界から切り離された空間。外からの干渉はもちろん、内側からも一切の干渉ができないの。素敵でしょう？」

「へぇ、悪趣味だこと」

突然吹雪にでも見舞われたかのように場が凍り付いていた。四天王は少なからず焦っていたのだ。平常空間から隔離されたということはすなわち、そう簡単には元の世界へは帰してくれないということである。ここでもたもたしていては貫斗達の手助けに入ることが出来ないのだ。

「でも私は優しいから、この空間から抜け出す方法を教えてあげるわ」

その瞬間、誰もがいい予感はしなかった。中でも萃香だけは、霊夢をどこか悲しげな眼差しで見つめていた。

「私が術を解除するか、もしくは私が死ぬことが脱出の条件よ」

「・・・なら、早めに解除するんだな。あんた一人で私達を相手にするのは、無謀だ」

不意にでた言葉に思わず口を塞ぐ炎綺。この期におよんでなんで敵の心配をしているのだろうか、幻想の裂け目では貫斗達が危ない目に遭っているかもしれないってのに・・・。

「残念だけど解除はしないわ。どうしても元の世界に戻りたいというのならば、本気でかかってきなさい。神社の巫女たる所以・・・見せてあげるから」

「霊夢！馬鹿なこと言ってないで、早く術解いてよ！分かってるんでしょ？紫が間違った道に進もうとしてるってさ！」

「間違っているのはあんたたちよ。紫はこの腐りきった世界を修正しようとしているだけ、それに手を貸す私と反抗するあんたたちの果たしてどっちが間違っていると思う？」

「誰も世界を作りかえるなんてことやっていい訳ないだろ？お前たちはただ自分の理想を突き通そうとしてるだけなんだよ」

ひたすらに走る稲妻が一瞬止むと暗闇の空間が訪れる。宇宙のど真ん中に立たされているかのような無音空間、重力感覚が狂いそうな程の重い空気の流れを断ち切ったのはこの空間の創造者だった。

「・・・ふふ、そうかもしれないわね。だけど、人には譲れないものの一つや二つあるものなのよ！」

「くるぞ炎綺、迎え撃て！」

「へん、地獄の業火を越えられるかな！？」

幻想の裂け目は、結論からいえばなんの障害もなく俺達を迎え入れた。少なからず予想していた敵の迎撃もなければ侵入を妨害するような罠もない。言い方を変えれば、俺達を誘っているようにも見える。紫の奴が何を企んでいるのか知らないが、それでも進まなければ話は進まない。

「いいえ、彼女は何も企んでいませんよ。いや、企めるはずがない、と言った方が正しいでしょうか」

「・・・すごい自信だな、やっぱり心を読んだのか？」
「ふふふ、まぁそんなところです」
「いつまでいちゃついてんだよお二人さん、どうやら黒幕の登場みたいだぜ」

どこをどうしたらそう見えるのかはさておき魔理沙が視線を投げる先、悠然と立ち塞がるその姿はつい最近地底でも出会ったものだった。

「紫・・・」
「あら、随分遅かったじゃないの。お酒も空けちゃって退屈していたところだったわ」

控えているであろう最終決選を目の前にしているにも関わらず余裕な顔でそんなことを言ってのけやがった。全く、たいした自信だぜ。

「やはり、手遅れでしたか」
「手遅れ？マジかよそれ」
「流石地底の主、読心術に長けていること。その通り、既に計画は最終段階に移行している、人間は愚か、あなたのような大妖怪にももはや止める術はないわ」

ここまできて打つ手がないってのか？さとりにも止めることができないのなら、俺達に止められるはずもない。

「さぁどうするの、地底の主とそれに付き纏う人間さん。無駄だと分かって私に抗ってみるもよし、諦めて帰るもよし、自由にすると

いいわ。ま、どちらの道を辿っても行き着く先は同じだけど」

「・・・行き着く先は同じ？それは違いますよ」

普段と何ら変わりない声色は安心を得るに十分なものだった。

「そうだぜ！お前をぶっ倒せばこの異変は解決する、いつの異変だってそうだったようにな！」

「常識にとらわれる哀れな人達・・・。ここは幻想の裂け目、あなたの常識がどこまで通用するかしら」

何を言われても動じるさとり達ではなかった。この世界の人は皆そうだ、自分に絶対的な自信を持っていて、何があってもそれを揺るがせない。それがプラスに働くかマイナスに働くかは場合によりけりだろうが、少なくともたった今この状況においては間違いなく正に働いている。

だがそれは紫も同じで、魔理沙とさとりを相手にしようというのに一歩も引かない・・・寧ろさとりを圧倒してしまうような口ぶりなのだ。

「貫斗さん」

なんて考えていたら突然そんな耳打ちをされて盛大に飛びのく。

「な、なんだ急に・・・」

「いいですか、二度は言いませんからよく聞いてください」

「――――――」

改まった態度に直ちに混乱した上、その話はその状態を更に悪化させるものだった。

「・・・は？」

「二度は言いませんと、そう言ったはずです。私が伝えたことを貫斗さんがどう受け入れるかは自由ですが、そうですね。私は貫斗さんを信じていますから」

「信じているって・・・言ってる意味がわからねーよ。なんか考えがあるんだろ？だったらそれを」

しかし、その追求はさとりに届くことなく空を切る形となった。

「さぁ、始めるならそろそろ始めましょう地底の主。退屈は妖怪をダメにするわよ？」

「・・・そうですね。余り戦いは好きませんがいいでしょう」

不自然なまでに静かに、その戦いは幕をあけることになった。

「あなたの死をもってして、この計画に花を咲かせるわ！」
「あなたの死をもってして、この捻れた幻想を終息させます」

第十話　幽遠な思想

稲妻に燈される空間、紅白衣装の白い部分を真っ赤に染めた巫女は咳込みながら膝をついた。遠方から眺めていた萃香は滑り込むように駆け寄って、同じように座り込む。

「霊夢、もうやめなよ・・・。このままだと本当に死んじゃうよ！」

口では強気なことを言ってはいたものの所詮は人間。四人の鬼をひとりで相手するなど到底無理であることは彼女も分かっていただろう。

それでもなお立ち向かう霊夢の決意は、恐らく何が起きても揺らぐことはない。

「なんでそこまでするんだよ。お前自身死んじまったら世界を変えても何にもならないだろ？」

「そうさ、全く馬鹿な巫女だよ。これ以上やっても無駄だね、さっさと術を解きやがれってんだ」

「命を粗末にする・・・とても愚か」

荒い息を整え、漸く立ち上がった霊夢はリボンで結った髪を解きながら

「あんたらはそんなこと分からなくていいのよ。何があってもここは絶対通さないから」

「・・・霊夢、やっぱり死ぬ気なんだね」

萃香の核心をついた言葉にももはや霊夢は動じることはなかった。

「そんなことより自分の心配をしたらどう？ここは私の空間、いつどこから何が飛び出してきてもおかしくないんだから」
「霊夢の方が心配に決まってるじゃない！」

静寂に支配される空間、萃香の声がどこまでも響き渡っていった。当人の霊夢は勿論、他の三人までもが一瞬にして固まってしまうが、萃香だけは霊夢を問いただすように大声をあげる。

「どうしてそんなに強情に意地を張るの？霊夢が死んだら誰が宴会を開くのさ、私は誰とお花見を楽しめばいいのさ！何が霊夢をそこまで動かすのか、私には解らないよ・・・」

恐ろしいほど無音の時間が流れる。その間視線を逸らすように天上を仰ぐ霊夢の姿を萃香は見つめ続けていた。ざわめいていた稲妻も漸く沈黙し、ほぼ一切の光が空間から消えてしまったことになる。お互いの容姿の確認もままならないまま会話は続く。

「簡単なことじゃない。幻想郷の平和、秩序を保つのが博麗の巫女の努め。私はその責務をまっとうしようとしているだけのことよ」
「そんなことで霊夢が命を投げ出すはずないよ！いつもいい加減でテキトーで、直感のまま気楽に行動してるの私は見てるんだから」
「随分な言いようね・・・。最後くらいかっこよくやらせて欲しいものだわ」
「最後になんか、させない・・・」

そこまで言って、声を詰まらせてしまった。勇儀と炎綺は二人して顔を見合わせ攻撃の手をとめる。

「どうしたんだ萃香のやつ。あの巫女と知り合いなのか？」
「知り合いというか、親友に見えるな。あの萃香があんな声だすなんてこと、私は見たことがない」
「・・・おい、霊夢とやら」
不意に炎綺が声をかける。
「あんた、萃香の友達なんだろう？」
頷きもしなければ、首を振ることもしない。にも関わらず炎綺は続ける。
「別に隠さんでもいいだろう、あんたと萃香の態度を見てりゃ火を見るよりわかるさ。それでもあんたは意地を突っ張り続ける理由があるのか？」
「・・・ふん、あなたたちには関係ないわ」
「関係大ありだ。あたしの仲間がそのせいで困った想いをしてるんだからね」
「そうとも。それに萃香の親友ってこったぁ、そんなに悪い奴じゃないんだろ？」
「勝手なこと言って・・・私はあなたたちの敵で、憎むべき相手なの。それでいいでしょう？」
「よかないさ。私たちは仲間の友達を簡単に殺しちまうほど残酷な集団じゃないよ」
「皆・・・」
目一杯目を擦り、萃香は霊夢に詰め寄る。一歩後ずさる霊夢だったがそれ以上は引き下がろうとしなかった。

「どうして、ここまでするの？」

なるべく無表情に、それでも声は上ずっていた。

「紫のためにここまでやるはずないもん。何があったの、霊夢」

萃香の剣幕は後ろにいる勇儀たちにも届く程だった。もはやはぐらかすことはできないだろう、霊夢は小さく肩を落とし漸く観念した。

「・・・あんたを、あの幻想の裂け目に行かせないためよ」

傷口を押さえ、視線を落としつつ呟く。

「あの場所は入ったら最後、結界を操る力でもない限り永遠に外にでることができない無限地獄よ。恐らく紫はあの場所にあんたたちを閉じ込めて、その隙に計画を実行するつもりね」

「なんだって！それじゃ貫斗達は・・・！」

「ええ、もう二度と元の世界には戻れないわ」

「そんな・・・」

肩を落とすように崩れる炎綺を真奈がなんとか支える。その事実は彼女達には重すぎる。

「それともう一つ、悪い情報があるわ。まぁあなたたちならもしかしたらもう気付いているのかもしれないけど」

「・・・ああ、さとりのことだな」

「やっぱり。いつから気付いていたの？」

「冥界で幽々子って奴に会ったんだがその時だ。・・・だが、一つ

だけ引っ掛かることがある。どうしてさとり自身も幻想の裂け目に向かったんだ？」
「それは分からないわ。私もてっきり苦労して集めた妖怪達の相手をしていくものだと思ったけれど・・・」
霊夢が指を鳴らすと、無光空間だったこの場所に瞬く間に光が広がった。強烈な光に一瞬誰もが目をつむったが、次に開いたときにはあの寂れた神社が飛び込んでくる。
「霊夢・・・！」
「まったく、萃香にあんなこと言われちゃったら私の負けよ。この術持続させるの結構しんどいのね。それにまたあんたの酒で呑みたいし」
「霊夢ー！」
飛びつこうとする萃香をひらりと避けると見事に地面にごっつん、鈍い音と悲痛な悲鳴が同時に鳴り響いた。
「霊夢霊夢ーって、傷に障るからやめなさいよね。・・・それより、あんたたちはあの人間を助けに行くの？」
「そんなこと聞くまでもないな。計画は阻止する、貫斗も助けてやるさ」
「二度と戻れないのよ、一体どうする気かしら？」
「それは・・・そんなもん、向こうにいってから考えるさ！」
「そんなことだろうと思ったわ。さっきも言ったけど、あそこは結界を操る力がないと二度と出ることが出来ない。あなたたちだけで助けに行ったところでミイラ取りがミイラになるようなものよ」
流石に炎綺も反論の余地がなかったか、ぐっと押し黙る。霊夢の言っていることは確かに筋が通っている、その上で彼女は四天王の心

配をしてくれているようにも見える。地底での一件でも彼女はこれといって攻撃をしてこなかったし、もしかしたらもともとこの計画に乗り気ではなかったのかもしれない。

「・・・来なさい。案内するわ」

その表情は心なしか穏やかなものだった。

俺は全力で道なき道を走り続けていた。ちょいとばかし急展開ではあるが許して欲しい、俺も余りの展開の早さについていけないくらいである。

事の発端はさとりのあの時の一言であった。

『ここからずっと遠く、そうですね、東が吉でしょう。先が見えるまで走り続けて下さい。そこの魔法使いも連れて、出来るだけ遠く

に・・・』

この言葉の意図は全く分からなかったが、とにかくさとりの言うことを信じることにする。あの場に留まっても俺にできることは少ないしな。

「おいおいどうしたってんだ突然走り出して。あいつを置いていっちまっていいのかよ？」

「さぁな。俺にも訳がわからん」

「わからんって・・・おーい、ちょっと待てよー」

不満を漏らしながらも魔理沙がついてくる。だんだんと息もあがってきたところだし、少しペースを緩めることにする。

「で、どうすんだいこれから。やっぱり戻ってあいつの助けに入るか？」

「・・・さとりなら大丈夫だ。万に一つも負けるなんてことはないだろうさ。それより心配なのは紫の計画の方だ」

例え紫を倒したところでもう手遅れ。もしそれが本当ならば俺達には微塵も勝ち目が残されていないわけだが、さとりは諦めていない。つまり、まだ勝機はあるってわけだ。

「世界を変えるだなんて大それた事しやがるぜ。そんな力、どこからかき集めてるんだか・・・！」

突然魔理沙の足がとまった。何事だ、と魔理沙がくぎづけになる方を見るとその理由がわかるばかりか、俺まで思わず声をあげてしま

った。

「燐！！」

不覚にも取り乱してしまったが無理もない。もしかしたら二度と会えないのかもしれないと思っていたほどだ。燐もしきりになにか叫んでいるようだったが、彼女を取り囲むようにして束縛している巨大なガラス玉のような障壁に遮られてその声までは聞き取ることが出来ない。

さらに驚くことに、隣に歩きもう一つの障壁に横たわる少女にも見覚えがあった。

「魔力タイプの捕縛用檻だな。これくらいならお安いごようだぜ！」

と自慢げに言った次の瞬間には二つの障壁が淡く発光したかと思うと、シャボン玉のように弾けて消えた。

「はぅ！？」

足場を失った燐は当然重力には逆らえず落下、尻餅。

「大丈夫だったか燐。怪我なんかしてないだろうな・・・」

「・・・か」

「か？」

その瞬間、彼女の姿を捉えることが出来なかった。

「貫斗ーーー！！！」

「って、ええ！！？」

目にも留まらぬ早業とはまさにこのことをいうんだろう。突然懐に物凄い衝撃がはしったかと思えばすっぽりと燐がはまっている上、まるで猫のように（猫なのだが）ほお擦りをしてくる。その間僅か一秒、早業というか神業である。

「ずっと一人で寂しかった・・・、捕まってからずっと誰も話してくれなかったし、貫斗が助けにこなかったらあたい、どうしようかと・・・」

「全く心配かけやがって・・・無事でよかったよ燐」

しばし感動の再開の様相をみせていたが、すぐに隣の障壁の中に閉じられた少女の存在を思い起こす。彼女はその巨大な翼を器用に折りたたみ、目を閉じたまま人形のように動かなかった。その容姿には見覚えがある、確か地底最深部を訪れた時にいたさとりのペットの偽者・・・そうか。

「空、だったな」

「ふえ？貫斗、お空を知ってるの？」

「ああ、まぁ色々あってな。魔理沙」

「がってんだぜ！」

燐の時と同じように障壁は弾けて消える。今度は地面に墜落しないように抱えてやると、

「・・・うう、ん」

子供のような唸り声をあげる。

「お空！大丈夫？」
「あ、お燐！・・・・と」
自分を抱える俺の顔をまじまじと見つめて、見つめて・・・
「・・・誰？」
冷静に考えれば初対面の少女を抱き抱えているというシチュエーションはまずい・・・。慌てて空を下ろしてやる。
「俺は貫斗、ちょっとさとりのところで世話になっててる人間だ。それで、空はどうしてここに」
「さとり様を、早くさとり様を止めて！！でないと大変な事になる・・・！」
さとりの名前を口に出した途端に空は思い出したかのようにそんなことを叫びだした。さとりを止める？止めるべき相手は紫のはずだが・・・
「どういうことだいお空？さとり様は地底を地上の侵略者から守ろうとしてるんだよ？それを止めるって・・・」
「さとり様は地上の妖怪と一緒に世界を変えようとしている・・・私、聞いたんだ。さとり様と変な妖怪がその話をしているのを！」

おいおい待ってくれよ。さとりは今その元凶の紫と戦ってるんだ、それなのにさとりが共謀者だって？それは一体どういう・・・

「嘘だよ！さとり様がそんなことするはずない・・・あたいは信じないよ！」

「私だって信じたくないよ！・・・でも、聞いたんだ。私をあのヘンテコな檻に入れるその直前に・・・」

・・・分からない。さとりがあの紫と手を組んで世界改変に携わっているとは到底思えないし、かといって空が嘘をついているようには見えなかった。なら、真実はなんだ？

「だったら直接その二人に会って確かめるのが手っ取り早いぜ！」

魔理沙が高らかに宣言した。確かにその通りだな、ここでうだうだ考えてても話は進展しそうもないし・・・。

「それじゃ、さとりと紫目指して出発だぜ！」

「・・・それはいいけど、どこにいるんだいさとり様は？」

・・・。

「言われるがままに走って来たんだ、覚えてないぜ！」

ズゴー。

と、とかく俺も正確な道のりなんて覚えてないし、人のことは言えないが・・・。

「お困りのようね」

聞き覚えがあるどころではない、嫌ってほど聞いたその声は俺達のすぐ後ろからだった。

「霊夢・・・！？」

振り向くと同時、思わず目を見開いてしまった。何故なら彼女の回りには、堂々たる容姿の四天王が立ち並んでいたのだから。

「よ、貫斗。無事でなによりだー」

「それはこっちの台詞だ！あれだけの妖怪を、よくたった四人で・・・」

「まーこっちも色々あってな。何とか地上の方は収まったって感じさ」

四人の生還を心から喜ぶと同時、その中心に立つ巫女の姿がやはり納得がいかない。四天王と戦闘があったのか、紅白衣装を所々赤く

染めているのが痛々しいが、彼女は敵である。それが何故四天王と一緒に・・・。

「私がここにいるのが気に食わないような顔ね。でも安心しなさい、今の私の敵はあなたではない・・・」

「・・・どういうつもりだ？」

「もー、霊夢は素直じゃないなぁ。これから私達の仲間として助けてくれることになったんだよ」

・・・そりゃどういう風の吹き回しだ？あれだけ敵対しておいて今更仲間になるなんて・・・

「あんたには分からなくてもいいのよ。それより、紫のところへ行くんでしょう？ならちゃっちゃと転送してあげるから、一箇所に纏まんなさい」

言われるがままに集まると、ぼそぼそと何かを呟き始める霊夢。それに呼応するように地面には光の線で何やらもようのようなものが刻まれていく。

「さぁ、いくわよ。転送結界！」

すべての線が激しい光を放つと、それらは視界を遮るようにして俺達の周囲を囲う。

そして再び、静かな幻想の裂け目へと戻っていった。

第十話　幽遠な思想（後書き）

序幕以来のさとり出番なし。さとりファンの方ごめんなさい

第十一話　幻想の夜明け（前書き）

別の小説に時間を割きずきて更新が疎かになってしまいました。漸く執筆再開ということでお話的にも後数話ですが、最後までお付き合いの程よろしくお願いします。

第十一話　幻想の夜明け

まず、目に写る光景を疑った。続いてその事実を否定しようと必死に目を擦り、擦り・・・それでも現実に変わりはなかった。

幻想の裂け目。それは、人間の世界とこの世界を分かつ裂け目だけではなかったのだ。

「さとり・・・」

当然紫と戦い、勝利をおさめているものと思っていた。燐と空を助けだし、再会を喜び合うものだと信じて疑わなかった。

しかし。

「あら、彼らが帰って来たみたいね、地底の主さん」

「そうですね。予定より早いですが、まぁいいでしょう」

二人は隣り合っていた。その姿は俺の目には、まるで二人が仲間同士であるかのように見えた。

「へぇ、地底では散々騙しておいて今更裏切りかい。ま、最初から信用しちゃいなかったけどね」
「やっぱりあんたは最低の妖怪だよ。・・・このあたしまで騙すなんてね」

騙した？さとりが、俺達をか？これが、真実なのか？

「悪い妖怪もいたもんだなー、ありゃ紫よりタチが悪いぜ」

誰もがその事実を非難し、声を荒立てた。

「・・・全く、紫も人が悪いわね。人を欺くのはお得意ってところかしら？」
「あら、そういう霊夢も私を裏切っているように見えるけど？」
「最初に言ったはずよ。私の目的はあくまで異変解決、あんたのくだらない計画に付き合っている暇はないのよ！」

・・・少し霊夢を敵視しすぎていたのかもしれない。こんなところまで傷を負って協力してくれているんだ、俺も少しは信頼してやらないといけないな。

しかし、真に信頼しなければならないのはさとりだ。紫と一緒にいるってだけで誰もさとりを信用しない、それどころか裏切り者と呼んでしまうのだ。きっとさとりは心を痛めているはず・・・いや、そうに違いない。

「なぁさとり、どうしたんだよ。紫の計画を阻止するんだろ？」

「・・・」

「ほら、さとりに言われた通り燐も空も助けてきたんだ。早くこんなおかしな空間から抜け出して、計画を潰してやろう、な？」

「・・・」

「なぁ・・・返事をしてくれよ、さとり！！」

障害物もないのにその声はよく反響した。そして、静寂した、音のない空間が訪れる。
その空気さえを嘲笑うかのように、紫は口を開いた。

「勇敢な外界の人間、貴方はまだ幼いわ。真っすぐで、信念を貫こうとする。その心意気はあっぱれと言うべきかもしれないわね。・・・でも、その信念故に貴方は真実を見抜けない」

勝ち誇ったかのようなその顔が憎い。しかし、無力な自分はそれに言い返すことは出来なかった。なんと、情けないことか。

「・・・そろそろ日付が変わるわね。私の長年の理想は今！ここに！大輪の花を咲かせるのよ！」
「させないわよ紫、夢想封印！」
「もう遅いわ霊夢！裏切るならもう少し計画的に裏切ることね！」

霊夢の放った攻撃は紫とさとりを貫いた。・・・いや、二人がかつていた空間を、無情にも通過したに過ぎなかった。境界を操る力だろう。

「・・・」

力が入らない。さとりは、最初から俺を騙していたというのか。

さとりは地底で嫌われている妖怪だと勇儀達は言う。しかし俺は、そんなことはないと確信を持って言うことができた。そう、かつての俺ならば・・・。
裏切り、だなんて脳裏に過ぎったことすらなかった。さとりはいつも紫の上をいき、うまく負かしては次なる一手を打ち込んで紫を追い詰めていった。俺が危機に立たされれば決まって助けに入ってくれた、地底全体の危機も知恵と力を巧み細かに操り解決することに成功していった。

それらの行為は、ただこの一瞬の裏切りというクライマックスを無事に迎えるための伏線に過ぎなかったというのか。だとしたらさと

りはどれだけ俺の思考の上をいくんだろうな。

「貫斗は、さとり様を信じないの？」

小さな、油断していれば聞きそびれてしまいそうな程の声で燐は尋ねてきた。

「あんた、さとりのペットだったよな。主人を敬いたい気持ちも分からなくはないが・・・やめときな。おまえも見ただろう、さとりが敵さんと共に逃げていったのをな」

「でも！・・・主人がそんなことをするなんてあたい、信じられないよ・・・」

「物分かりの悪い奴だなぁ、信じる信じないの問題じゃないんだよ。目の前で起こったのは紛れも無い事実、さとりは私達を裏切ったんだ」

「だけど、だけどさ！・・・そんなの、そんなのって・・・」

うっすらと涙まで浮かべ、燐は崩れ落ちた。恐らくは彼女も俺と同じ気持ちだろう。信じられない事実を受け入れまいと真実を否定し、仲間からも批判を浴びる。どれだけやり切れないことだろうか、それがどれだけ恐ろしいことだろうか。

「言い争ってたって事態は解決しないわよ。これからどうするつも

り？」
「・・・少し苛々してたかもな、すまない。で、これからどうするよ貫斗？」
勇儀は言う。さとりがいなくなった今、俺には何もわからない。どこにいくべきか指南してくれる人も、何をすれば事態を解決できるか教えてくれる人もいないのだ。そんな俺に頼られても、事態は動くはずがない。

「何故、俺なんだ」

ぼやく。それを勇儀は、あくまでいつもの気楽な表情で返した。
「初めに言ったじゃないか。私達は貫斗を信じてここまできたんだ。あんたじゃなかったら、他の誰に頼れってんだい？」
「そうそう、あたしは最初っから貫斗についてきたんだよ？どうすればいいか分からないっつーのは皆同じことだ、だったら貫斗の信じるようにやればいい」
「俺の、信じるように・・・」

俺は今まで何を信じてきたのだろう。どうしてこの場に立ち、紫と敵対しているのだろう。どうして何の関係もない地底の騒動に首を突っ込み、これほどの仲間を得ているのだろう。何が俺を、ここまで動かしてきたのだろう。自分の利益の為？己が正義を貫く為？・・・・いや、違う。

・・・考えるまでもなかった、実に簡単な問題だ。何を信頼し、何と共にこの場まできたのか、当たり前過ぎて今まで忘れかけていたことを漸く思い出した。たった一人、この世界にきてから幾度となく世話をやかせてしまったその人に、少しでも力を貸すためだ。

世界を救うなんて大それたことは初めから興味なんてない。俺は、たった一人を信じ抜いてこの場に立っているんだ！

「俺は、最後までさとりを信じるよ」

その一言を口に出した瞬間は実に気持ちがよかった。どうやらこれが正解だったようだな、安心したぜ。

「・・・ったく。貫斗の信念にゃ参っちまうな」

「ああ、全くだ。こんな状況になってもまださとりのことを信じるったーな」

流石に、あの現場を見てしまったらこれ以上さとりを信じろと言っても無理か・・・。まぁ一人で行く覚悟くらいはできてるさ、霊夢も転送くらいならしてはくれるだろう。

「ま、貫斗のことだ。そう言うとは思っていたけどよ」

「・・・は？」

「勘違いするなよな。あたし達は別にさとりを信じようってんじゃない、貫斗を信じて言ってるんだ」

「・・・貫斗、頑固。でもそういうところ、嫌いじゃない」

・・・こいつらときたら、いつもそうだったな。初めから俺の答えを分かっていて、にも関わらず問い詰めてくる。その度に俺は面食らっちまうから困ったもんだぜ。

「他の皆はどうする？確かに傍目から見ればさとりは俺達を裏切ったように見えるな。・・・もしかしたら本当に裏切っているのかもしれない」

誰もその言葉を非難しようとはしなかった。

「でも、俺は最後までさとりを信じる。勿論信じろって言うほうが無理なのはわかってる、帰りたいっつーのが当然の感情だろうな」

全員が着いてくるとは思っていないさ。だけど

「俺達を信じてくれる奴には、最後まで着いてきてほしい」

無理難題で悪い気はしたが、全員が同じ気持ちで臨まないことにはあの紫の計画は打ち破れないだろう。この異変を解決することが出来るのは、俺達とさとりの力があってこそなのだ。

「そりゃー勇儀達が行くっていうなら私も四天王の一人だ。この力、貫斗に託そう！」

「乗り掛かった船だし、私もついてってあげるわよ。感謝することね」

「霊夢もお人よしだなぁ。ま、このまま紫に勝たせるのもシャクだし、力になってやるぜ貫斗！」

「あたいは最初から主人を信じてきた！貫斗が行かないって言っても一人で行く覚悟だよっ！」

「お燐がそう言うなら、私もさとり様を信じようかな。うん、私も一緒にいくよ！」

全員一致、か。どうやらとんだ心配だったみたいだな。これだけ心強い仲間がいるんだ、この光景、さとりにも見せてやりたいよ。

幻想の裂け目とはいえ、俺達仲間を引き裂くことは出来なかったようだな。

「おっし、こんな偽りの幻想なんざさっさと終わらしちまおうか！」

一団はより一層士気を高めていった。

「どうやら彼らも諦めたようね。よくやったわ、地底の主」

小さな、しかし強烈な光を放つ球体を中心に構成された空間。太陽の光など届かないその場所はその小さな球体を光源として漸く空間として認識出来る明かりを得ている。

「流石は心を読む妖怪。相手の心を読み、予め相手の感情を手中に収めることによって何事にもラフに対応出来るって訳ね。完璧な演技だったわ」

その場所とは即ち地底、最深部。咽ぶような熱気が彼女達を襲うが、しかし汗一つ流すことはない。

「あなたのペットの力を使うのはどうやら失敗みたいだけど、この地底の膨大な熱エネルギーがあれば十分だわ。この魔力水晶の充填も今に終わりそして・・・」

小さな球体は徐々に、徐々にその光量を増していく。それを眺める紫はうっとりとした表情で手をかざし、そして撫でるように球体の下部まで這わせる。

白く、何色にも染まらない純粋な光はいよいよ天井を写し出す程までに強まり、そのことが更に紫の心を躍らせた。幾重にも練った計画、それがついに目の前で実現しようとしているのである。もはや焦る必要も不安要素に悩まされる心配もない。これで全て、完結するのだ。

「さとり！！」

その声は、出来れば二度と聞きたくなかった。
何度も計画の邪魔をされ、始末に失敗してきた人間。
結論から言えば彼は無力だった。しかし、今の彼は違う。
何人もの人間、妖怪を引き連れて私に刃向かおうとするれっきとした敵。計画に支障をきたそうとする異物。

「ここいらで遊びは終わりにしようぜ、紫！」
「いくら貴女でも私達全員を相手にして勝てるかしら？」

計画は完璧だった。さとりに裏切られ、目標を失った彼らは二度と団結することはない、ないはずだった。
これも、人間界からやってきたイレギュラーのせいだと言うのか。

・・・しかし、例えそうだとしてももう遅い。

「残念だったわね。もうこの魔力水晶を止められるものはいない・・・。世界を変えるエネルギーは満ちたのよ！例えここで私を殺したとしてもね！」

「いますよ」

まるで悪魔に取り付かれたような寒気がした。その声は紫の計画を

脅かすどころではない、崩壊させることすら容易であるかのような破壊力を秘めていた。
長く生きてきた紫だが、これほどの『恐怖』を、それもたった一言から感じたことは未だかつて一度もなかった。

「・・・地底の主。あなた、まさか」

「ふふふ、待っていましたよ、貫斗さん」

「・・・さとり！」

待っていた、さとりは確かにそう言った。その言葉はさとりが俺達を裏切ってなどいないという確固たる証拠だ。・・・全く、面倒な作戦を使いやがってさとりのやつは・・・。

「まさか・・・この私が騙されていた？ありえないわ！地底の主、何故なの！何故私の理想が分からない！」

今までに見たことのない取り乱し方で半ば叫び気味に訴える紫に、さとりはいつも通りのしっとり声で呟く。

「初めからあなたのくだらない幻想に興味などありませんよ。それよりどうするつもりです？あなたにもう味方はいません。大人しく手をひいてはいかがでしょう？」

「・・・っ！」

ゆらりと紫は体を揺らした。まるで暗闇で足元のおぼつかない人のように壁伝いにゆらゆらと後退してゆく。数からしてもはや紫に勝ち目はない、もはや観念する以外に道はないようにも思える。それでも紫は、にぃと口元をつりあげた。

「そう、そうなの。私には勝ち目がないのね。くくくく・・・勝ち目がないですって。・・・」

「おいおい紫。どうしちまったんだぜ？いい加減諦めろって何度言

ったら」

「あーっはっはっは！！負ける？私が？ありえないわ！計画は執行する！誰にも私を止めることは出来ないわ、世界は一掃され、新たなる世界が今ここに、確立するのよ！！・・・っ！？」

突如言葉を止めた紫は、崩れるようにして地面に伏した。

「・・・夢想、封印」

こうして、紫の巨大な計画を打ち砕くことができたのだった。

「おいさとり！この魔力水晶、まだ生きてるぞ！」

魔理沙の一声が魔力水晶の周囲に全員を集める。煌々と輝くその球体は未だ光量を増し続け、直視できない程までになっていた。

「・・・魔力水晶には予め八雲の力を増幅させるように設定されています。ですが彼女の力を封じた今、蓄えられた魔力は暴走し、やがてはこの幻想郷を崩壊させる程のエネルギーを放出するでしょう」

崩壊だって・・・？そんなことになったら、紫に世界を作り替えられるよりもやばいんじゃないのか？

「まぁ落ち着いて。後は私が何とかしますから、心配しないで下さい。宴会でも開いてはいかがです？一つ異変を解決した後はお酒も進むでしょう」

「お？さとりさんにしちゃ気がきくこと言ってくれるねぇ。そいじゃお言葉に甘えて、酒盛りといきますかい？」

「賛成賛成！終わりよければ全てよしってなー！さとりもそいつが終わったら一緒に飲もうぜ」

「・・・ええ、そうですね」

嫌な違和感だった。さとりはいつもの通りすまし顔で答えただけなのに何故だろう、どうしてもこのままで済ましてはいけないような気がした。
さとりは小さく息をしながら魔力水晶を手に取り、奥地へと進む。なんら問題はない、もしかしたら俺の思い過ごしかもしれない。それでも、嫌な予感ってのは本当にあるもんだな。俺はどうしてもその場を離れることが出来なかった。

「おーい貫斗、何やってんだー？」
「・・・ああ、先に行っててくれ。すぐに追い付く」

勇儀の誘いを断り、俺はさとりが一人向かった方へと歩みを進めるのだった。

第十一話　幻想の夜明け（後書き）

次回、いよいよクライマックスになる・・・かもしれません！

第十二話　想いの燃え殻

普段は光も届かないであろう道、しかしあの魔力水晶とやらの光が進むべき方角を照らしてくれていた。

どうやらここは地底でも相当深いところらしい。色々と熱いものが地べたのすぐそこに埋まっているのだろう、汗が滲み出てくる。

光を追い続けること数分、漸くひらけた場所にでることができた。その場所は刻印柱の広場。勿論オリジナルのそれはもっと上層にあるのだからここはそれを模した、あるいは同じ目的で作られた場所なのだろう。

その中央。深く刻印の刻まれた柱に寄り掛かるようにしてさとりはいた。

隣に魔力水晶を起き、ひじ掛けのようにして腕をのせている。目は細め、なにもない空間をただぼぉと見つめているようだった。水晶の光はやはり先程より強まっているようで、さとりの影が地面にくっきりと浮かび上がっている。

「よ、さとり」

あえて軽く話し掛けてみたところ、さとりはぎょっとしたような顔でこちらに振り向いた。そして俺だとわかったからか、すぐに普段通りのすまし顔になる。

「おや、貫斗さん。宴会には参加しないんですか？」
すまし顔から極僅かだが頬が綻ぶ。
「まーな。ちょっと気になることがあって」
そう口にした途端にさとりの顔が曇る。どうやら嫌な予感ってやつも少しは当てになるようだな。
さとりの隣にゆっくりと腰をかけて、そして目をつむる。
「俺の心が読めているんだろ？」
こくんと頷くさとり。流石の能力だ、話が早くて助かるぜ。
二人を分かつ光源から目を背け、肘を付くその手にそっと重ねる。
「まだ、紫の計画は終わってないんだよな？」
暫く、答えはなかった。まるで返答を躊躇っているかのようにも見えるが、時を刻むごとに光量を増す輝きのせいで既に細かな表情を感じることはできない。そのまましばし時は過ぎ、自分の影が壁に焼き付く程の光を放つようになった時、
「そろそろですね」
そろそろ。その言葉はみるからに沈みきっていた。もしかしたらそのまま光の中に沈んでしまうのではないだろうか、そんな風にさえ

思えてくる程に。
だから俺はその声を手繰りよせようと重ねていた手を強くにぎりしめた。

「・・・」

無音の空間。実際に行ったことはないが、宇宙空間ってやつはこんな感じなんだろうな。そんなどうでもいいことを考え、しかして時は流れていった。

おそらく、さとりと会うのはこれで最後になるだろう。勘に自信はあるほうだ、それくらいのことは何となくだが分かる。
初めてこの世界にやってきてから紫の計画を打ち破るまで二週間といったところか、長いようで短いものである。
たったの二週間だ。この地底で暮らし、地上に赴き、危ない目にも遭った。それらはいい意味で俺の人生を刺激し、生に対する活力にも繋がっていたんだと思う。

しかしそれ以上に、究極的に、他とは違う重い意味を持っているのがさとりの存在であったことは、もはや疑いの余地はないといっていい。そりゃ、初めは地底に住まう恐ろしい妖怪ってイメージもあったかもしれないけどさ、実際勇儀達も当初は相当嫌っていたようだしな。

だけど今は違う。さとりと話している時間は楽しいし、二人で地獄のあちこちを巡っていた日々も今となっては楽しい日常だった、胸

を張って言い切れる。
つまり、その、なんだ。・・・俺、まだこの地底にいたいんだな、多分。

「・・・この球は、紫の力を増幅させるって言ってたよな。他人の技を簡単にコピーできるさとりなら、紫の境界を操る能力とやらを真似れば俺を元の世界に返すことも難しくはないんだろ？」

さとりは首を縦にも横にも振らず、静かに手の平を握ってきた。
心にもないことを言うのですね。先にそう呟くような声で言いながら

「概ねその通りです。ですが、その前に一つだけ問題が残っています。・・・貫斗さんの、『嫌な予感』に該当する部分ですかね」
「・・・やっぱり、そう簡単にはその球の暴走を抑えられそうもないってことか」

「いいえ」

ずんと心臓が波打つ感覚だった。何故ならその時のさとりが恐ろしい程に沈んでいたから。
この光の中でも、その失意に満ちたような表情が伺えるほどに。

「・・・私にも止められないのですよ、この暴走は」

・・・止められない？

今、確かにさとりはそう言った。

止められないということは、魔力の暴走は必然ということだ。

この世界を巻き込む規模の爆発が起こる。

だれもかれもが、死ぬ。

脳内がずくさま暗転し、嫌な目眩すら覚えた。

「止める方法はありませんが、被害を最小限に食い止めることはできますから、ご安心を」
「最小限に・・・？」

ああまただこの感じ。背筋に氷を這わせるような強烈な悪寒が走る。嫌な予感、ってやつは何でこうも頻繁に現れるんだ？

「そうです、せいぜい被害が及ぶのはこの部屋と」

そして、その嫌な予感ってやつは早々に現実のものとなるのであった。

「・・・私くらいですからね」

何言ってんだ、さとりは。さとりが被害を受ける？なんだ、流石のさとりもこの眩しい程のエネルギーが相手じゃ火傷くらい負っちまうってか？おお、それは可哀相に、終わったら手当てしてやんないとな。

・・・それくらい言ってやりたかった、言ってやりたかったとも。だけど、それは無理だった。まじまじと水晶よりも透き通った瞳で、さとりがフランスの人形のように見つめてくるのだから。どことなく、その瞳に写る景色が暗く見える。

再び心臓が波打つような鼓動にみまわれる。

さとりの言おうとしていることはよく理解できた。それを余りにあっさりとした口調で言うものだから、事実として受け入れるのに時間がかかっただけなのだ。

「・・・死ぬ気なのか？」

この二十数年間、今まで発してきたどんな言葉よりも震えていたと思う。さとりはそれに答えなかったが、なによりその表情が返答していた。

あまりにやわらかで、まるで最期を悟ったかのようなその表情が。

「お、おい。何か方法があるだろう？今までの紫の計画だってことごとく打ち破ってきたじゃないか。・・・それなのに、もう諦めちまうのかよ」

少しきつい言い方になってしまったか、若干後悔の念を覚えたが、さとりは動かしているか分からない程小さく口を開く。

「私は長く生き過ぎました」

突如、魔力水晶の放つ白の光が黒く反転する。先程まで見えづらかったさとりの姿が、今度は鮮明に見えるようになった。病的に白い肌はよもや人間のものとは思えないほどであった。

「ふふふ、私は妖怪ですよ」

「・・・ああ、そうだったな」

だからこそ、『生き過ぎました』なんて言葉が出たのだろう。まったく贅沢な台詞だ。

「それに、これは私自身へのけじめでもあるのです」

「けじめ？」

「私は事も話さず貫斗さん達を裏切りました。・・・前にも似たようなことを何度かやっていましてね、だから私は地底では嫌われ者なんですよ」

勇儀達が嫌っていたのもそのせいなのか。・・・でも、今回ばかりは違う。紫を欺く為にやむなく裏切るフリをしただけじゃないか。それがどうして今回に限ってけじめだなんて・・・

「貫斗さんがいてくれたおかげで、私は本当の裏切り者にならずにすんだのです。だから、今一度お礼を言わせて下さい」

小さな体をゆっくりと起こし、そして頭を下げる。

「ありがとうございました」

「・・・感謝なんていらない」

言いたくなどなかったのに、自然と言葉が溢れ出してしまった。一度溢れた言葉はとめどなく次から次へと流れ出してしまう。

「けじめとか何とか、そんな言葉さとりには似合わないんだよ。さ

とりはいつもみたいに冷静に解決して、また地底で平和に暮らせばいいじゃないか！せっかく勇儀達とも、分かりあえてきたってのに・・・」

今まで地底で嫌われてきたさとりが漸く人と交わって暮らせるようになったかと思ったのに、こんな結末はあんまりじゃないか！

「いいのですよ。私はもとよりこのつもりでしたから、この結末を厭いたりはしません」

「さとりがよくても俺が嫌なんだよ！！」

そう、この結末でいいはずがない。

「自分さえよければどうでもいいってのかよ？俺はさとりが死ぬなんて絶対許さないからな、絶対に・・・」

思わずでてしまった言葉を抑え、拳をぎゅうと握る。わざわざこんな風に感情的になって言葉にしなくてもさとりには伝わっているのだ。荒くなりかけた呼吸を整えるため、大きく息を吸う。

「・・・もう、限界ですね」

ダメだ、さとり。

「これ以上は制御出来ません、貫斗さんの転送を始めます」

このままでは、さとりは死んでしまう。

「魔力も良好のようですね。・・・それでは、いきますよ」

何とかしなければ。何かしなければ・・・。

「・・・いままで、楽しかったですよ。貫斗さん」

「俺は」

ぐっとさとりの服を掴んで引き寄せる。突発すぎてさとりも流石に心を読めなかったんだろうな、完全に無防備だった。

突然引き寄せられたさとりがふるりと体を震わせるのが全身に伝わってくる。残念ながら引き寄せてしまった後の表情は見れないが、今まで見たこともないような驚愕の顔なんだろうな。

「さとりが好きだ！！」

引き寄せてからは何を言おうかなんて考えちゃいなかった。感情のままに何か叫んでやろう、そう思っていた。漸く分かったよ。

ああ、俺はさとりのことが好きだったんだな。

「・・・いです」

肩に顔を埋めてしまっているさとりの声は、次にははっきりと聞こえた。

「ずるいです・・・。最後の最後に、そんな、こと、言うなん・・・

」

言葉は途絶え途絶えだった。合間、啜るような声がする。まさか、さとりがそんな声をだすとはな。

「俺は心は読めない。だから、さとりの気持ちが聞きたいんだ。その口から」

抱きしめる力が自然と強まった。本当に細い体だ、このまま壊してしまわないか余計な心配さえ頭に浮かぶ程に。
肩が冷たい。厚手の布も、こんなに簡単に湿ってしまうんだな。

「私は何と答えればいいのですか・・・。正直に答えてしまったら、私は、もう、どうすればいいか・・・」

「俺は、嘘は嫌いだ」

「せっかく、閉じ込めておいたのに、口にしたら、私、私・・・」

時間が止まったみたいだった。引き寄せ合う互いの胸の鼓動だけが時の流れを示していた。
真っ白だった首筋をほんのり赤く染めて、さとりは小さく息を吸った。

「・・・好き、です」

実に短い言葉にはいろいろな想いが込められていた。耳に届くなり鼓膜で弾け、その想いは全身を駆け巡って身体を熱くした。

・・・素直に嬉しかったのだ。

まるで中学生の時好きな女の子に告白が成功したときのような純粋な気持ちだ。

どうやら俺も、想像以上にさとりを特別に想っていたようだな。

「貫斗さんと、離れるのが、怖いんです・・・」

「離れないさ、ずっとこうして抱きしめていてやる」

小さな震えがほんの少しずつ、止まっていくのがわかった。

「でも、それじゃあ、貫斗さんまで」

「いいんだ。最後に想いを打ち明けられたんだからな、もう俺にも悔いはないよ。さとりを一人で死なせたりなんか、絶対にしない」

「あ・・・わ、私、そんなこと、言わ、れた・・・初めてです・・・」

千年以上もの間、一人で寂しい思いをしてきたんだな。・・・でも、二度とそんな思いはさせない。

もう少し長い間そうしたかったのだか、どうやらそれも無理のようだ。唸るような地鳴りが、徐々大きくなっていく。

「・・・」

強く、今度はさとりの方から腕に力を入れてくる。

好きなひとをこんなに近くにしているのに、やがてこの時間は幻想となって消えてしまう。本当、この世界は不思議なことだらけだな。

今から死ぬっていうのに、夢なら覚めないでくれ！・・・なんて思

っちまう。さとりに比べたらちっぽけな人生だったが、誇れることがあるとするなら今まさにこの瞬間なんだろう。

「絶対・・・離れないで、下さい・・・」

恐らく虫の音程もない声を精一杯振り絞っているんだろう、かすれた声はより一層抱きしめる腕に力を注ぐ。

「いよいよです、貫斗さん・・・」

いよいよ。悪い意味の言葉だったっけな。それはこの現実を、いや、もしかしたら幻想なのかもしれないな、その終わりを告げる非情な言葉なのかもしれない。

擦れ合う肌が滑らかだった。この感覚も、幻想なのだろうか。

「あっちでも、楽しく暮らせるといいな」

二人の周囲を靄のような壁が取り囲む。無論、光源である水晶も共に。

「ええ、そうですね」

視界が徐々に黒い光に包まれていく。これが魔力ってやつだろうか、何と冷たいものだろう。
それでも俺は怖くはない。ずっと側に、温かいひとがいてくれるから。

「あなたに出会えて、本当によかった・・・」

苦しみはない。ただ大切なひとが側にいてくれる喜びだけがそこにはあった。

「ああ、俺もだ」

痛みさえも、最後まで感じることなく。

「・・・」

まるで、夢に落ちるように。

「・・・」

意識は光に飲み込まれた。

第十三話　貫く志

光だ。

優しい、または温かい、赤みがかった光だった。

布に絵の具を染み込ませるように光はじわじわと広がっていった。

その光には、何だか懐かしさを感じる。

ある一定の明るさになるとその光は拡散を止め、もとよりそこにあったもののように感じた。

ぼんやりと写る光。

ああ、そうか。瞼を閉じているのか。

漸く気付き、ゆっくりと瞼を開けた。

「漸く目覚めたかー。おはよーさん、貫斗」

早速目に映ったのは腰に手をあてながらやれやれといった表情でそんなことを口にする勇儀の姿であった。続いて回りをぐるりと見回してみると・・・そこはさとりの部屋だった。俺はどうやらそこのベットで寝ていたらしい。
入口の近くに置かれた二脚の椅子には炎綺、真奈が二人仲良く寝息を立てていた。

「全く心配かけやがって・・・。宴会にも顔出さないものだから慌てて探したんだぞ？」

・・・ああ、そうか。確か宴会には後で行くって言ったまま地下に向かったんだっけ。そこで俺は・・・！

「さとり、さとりはどこにいる！？」

思い出した！あの時確かに俺とさとりは魔力水晶の暴走に巻き込まれて・・・。

「おーおいおいどうしたんだよ急に大声出して・・・」

「そんなことより、宴会が始まって以降にさとりを見なかったか！？」

「あー・・・そういや見てないな。私達がこの部屋に来た時は貫斗しかいなかった」

まさか、そんな・・・。

一体どういうことなんだ？何故俺は助かって、さとりはどこにもいないんだよ。またさとりが変な小細工を仕掛けて俺だけ脱出させたとでもいうのか？最後まで、離れないって言ってやったのに・・・。

「おーい貫斗ー」

扉を乱暴に開け萃香が入って来た。寝てる人からすれば相当な騒音に炎綺は慌てて、真奈はゆったり目を覚ます。

「おいおい敵襲か！？」

「騒がしい。静かに開けて」

寝起き組から非難を浴びた萃香はごめんごめんと頭を掻いた後、
「・・・そうだそうだ、貫斗。霊夢があんたのこと探してたよー」
霊夢が・・・？もともとは敵であった彼女が今更俺に何の用があるのだろうか。流石に罠かなんかではないと思うが・・・気にならないといえば嘘になる。
そういった流れのまま、俺は萃香に言われるがままについていくのであった。

地底を抜け、程なくして紅白衣装の巫女がいた。今まで会ったときとは別人のような柔らかな表情をしていたのには驚いたが、それ以外は特別変わったところもない。
「ようやくきたわねー。全くずっとここで待ってたのよ？待ちくたびれちゃったじゃない」
「・・・なんというか、随分雰囲気変わったな」
「昨日までは気が立ってたのよ。いつもの私はこんな感じ～」
とか何とか言いながら風に靡く髪を手でとかす。気が立ってた、ねぇ。
「んで、俺に用があったんだろ？」

「あ、そうそう」

思い出したように手をポンと叩く。

「実はちょっと頼み事があってね。紫～」

不気味な低音を纏い、薄気味の悪い紫の裂け目のようなものが突如空間に現れる。この形、色、見覚えがある・・・間違いない。

「はーい、こんにちはー」

「紫！！」

忘れるものか、世界を創造するだなんて大胆な計画、プロジェクトA草案の張本人。最後まで俺達を苦しめた憎んでも憎み足りない唯一の敵。それが今更、何のつもりか！

「そんなに気張らなくてもいいじゃない～」

聞いたこともないような気の抜けた声に思わず力が抜けてしまった。なんだなんだ、人格変えるのが流行ってるのか？

「実はー、あなたに一つお願いがあるのよ～」

「・・・誰があんたの願いなんか」

チッチッチ、と舌を打ちながら人差し指を振ってみせてくる。・・・・もしかしておちょくられてるのか？

「地底の主を連れ戻して欲しい。そう言ってもあなたは断れるかしら？」

「地底の主って・・・さとりのことか！？あんた、さとりの何を知ってるんだ！」

「まぁまぁ慌てないで頂戴、ここからは私が説明するわ」

黙って見ていた霊夢がすかさず割り込んでくる。どうなってんだよこれは、何がなんだか訳が分からない。さとりを連れ戻すって、どこから連れ戻せっていうんだ？それを何故紫に頼まれなければならないんだ？そもそもなんでそれを俺に頼むんだ？

「魔力水晶が止められない程の魔力を蓄えてしまったのは、紫いわく『想定外』だった」

想定外？それはどういうことだ？

「魔力水晶の暴走をとめることは紫にも不可能だった。それを知ってか知らないか地底の主・・・さとりだったかしら？彼女は自らを犠牲にすることで被害を最小限におさえようとした」

まるで現場を見ていたような口調だった。色々聞きたいこともあっ

たが、霊夢はその隙を与えることなく話を続ける。

「その様子を見た紫は暴走の直前、境界を操る力によってあなたを人間の世界に、さとりを地霊殿に転送したのよ」

「・・・なんだって？」

「暴走は幸いさとりの構築した結界のおかげであの区画、刻印の刻まれた柱がある部屋だけで収まった。つまり、紫はあんた達の命の恩人って訳なのよ」

「それは、もとはと言えば魔力水晶なんて代物を使った紫のせいじゃないか」

「・・・それはまぁ、そうなのよねぇ」

紫が言葉を濁す。

「話がいまいち見えてこないな。そもそも俺は元の世界に転送なんてされちゃいなかったし、さとりだって地霊殿のどこにもいなかった。一体何のつもりなんだ？」

「そんな怖い顔しないでよ～。魔力の暴走が思ったより早いものだから、焦って転送先を入れ替えちゃったのよぉ」

「入れ替えた？・・・つーことは、さとりはもしかして・・・」

「そう、人間の世界よ」

・・・驚いた。つまり、元の世界からさとりをこちらの世界に連れ戻せってことか。まさかこんな形で元の世界に戻ることになるとはなぁ。

・・・勿論、この申し出を断るつもりはなかった。

「その顔は、引き受けてくれるのね。よかったわぁ、あなたが引き受けてくれなかったらどうしようかと思ったのよ？」

「でも一つ教えてくれ。敵であるあんたが、何故俺達を助けたりしたんだ？」

その問いには、恐ろしいほどの笑みを零して答えてくれた。

「あんないいもの見せてくれたら、助けたくなるのが人情じゃないの～」

「・・・な、なな！！」

こ、こいつ・・・見てやがったのか。色々言い返したいところだが、ダメだダメだ。今喋ったら声がひっくり返る自信満々だぜちくしょう。

「ま、そういうことだからはいこれ」

といって手渡されたのは、小さな水晶のようなものだった。色艶からいってもあの魔力水晶と同様のものだが、サイズはふたまわりほど小さい。何に使うんだ、これ。

「それを地底の主に見せればこっちの世界に戻ってくるわ。ということで、早速あなたを元の世界に転送しようと思うけど・・・準備

は大丈夫？セーブはした？」
「・・・セーブはしてないが、準備は大丈夫だ」
「あら、恐ろしい魔物に出会っても知らないわよ～？」

こいつは俺をどこへ飛ばす気だ。

「ほら紫、ふざけてないでちゃっちゃと転送してやんなさい」
「りょうかーい。それじゃ、いくわよー」

視界が光に埋まる。続いて意識も真っ白に染まっていく。以前霊夢が行った転送と同じような感覚だ。砂を崩すように意識は薄れてゆき、やがて消え去った。

うずくまっていた。

忘れかけていた不安や恐怖に押し潰されそうになりながら、私にできることと言えば膝を抱えてひたすら潰れてしまわないように耐えること。

木製の床。服越しでも冷えた床は冷たいというのに素足は尚更だ。吐き出す息は白い。地底は年中温かいから、この気温は体に堪える。

誰もいない。一人ぼっち。そんなこと、とうの昔に慣れてしまったはずなのに。何故だろう。心の奥底に鎖で縛り付けていたはずの不安、恐怖、精神の弱い部分全てが全身にとめどなく溢れ出して。まるで、不安という名の冷たい生物が体中をはいつくばっているように、不快。

「最後まで離れない」

冷たい部屋。素足は、みるみる感覚を失っていく。

「そう、言ってくれたのに・・・」

呟くと、余計虚しくなった。なんて自分勝手なことを言っているのか私は。これは彼の意志ではない、無論私の意志でもない。頭では解っているはずなのに、心をにぎりしめられているような気がして、苦しい。

変な気分だ。心がおかしくなりそう。

人も妖怪もいないこの空間で、何を恐れているのだろう。人の心が分かっても、自分の心が分からないとは情けない。まるで、体から心だけ切り離されてしまったようだ。
ただ、一つだけ強く浮かぶ言葉があった。なにより単純で、短い言葉。我慢できなくて、口から零れ落ちてしまった。

「あいたい」

どうしてしまったのだろう、私は。自分が自分でないようだ。波打つ心が私から離れていくのか、それとも私が心から離れていってるのか。そんな簡単なことも分からないまま、ただ私はじっと膝を抱える。それが今、私に残された唯一の選択肢に思えたから。

「よう、どうしたんだよ。そんな格好で、柄でもない」

その声は、この冷え切った世界を暖めるのに十分なものだった。

「・・・あ、そうか。そういや地底と違って今は冬だったな。ほらよ」

そう言って彼は私に上着を、まだ温もりの残るそれをそっと膝にかけてくれた。初めて出会ったあの日、ずぶ濡れになっていたコートを。

彼がここへ何をしにきたか、何を思って今ここにいるのか、私には分かる。
そう、私には分かるのだ、何人が何を考えようと、何を想おうと、何を感じようと、心に聞こえてくるのだ。

だからこそ、私は彼の考えが怖かった。臆病な話だと私も思ってはいる。また、自分勝手な話だとも思う。それでも、いくら人の心が読めるとしても・・・いや、人の心が読めるからこそ並でない格別な恐怖が生まれるのだ。

「二人で戻ろう。そして、また仲間達と楽しく暮らそう、ですか」

彼は驚く仕草一つ見せることなく私の言葉に耳を傾けている。

「・・・そうですね、そうすることが出来れば、どんなに幸せなことでしょうか」

私は膝にかかったコートに袖を通し、漸く立ち上がる。長く座っていたせいで足に力がうまくかけることができず、中腰になったあたりで後ろにふらついたがすぐに立て直す。

「ですが」
「もう、未練はないさ」

・・・嘘をつきますか。
二十年間生き過ごした世界に未練がなく、たった二週間過ごした世界を選ぶ。
そんな人間が果たしてどこに存在しようか。いや、いるはずがあるまい。彼には彼の家庭があり、生活があり、人生があるのだ。一時の感情で破壊されていいものでは、決してない。
ましてや、私の我が儘な想いの為に・・・。
全く、下手な嘘を・・・！？

「どうやら、気がついたみたいだな」

まさか、そんな

「残念だが俺には家族はいない。仕事はあるが、所詮は食いつなぐためのやむを得ないもんだ。おっと、残念ってのは訂正かな」

だから、彼は

「地底に戻って誰がこの世界を未練に残そうか、この世界に戻ったらどれだけ地底に未練を残そうか。そんな簡単なこと、心を読まなくても分かるんじゃないか？」

・・・この短期間で、貫斗さんには随分私のことを見透かされてしまったようだ。
それに比べて、心を読むことで本心を探る私は彼の本質を未だ理解出来ていないのかもしれない。その彼が人間というのだから驚いたものだ。そして、そんな人間に対して私が抱く感情は、

「・・・あの時の約束を全うしてくれるんですね」
「ああ。まー、流石にさとりが死ぬまでってのはきついかもしれないけどな、寿命的に」
「たった数十年ですからね。でも、貫斗さんは長生きしそうです」

「おう？なんでだ？」
「あんな妖怪だらけの地底で二週間も生き延びることが出来る人間なんて、そうはいませんよ？」
「ま、案外いいやつばっかりだったもんな」

違う。

恐らく彼に出会った強大な者達は、偏見や恐れを見せず対話しようとする彼の姿勢に興味を持ったのだろう。私達妖怪は興味のない人間は食物程度にしか考えないが、一度興味を惹いた人間に対しては殺すことはなく、ましてや食料にすることなどなく、対等な存在として扱い始める。

私も、そうだった。

だから決して私達妖怪は人間から見て『いいやつ』ではない。喰う時は喰い、襲う時は襲い、争う時は争う。それが人間の中に構築される偏り歪んだ正義とは遠く掛け離れた物だということは火を見るより明らかだ（だからこそ人間は妖怪を畏怖するのだが）。
ましてや人間を殆ど拒絶している地底空間に彼を閉じ込めてしまうことは、果たして彼にとって正しい選択なのだろうか。
今更臆病風に吹かれるというのも笑える話だが様々なことが思考を

過ぎる内、私は最後の一言に踏み切ることが出来なくなっていた。

「浮かない顔してんなぁ。厄介事は全部終わったんだ、何を今更悩んでるんだ？」

彼にも分かる程表情が沈んでいたらしい。

「・・・貫斗さんは、本当にこれでいいんですか？」

「というと？」

首を曲げて聞き返してくる。

「二人で地底に戻ることが、本当に貫斗さんにとっての正解なのでしょうか？人間の世界から存在そのものを断つことが、果たして正しいことなのでしょうか」

勿論心は読んでいた。しかし、どうしても彼の口から言葉として聞きたかった。

「・・・分からない」

彼の瞳は真っすぐに私をとらえていた。

「けど、これだけは言える」

静かに、彼は口を開いた。

「さとりと二度と会えなくなるなら、俺はこの先絶対に後悔する」

「・・・」

胸が熱かった。こんな想い、彼と出会うまでは一度きりもなかったというのに、本当に彼は不思議な人間だ。だからこそ、皆が彼を受け入れ、そして私も彼のことを。

「戻りましょう、地霊殿へ」

そして、二度とその部屋に人間の訪れることはなかった。

第十三話　貫く志（後書き）

初さとりさん視点のあるお話でした。蛇足感は否めませんが、この話があって漸く完結に持っていける・・・はず

最終話　愁眉の開ける日々

幻想郷の地上では、紫が気持ち悪いくらいの笑顔で迎えてくれた。
彼女に出会ってすぐのさとりはあからさまに不機嫌な顔をしていたが、紫に持ち掛けられた話にすっかり目を丸くしてしまうのだった。

「地上と地底の不可侵条約を破棄しようと思うんだけど～」

紫が持ちかけた案は、言葉の通り不可侵条約の破棄であった。地上の賢人であろう紫と地底の主であるさとり、この二人が承諾したのであれば破棄は現実のものとなるだろう。しかしそれをして彼女に一体何のメリットがあるのか、そう考えたのはさとりも同じようだった。紫はそんな俺達をあっさりと驚愕させるようなことを言う。

「地底と地上の者が手を取り助け合い私に挑んでくる姿・・・なかなか素敵だったわよ。この様子なら、もう地底といがみ合う必要もないと思うのだけれど、どうかしら？」

始めからそれが試したくてこんな騒動を起こしたのか、そう問うと彼女はうふふと気味の悪い笑みを浮かべて手を差し出した。
さぁ地底の主さとり、契約を破棄し、これからは互いに手を取り合いませんか、と。

笑うしかなかった。
これは後から聞いた話だが、地上の妖怪は今でも地底の妖怪を嫌っている者が多いそうだ。それになんとしても調和の手を施したかった紫は、自ら悪者を演じ、それを打倒すべく手を取り合う地上と地底の者達を、地上の全ての妖怪達に見せたかったのだという。本当紫って奴は、大した妖怪だよ。

「おっかえりー貫斗！！」

地底に戻った俺達を最初に待っていたのは四天王による手厚い歓迎だった。テーブルにはぎっしりと酒やつまみが並べられ、真奈が今にも飛びつきそうな顔で腕を縛られていた。まぁ、苦労したんだろうな他の三人は。

「二人も無事に帰って来て、ハッピーエンドって寸法だ！めでたい、めでたい！」
「そんな二人の為の酒宴だ！無限に酒の湧く瓢箪もある、好きなだけ飲んでくれい！」

しかしこの人達ハイテンションである。・・・なんだか少しだけ懐かしい感じもするな。

「ほらさとりさんも、そんなところで見てるだけじゃ人生の半分は損するよ？」
「わ、私は酒宴は・・・」
「いーからいーから、今日の主役なんだ、派手にいこうじゃないか！」

と、勇儀に強引に腕を引っ張られていくさとり。なんとも新鮮な絵である。

「さぁお待ちかね！異変解決祝い酒宴イン地霊殿、始まりだ！」

酒宴はつまみの殆どが真奈の胃袋に吸い取られてしまい、無限に酒の湧く瓢箪のおかげで中盤から酒オンリーの酒豪決定戦が始まった。早々に降りさせて貰いたかったが、何と言うか、酒盛りの場ではテンションも上がっちまうからなぁ。腹はもう一日水分を受け付けないくらいに酒でタップンタップンしちまっている。結局誰が勝ったんだか。

さとりはそんな俺達の様子をうっすら微笑みながらしばしば酒に口をつけていた。あまり得意ではないんだろうな、量もそれほど呑まなかったし、ペースも実にゆったりしたものだった。

「いやぁ、やっぱり宴はいいもんだな。しばらく酒は見たくないが」

さとりの部屋。俺はベッドに腰をかけ、同じく腰かけるさとりに話

し掛ける。

「ええ、そうですね」

その時のさとりはなんとも言い難い神妙な面持ちだった。

「どうしたんだ？・・・無理矢理誘われて、やっぱり面白くもなかったか」

「いえ、そんな、まさか」

慌てて否定してくる。

「・・・あんな風に宴会に誘われたのは初めてなんですよ。普段なら宴会を止める側の私が、まさか彼女達と交ざって酒を交わすとは」

悔意ともとれる言葉ではあったが、さとりの表情はいつにも増して豊かだった。

「色々あったけど、勇儀達も漸くさとりと親交を深める気になったんだろうよ。あいつら、見た目はああだけど中身はいいやつらだからな」

「平気で立入禁止区域に侵入したりしますけどね」

「そ、そりゃまぁたまにはそんなこともするかもしれないけどさ」

「・・・ふふふ、どうでしょうね」

その後、俺は本当に楽しい日々を送ることになった。不可侵条約が破棄されたことにより地上の人間や妖怪がちょくちょく遊びにくるようになり、その度に友人が増えるものだから困ったものだ。
地底での生活は結局さとりの部屋を借りる形でおさまっている。空き部屋もあるといえばあるらしいが、いつ危ない妖怪に襲われるか分からないからというさとりの配慮である。いざとなったら守ってくれよ、そう告げるとさとりは小さく頷いてくれた。まぁあれ以来事件も起こってはいないし、比較的地底は平和である。無駄な心配ってやつだな。

勇儀達はあれからもいつも通りだった。週二ペースで酒盛りをしては温泉巡りに誘われたり、時には地上に観光へ行ったりなんてこともあった。俺が地底に来たばっかりの時との唯一の違いといえば、そこにさとりが加わることがあることだろう。すっかりこの六人メンバーは定着し、地上を訪れると自然と人が集まってきたりする。それらを巻き込んでその場で酒宴を開く勇儀達の行動力には脱帽ものだな。

燐や空はあれから随分地霊殿に顔をだすようになった。宴会をやっ

ていればそれにゲスト参加するようにもなったし、地上の友人も出来たらしいな。勿論俺達から二人の管轄に押しかけて好き勝手宴会を開くこともあるが。

霊夢や魔理沙は相変わらずだ。宴会の臭いを嗅ぎ付けてはふらふらとやってくるし、異変が起きれば我先にと解決しにいく。先日も宝船がどうこうとか言って空へ飛んでいくのを見た。・・・あいつら本当に人間なのだろうか。

ある日、俺は紫と二人で話をする機会を得た。向こうからの申し出だが都合がいい、俺にも二、三聞きたいことがあったしな。

地上の博麗神社で待ち合わせるよう言われていたので、言われた通りの時刻に訪れてみる。

「あら、久しぶりねぇ。ただの人間が妖怪だらけの地底で暮らしてまだ生きているなんて、私驚いちゃうわ～」
「さとりにも同じこと言われたよ。・・・おかげさまで元気にやっている」

その日は雲一つない気の晴れるような快晴で、風も穏やか。未だ冬だと言うのにまるで春の陽気だ。

「二人きりで話があるって言ってたが、霊夢はいないのか？」
「ええ、霊夢なら異変解決に行って留守よ～。だから貴方と二人きり、のぉーんびりお話ができるのよ～」

・・・しかし話しづらい相手だ。

「あ、ああ。で、何なんだよその話したいことって」

夏の日差しを受ける向日葵のようだった笑顔を急にしぼませ、雨の日の子供みたいな顔で俯き加減になる。

「この幻想郷に貴方を迷い込ませたのは私なのよ」

「・・・は？」

端から見れば俺は相当のぽかーん顔だったことだろう。無理もない、今更そんな大胆な告白をされて驚くなというほうが無理な話である。そんな俺の表情を見てか見ないでか、紫は声のトーンを落として言葉を続ける。

「意味はそのままよ。貴方が今ここにいるのは、人間の世界から貴方を幻想郷に転送した私のせいなの」

「いや、それは分かるが・・・何故そんなことをする必要があったんだ？それもうん億といる人間からわざわざ俺を」

「ええ、まぁ、色々理由があるのよねぇ」

それから紫は全てを包み隠さず話してくれた。

第一に、人間を呼ばなければならなかった理由だが、地底の主であるさとりと接触させ、地底内の者と、更には地上のものと繋がる懸け橋の役目を担って貰いたかったらしい。実際紫の思った以上にその役目を全うしてくれたと称賛めいた言葉も受けたが、そんな意識はないんだがね。

第二に、呼ばれる人間が俺でなければならない理由だが、驚くことに本当にテキトーに決めたらしい。あのバスを待っていた時間帯、たまたま調度良さそうな青年を見かけたものだからそのまま幻想郷送りにしたというから驚きを通り越して呆れてしまう。まぁ、何と言うか、普通に考えたら恐ろしい話だよな。

「・・・もし」

神妙な面持ちで紫は切り出す。

「この世界が辛くなったらいつでも言いにきなさい。その時は私が責任をもって貴方を元の世界に帰してあげるわ」

・・・。

何かと思えば、そんなことか。

「心配には及ばないよ」

この幻想郷には大切な仲間が沢山いる。元の世界では到底得られることのできない、心の底から信頼できる仲間が。

「俺はこの世界を、幻想郷を愛してるからな」

「そう」

まるで母親が安心したような、温かい笑顔でこう言った。

「それならよかった」

俺を勝手に幻想郷に連れ出したこと、紫なりに責任を感じてたのかもしれないな。だが、今やそんなこと気にもしていない。寧ろ感謝しているくらいだ。

「・・・そういや、お前も宴会に顔出せばいいのに。さとりは勿論勇儀達も、一連の騒動に関してはもう気にしてないみたいだしな」

「私はいいのよ。・・・例え許されたとしても、私はしてはいけないことをした。危うくあなたたちを殺すところだったのだから」

そんなことはない、もう済んだ話をするのはよそう、そう言いたかったが、次の彼女の顔が不気味なまでに頬をつりあげ笑っていたものだから言いそびれてしまう。紫は例の怪しい境界を空中に作り出すと、体をごっそり入れて首だけになると

「ま、そんな風に言われただけでも嬉しかったわ。やっぱり貴方、ただの人間ではなかったみたいね、あらためて彼女確認できたわ」
「正真正銘普通の人間だ」
「それじゃ、また～。地底の主とお幸せに～」

不敵な笑みでそんなことを言いながら紫は完全に境界の中へ没落すると、やがてその境界そのものもノイズのような不気味な低音を漏らしながら消え去った。

なんだか嵐みたいな奴だったな。おちょくるだけおちょくって、言いたいこと言ってさっさと帰る。タチがいいんだか悪いんだか・・・。

まぁでも、あれが紫なりの謝罪だったんだろう。テキトーな奴に見えるが、意外と律儀なのかもしれない。・・・ま、実は何も考えてないのかもしれないが。

「おかえりなさい貫斗さん。随分遅かったですね」
部屋に戻ると何をするでもなくさとりは椅子に腰掛け背もたれに体をあずけていた。まるで俺の帰りを待っていたようにも見える。
「ああ、ちょっと話が長くなっちまってな」
神社を出た頃にはすでに日は傾き、地底に入る頃にはもう真っ暗だ。外はもう真夜中だろう。
俺はベッドに座り込み、そしてさとりを眺める。そうするといつもと同じ、微笑んでるんだか無表情なんだか分からない位の表情で視線を返してくる。今日も、普段通りだな。
「・・・ありがとうございます」
突然、さとりの唇がそんな言葉を紡いだ。
「んあ？突然どうした？」
「いえ、私の独り言ですよ。今日はもう寝ましょうか、明日は貫斗さん、鬼達と温泉巡りと言っていましたよね」
「ああ、勿論さとりも一緒にな」
すると、明らかに頬を赤く染めて
「私は、その、温泉はちょっと・・・」
「まぁ、だよな。平気で一緒に飛び込んでくる勇儀達がどうかしてるもんな」

「ええ、でも・・・」

・・・でも？

「でも、貫斗さん達となら・・・楽しいかもしれませんね」
「お？それはどういう」
「さ、今日はもう寝ましょう。寝不足は妖怪の敵ですからね」

目を閉じると心が鎮まった。さとりの立てる微かな息も、自分の心音も、普段は聞こえない音が時計の針のようにはっきりと聞こえる。

「ずっと」

それらの音に比べ、さとりのその声は大きすぎた。思わず肩を震わしてしまう。

「・・・傍に、いてくださいね」

「どうしたんだ？急にしおらしくなったな」

「・・・」

睡魔が脳を支配し、思考が止まりそうだった。それでもその一言は、不思議と口から溢れ出した。そしてその言葉は、俺の心底で一生変わらない真理であった。

「死ぬまで、離れないさ」

最終話　愁眉の開ける日々（後書き）

ここまで読んで下さった皆様、長い間お付き合いくださり本当にありがとうございました。無事執筆し終えたのは皆様の応援があってこそです。感謝してもしたりない程です。

今回で最終話となります。後日談等は今の所考えておりません。原作とは大分掛け離れて読者の皆様を混乱させることもあったかもしれませんが、よろしければ感想やレビューで何か足跡を残して下さい。次回からの執筆作業の参考にさせていただきます。

それでは冒頭と重複してしまいますが、今までご愛読なさっていただき本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7169f/

少女さとり ～ Saint Girl's Territory

2010年10月11日19時38分発行